

序にかえて

東京文化財研究所所長の齊藤孝正でございます。本日は、第 16 回無形民俗文化財研究協議会へお越しいただきまして、誠にありがとうございます。

当研究所無形文化遺産部では、無形民俗文化財の保存や継承に寄与することを目的といたしまして、毎年無形民俗文化財研究協議会を開催しております。第 16 回目となります本年は「映像記録の力ー危機を乗り越えるためにー」をテーマといたしました。新型コロナウイルス感染症は無形民俗文化財に大きな影響を与えつつあります。特に祭りや民俗芸能などは実施が困難となっており、今後の継承が危機的な状況にあるところも少なくないようです。昨年度の協議会では、こうした問題を「新型コロナ禍の無形民俗文化財」というテーマで取り上げさせていただきました。しかしこの問題は、現在もなお継続しております。

そこで今年は、コロナ禍を乗り越えるための一つの手段といたしまして、映像記録を取り上げることにいたしました。もちろん映像記録には、新型コロナ感染症対策のみならず、学術的記録や一般への普及といった役割もございます。本研究所では早くから映像記録に関する課題に取り組んでおり、平成 20 年（2008）には『無形民俗文化財映像記録作成の手引き』を刊行いたしました。この手引きは、文化財行政に関わる方々をはじめ多くの方々にご利用いただいているかと思います。ただ、映像技術の進歩は著しく、現代に適した映像作成の指針が求められていることも事実です。そうした映像記録に係る諸問題につきまして、本日ご登壇の皆さま、ご出席の皆さまからも新たな方向性をご提示いただきたいと思います。と思っております。

また本協議会は、国立歴史民俗博物館の令和 3 年度共同研究「映像による民俗誌の叙述に関する総合的研究ー制作とアーカイブスの実践的方法論の検討ー」とも連携しております。本日はその代表を務めておられます村上忠喜先生をはじめ、共同研究のメンバーの皆さま方にご参加いただいていることを、心から感謝申し上げます。本日の協議会では、さまざまな情報共有と活発な議論が行われることを期待しております。

以上をもちまして開会のご挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

（令和 3 年度「第 16 回無形民俗文化財研究協議会」開会の辞より）

東京文化財研究所所長 齊藤孝正

目 次

序にかえて

趣旨説明① 1

久保田 裕道（東京文化財研究所）

趣旨説明② 5

村上 忠喜（京都産業大学）

第 1 部 発表

事例報告「コロナ禍における映像活用の取り組み」 7

鈴木 昂太（東京文化財研究所）

問題提起「今、映像記録に求められること」 15

川村 清志（国立歴史民俗博物館）

発表① 3点セットの映像記録製作 23

－あげお文化遺産ガイドから－

関 孝夫（埼玉県上尾市教育委員会）

発表② コロナ禍における記録作成事業 35

－島根県での取り組みから－

石山 祥子（島根県教育庁文化財課古代文化センター）

発表③ 動画配信の影響力 47

－静岡県掛川市の三熊野神社大祭を事例として－

谷部 真吾（山口大学）

発表④ テレビで届ける。楽しく伝える。獅子魂流映像活用法！ 55

大島 信彦（獅子魂プロジェクト）

第2部 総合討議

63

コメンテータ	森本 仙介（奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存課） 村上 忠喜（京都産業大学）
パネリスト	川村 清志・関 孝夫・石山 祥子・谷部 真吾・大島 信彦
コーディネータ	久保田 裕道（東京文化財研究所）
総合司会	後藤 知美（東京文化財研究所）

参考資料

86

趣旨説明①

久保田 裕道（東京文化財研究所 無形民俗文化財研究室長）

皆さまおはようございます。本日はお足元の悪い中、足をお運びいただきましてありがとうございます。最初に主催者の久保田から趣旨説明をさせていただきます。その後、今回ご協力いただいている共同研究の代表の村上先生からお話をいただきます。2人で10分の時間配分としてしまったので、時間の都合上、駆け足でお話をいたしますけれどもご容赦ください。

1. 映像記録をめぐる課題

今回の協議会は映像記録をテーマにしております。昨年は、コロナ禍において無形民俗文化財がさまざまな影響を受けているということで、それに対してどういう取り組みをされているかという実践例を各地の皆さんにお話しいただきました。今年は、新型コロナ感染症の問題も考えつつ、具体的にどんな試みができるかということで、映像を取り上げるということにさせていただきました。

映像記録をめぐる問題は非常に多岐にわたっておりまして、図1にざっと思い付く限りのものを挙げました。考えているいろいろな言葉が出てきまして、本当に多岐にわたるものだなと思っております。

私は、映像をめぐる問題には、非常に簡単に考えると3つの段階があると考えております。たとえば、本を作ることに置き換えて説明しますと、まずは原稿を執筆するという段階がある。それから、執筆した原稿をもとに本を編集していくという段階があります。そして、できあがった本を本箱に入れる、あるいは書店で売る、あるいは図書館に入れるといった段階になる。それは映像にも当てはまることで、図1で言うと、①準備／②撮影と編集／③公開方法・④保存と活用という3つの過程に分けられます。これら3段階で生じる問題は、それぞれに異なる方向性なのかなと思っております。

これから、発表者の方々にお話をうかがい、また会場の皆さまにもおうかがいしたいと思うんですけど、おそらくたくさん話題が出ると思えます。映像の話で研究会などをやると、いろいろな方向性の話が混じり合ってきますので、混乱してしまうことが多いんですけども、それがどのような方向性の話なのかを明らかにしながら、進めていければと思っております。

1. 映像記録をめぐる課題

- | | |
|-----------------|-------------|
| ①映像製作の準備 | ③公開方法 |
| ・製作者の決定と製作コンセプト | ・公開方法 |
| ・対象範囲の設定とシナリオ作成 | ・言語解説の併用 |
| ・伝承者や監修者との関係性 | ・学術的記録と普及映像 |
| ②撮影と編集の技術 | ④保存と活用 |
| ・撮影技術 | ・映像の保存 |
| ・編集技術 | ・映像の評価 |
| ・新技術の応用 | ・アーカイブ |
| ・権利問題 | ・ネットワーク |

図1

2. 映像に関する支援事業

昨今、映像に関する支援事業もたくさん行われるようになりました。大きなものの1つとして、昨年度募集された文化庁の「地域無形文化遺産継承のための新しい生活様式支援事業」があります。具体的にどのような事業が考えられたのかということ、図3の支援内容のところに書かれておりますよう

に、たとえばPR動画の作成とか、専用サイトの開設ですとか。このあたりの問題というのは、記録映像を作ることよりも、それをどうやって発信していくかという課題だと思います。そもそもこの支援が出てきた背景には、コロナ禍において無形民俗文化財がどんどん中止に追い込まれ、そのままやめてしまうのではないかという危惧があります。それに対して、どうやって支援したら良いのかという具体策として、こうした支援も出てきているのではないかと思います。

令和3年度も、まだこれは新聞記事になったばかりで具体的にはどうなるのかわかりませんが、図4のような形で映像のオンライン配信といったものに対して、支援が付くようだとされています。ですから、記録作成はもちろんですが、特に映像による発信の部分をどう考えていくかということも重要なのだと思います。

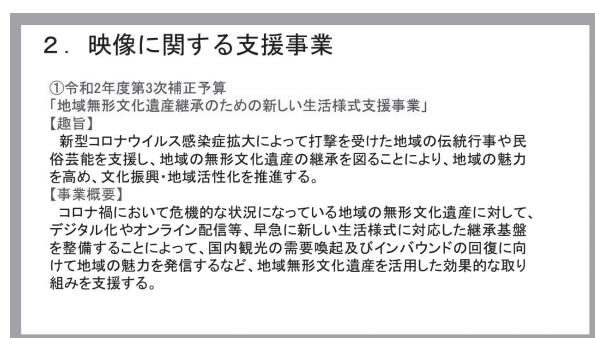


図 2

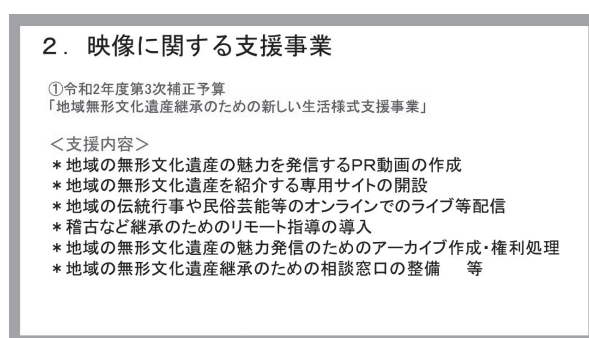


図 3

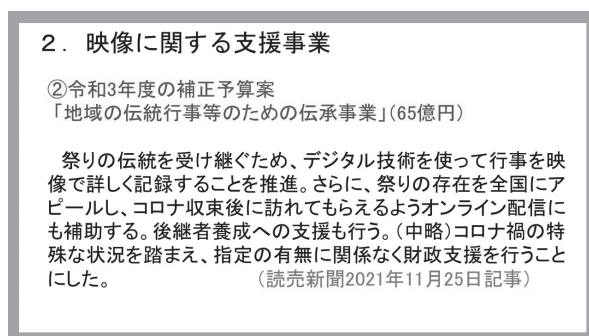


図 4

3. 危機を乗り越える映像とは何か

それから今回のテーマ「危機を乗り越える映像とは何か」ということで、具体的にはこれからのご発表に出てくると思いますが、とりあえず前提となる要点をまとめてみました。

まず記録作成に求められることということで、いわゆる3点セット方式などと関係者の間で言われている方法論があります。図5は山路興造氏がまとめられたものですが、大まかにその概要が記されていますので、ご参考にしていただければと思います。

その一方で、発信のほうですけれども、図6は昨年の協議会で香川県の十川みつる氏から出されたものです。十川氏が会長を務める讃岐獅子舞保存会さんは、獅子舞の伝承団体を多数呼んで演舞を行ってもらう「獅子舞王国さぬき」というイベントを例年対面で開催しているのですが、2020年はオンライン配信で開催されました。

それから、図7も昨年の協議会で東京讃岐獅子舞の中川あゆみ氏からお話いただいた話題で、オンラインツールを使って練習をするという試みです。このような試みも映像を使った1つの事例として考えられるかと思います。

そして、図8は2年前の協議会で縦糸横糸合同会社の山田雅也氏よりお話していただいたものですが、記録とは別に魅力ある映像を発信していかないとなかなかその魅力を感じてもらえないということで、民俗芸能のPVのような映像を制作する試みでした。図8は、お話のごく一部ではありますが、このような考えの下に作っておられるという事例です。

3. 危機を乗り越える映像とは何か

①記録作成に求められること

*3点セット方式

近畿地方では関係行政機関の担当者や研究者、実際に撮影を行う業者などが集まって、映像記録作成のあり方を検討していた。その結果、〔一般編〕〔記録編〕〔継承編〕という目的の異なる3種類の映像記録をつくるという考え方に行き着いた。主に滋賀県や京都府などで実行された。通称この方式を「3点セット方式」と呼んでいた。〔一般編〕はこれまでのように現在の人を対象に、わかりやすくまとめたナレーション付きの短めの映像で、〔記録編〕は、時間に関係なく、行事の準備段階から最後までを記録したものである。また〔継承編〕はそれを伝承している人々に活用してもらうためのもので、本番とは違う別の機会を設けて記録撮影が行われた。

（山路興造「無形文化遺産の記録保存における歴史と課題——無形民俗文化遺産を中心に——」『日本印刷学会誌』53-2）

図5

3. 危機を乗り越える映像とは何か

②映像発信に求められること

*オンラインイベント

例年の獅子舞王国は、60団体ぐらいがとにかく朝から夜まで自分たちの獅子舞を披露する、お客さまはそれを見て楽しむというイベントです。けれども今年はそういうわけにはいきませんので、せっかくなのでオンラインでしかできないことを行いました。たとえば、香川県の讃岐の獅子舞をもう少し知ってみたい、知ってもらおうという意図で、シンポジウムとまではいきませんが、「讃岐の獅子舞とは何だろうか」というテーマで座談会をしました。また、これは事前収録だったんですが、僕らが使用する獅子頭や油車などの道具を作る職人さんの生の声を聞きたいということで、道具に対する思いや道具の歴史、という経緯で職人さんになったのかというお話を収録して出していきました。

次に、香川県の獅子舞は全国に伝播しています。その中から今回は、北海道と宮崎県に伝わる讃岐の獅子舞を、ぜひ地元香川の人にも見てもらうとともに、県外で保存している人たちにも香川との交流を持ってもらうということで、北海道虻田郡洞爺湖町の月浦獅子舞さんと、宮崎県児湯郡農町の松原獅子さんにご出演いただきました。

（十川 みつる「コロナ禍における讃岐の獅子舞と『獅子舞王国さめぎ』」『第15回無形民俗文化財研究協議会報告書 新型コロナ禍の無形民俗文化財』）

図6

3. 危機を乗り越える映像とは何か

②映像発信に求められること

*オンラインツールを利用した練習

まずは練習について、どうやってオンラインツールを活用していけば良いのでしょうか。このコロナ禍で集まらない、集まらないから練習ができない、練習ができないから継承者が育たない。これって、そもそも地方にあった課題と似ていませんか。継承者がいないから練習ができない、練習ができないから人が集まらない。この課題を解決するのがオンライン会議ツールです。

（中川あゆみ「東京讃岐獅子舞のオンライン活用」『第15回無形民俗文化財研究協議会報告書 新型コロナ禍の無形民俗文化財』）

図7

3. 危機を乗り越える映像とは何か

②映像発信に求められること

*民俗芸能の魅せ方—情報やイメージの整理と再発信

われわれが考えているテーマがあります。まず、「①知ってもらうために必要なことはなにか」。その次に必要なのは「②興味関心を持ってもらうためには」。③足を運んでもらうためには。④楽しんでもらうためには。そして⑤伝えてもらうためには——楽しんでもらった人、見た人に「これ、すごかったよ」というように魅力を伝えてもらうにはどういった方法が必要なのか。最後は「⑥好きになってもらって、今後ファンになってもらうためにはどうしたらいいか」ということを常に考えるようにしています。正直われわれのような外の人間ができることというのは①②、頑張って③だと思っています。④～⑥というのは現地側の人、伝承者の人たちの協働・協力がなければ、恐らく難しいと思います。

（山田雅也「無形文化遺産の魅力ある見せ方」『第14回無形民俗文化財研究協議会無形文化遺産の新たな活用を求めて』）

図8

4. おわりに

このように、映像記録をめぐる課題には、大きく分ければ記録作成に求められること、映像発信に求められることの2つの観点があり、それぞれに異なる問題点があると思います。本日は、その両方にまたがって話が進んでいくのではないかと思います、このあたりを念頭にお話を聞いていただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

非常に雑ぱくではございますけれども、趣旨説明の一つとさせていただきます。ありがとうございました。

趣旨説明②

村上 忠喜（京都産業大学）

はじめまして、京都産業大学の村上と申します。今回、東京文化財研究所の無形民俗文化財研究協議会様とご一緒させていただいて、東日本大震災、そして今進行中の新型コロナウイルス禍における、全国各地での民俗文化財の危機的な状況を受けて、映像記録がどのような役割を果たせるのか、その可能性を考える会に参加させていただいたことに改めてお礼申し上げます。と申しますのも、今年度から3年間の予定で、国立歴史民俗博物館におきまして、「映像による民俗誌の叙述に関する総合的研究—制作とアーカイブスの実践的方法論の検討」という共同研究会を行うことになりました。私はその研究会の研究代表者を務めさせていただいております関係もあって、今回無形民俗文化財研究協議会様の研究計画に乗らせていただいたわけです。

1. これまでの民俗文化財に関する映像記録作成

私どもの研究会では、ここ20年あまりの間に全国で作成されてきた民俗文化財記録映像の成果を検証することを通して、「民俗を記録する」という営為、換言すれば「映像による民俗誌作成」とは何かを検討することを第一の目的として議論をはじめました。

民俗文化財の映像記録の方法論の検討は、ここ東京文化財研究所などが中心となって進められ、平成20（2008）年に出された『無形民俗文化財映像記録作成の手引き』では、④広報・普及、⑤伝承・後継者育成、⑥記録保存という大きく3つの目的に沿って作成すべきであるという結論に達し、その方法論が検討されてきました（図1）。

映像記録の作成目的の明確化は、誰のために作成するのかということに直結します。この点を乱暴を承知で区分すれば、④広報・普及は一般社会、あるいは民俗芸能を享受する人たち。⑤伝承・後継者育成は民俗芸能はじめとする民俗文化財を担う人たち。⑥記録保存、これは民俗文化財を含む地域総体の記録という意味で使いますが、これは民俗学の研究者、もしくは後世の人たちを視聴対象としていると言えるのではないのでしょうか。

これまでの映像記録に関する議論では、民俗芸能が中心的な議論の対象であったということから、主に⑤伝承・後継者育成についての方法的な検討が進められてきました。その反面、ほぼ手付かずのまま放置されているのが、⑥民俗文化財を含む地域総体の記録のあり方の検討であります。

そこで本共同研究においては、⑥に関しての検討を進めることから始めようと考えたわけです。

図2は、かつて本研究所におられた俵木悟さんの論考からの引用ですが、昭和63（1988）年を境にして、テキストベースの記録より映像記録が量的にも上回ってきたことが示されています。当然それは、撮影・編集機材の発達によるものであります。デジタルビデオ機器による撮

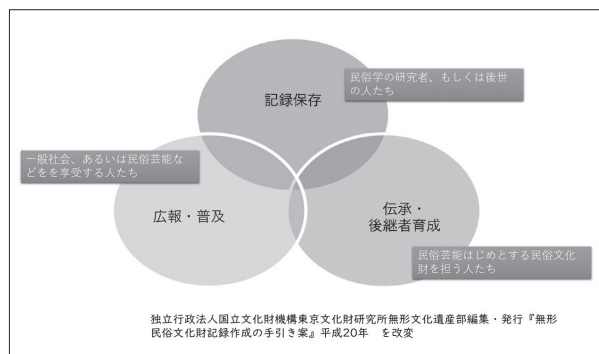


図1

影機材の小型軽量化や画像音声同録技術などによって、時間あたりの撮影や編集価格が、フィルム時代に比して格段に低下したことが最大の理由です。これによって、ほぼ完全に映像撮影会社の独断場であった撮影・編集が、発注者側である民俗文化財担当者の意向を反映できる余地が生まれたのです。

記録媒体の発達に関しては、記録の複製が容易になったことと同時に、記録されるデータ容量が格段に大きくなったことが挙げられるで

しょう。特に後者は、映像記録そのものの量的、質的変換を招来してきました。

ただ、撮影・編集機器の進化だけが民俗文化財の映像記録の進展を促した理由ではありません。重要なのは、より記録性の高い映像記録を制作しようという意思をもった担当者の存在であり、それを資金的に支援した制度の存在です。具体的にはここにお集まりの、あるいはこれをご覧になっておられる方々の事業推進の積み重ねの結果であると言えるでしょう。

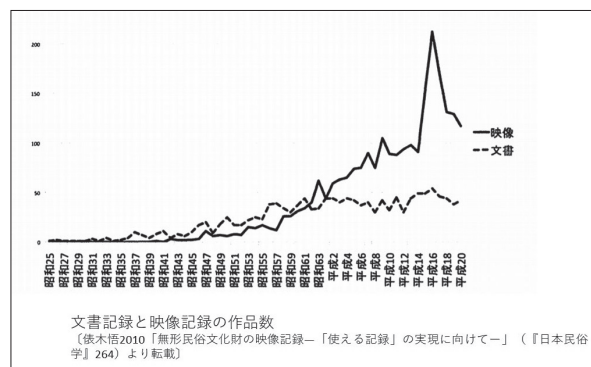


図 2

2. 映像記録をめぐる現状と残された課題

さて、課題としたいのはここからです。膨大な量の記録が、膨大であるがゆえに、共有できずに個々の機関において死蔵されてしまっている実態が生まれました。それが先に分類した㉔の記録保存の方法についての議論を阻害しているように思います。「記録保存」という言い方では、イメージが伝わりにくいですが、映像記録の対象が民俗芸能であったならば、それを取り巻く環境、と言い換えてもよいと思います。これらの撮影や記録手法は、担当者それぞれの創意工夫によって、様々な記録手法がとられています。まさにハンドメイドの記録であります。

民俗学の基本的な資料となる民俗誌のこれからを考えた場合、テキストだけの民俗誌というのは想像できないわけです。現在のように、誰もが簡便に地域の情報を発信できる環境下において、どのような映像記録の組み上げ方ができるのかが大きな問題となっています。

特に今回のコロナ禍によって、民俗文化財などの行事や芸能の何が変わったのか、それをとりまく地域社会などがどのように対応したのか、コロナ禍の今を記録することは、将来の危機に備える意義もあります。少し不謹慎かもしれませんが、コロナを一種の試薬と考えれば、それへの対応の差などは、民俗学の格好の素材にもなるでしょう。また、こうした社会的危機の状況にあって、映像記録が伝承にどう役立つか、動画を利用した継承等の実践的な取り組みなども、大切な課題であります。

映像記録が持つ豊かな民俗誌的側面を考えるにあたって、現在のところ最も質量ともに充実している民俗文化財の映像記録を素材に考察するところから出発したいというのが、私どもの共同研究のねらいであります。

協議会開催にあたりまして、主催者である東京文化財研究所の久保田室長に続きまして趣旨説明をさせていただいたのは、以上のような理由であります。

今回の企画を主導していただいた東京文化財研究所の皆様へ、お礼を申し上げるとともに、私もコメンテーターの大役を仰せつかっておりますので、本日の協議会が有意義な会になりますよう、努力致したく存じます。よろしくお願い致します。

事例報告

コロナ禍における映像活用の取り組み

鈴木 昂太（東京文化財研究所 研究補佐員）

東京文化財研究所で研究補佐員を務めております鈴木昂太と申します。本日は「コロナ禍における映像活用の取り組み」という題で発表させていただきます。よろしくお願いいたします。

本発表では、コロナ禍における映像の活用事例をいくつか紹介させていただきます。それによって、各地の無形民俗文化財の関係者が、映像というツールをどのように利用しているのか、全体の傾向を素描することを発表目的にしたいと思います。しかしながら、映像の活用は日本各地でたくさん行われていますので、その成果は膨大に残されています。今回の発表では、その中から私の恣意的な選択によって、わずかなものを紹介させていただくに過ぎないことをお断りさせていただきます。

1. コロナ禍における無形民俗文化財

まず、事例紹介の前に、無形民俗文化財がコロナ禍によってどのような影響を受けたかについてごく簡単にお話しさせていただきます。

皆さんもご存じのように、2020年の1月頃から新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が日本でも広がり、感染拡大防止のために緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が何度も出されました。それによって外出自粛であったり、移動の制限、イベントの開催制限などが社会的に広く求められました。

こうしたコロナ禍の特徴は、「三密の回避」という言葉に表されているとおり、人が集うことへの制限がなされたことです。そのため、人を多く集める可能性がある祭りには、「こんなご時世に祭りなんて」「みんな我慢しているんだから自粛しろ」という声が向けられ、大規模な祭礼だけでなく、各地域で行われている小さな祭りも中止に追い込まれていきました。こうした本番だけではなく、準備や練習の機会も三密への懸念から制限されており、無形民俗文化財の関係者は従来通りの活動が出来ない状況にあります。

図1は、私が長年調査している広島県の比婆荒神神楽の写真ですが、「国譲りの能」という演目の中で大国さんや地域の役員が観客に餅まきをしています。この写真を見ていただいて分かるように、公民館の中に100人以上が密になって神楽を一晩中見ている。かつてはこうした光景が普通だったわけですが、さあ果



図1 広島県庄原市西城町八鳥地区の八鳥名大神楽
2013年11月24日 筆者撮影

体が結成した「全国地芝居連絡協議会」のイベントで、2021 年は各地の伝承団体や関係者が Zoom を利用してオンラインで交流を深めました。そこでは、「白浪五人男」という歌舞伎の有名な演目の一部分を、各地の団体がリレー形式で演じる「オンライン白浪五人男」が行われました。これも、基本的には共通の芸態を伝承する地芝居ならではの企画かと言えます。対面での交流ができない中、コロナ禍で普及した Web 会議ツールを使って、オンライン上で伝承団体同士のつながりが生まれていました。

さらに祭りを通じた関係人口のオンラインによる維持ということで「^{あらま}荒馬チャンネル」の事例を紹介したいと思います。荒馬（荒馬踊り）は、青森県の今別町に伝承される民俗芸能です。これに興味を持った京都の伝統芸能サークルに所属する大学生や OB は、伝承地のひとつである大川平地区^{おおかわだい}に通い、住民から習った荒馬を毎年夏祭りで一緒に踊ってきていました。こうした 20 年以上続く交流も、コロナ禍になってからはできなくなりましたが、なんとか交流を再開したいということで Facebook のライブ配信機能を使った「荒馬チャンネル」が開始されました（あおもり暮らし 青森県移住・交流ポータルサイト「祭り好き！津軽好き！大集合！！「荒馬チャンネル」はじまります【第 1 回配信日：7 月 16 日（金）19：30 ～】」https://www.aomori-life.jp/kankejinkou/cat50/post_9.html 最終閲覧日 2021 年 12 月 16 日）。YouTube にアーカイブとして上げられている第 1 回の動画を見てみると、画面の左側に青森にいる地元の保存会長さん、右側に遠隔地から通っている京都の方々がいます。こうした 2 か所間の映像上の交流にプラスして、各地の人がコメントで参加するので、そこでの応答もなされていました（^おおおかわだい好き大作戦「^あ荒馬チャンネル vol. 1 ^あ大川平荒馬保存会 顧問 嶋中卓爾さん 美由紀さん夫妻 21/7/16 配信」<https://www.youtube.com/watch?v=GyvwjZ8Lo6Q> 最終閲覧日 2021 年 12 月 16 日）。このように祭りが中止になることで失われてしまった通いの関係性が、動画配信というデジタル技術の力を使うことによって維持されているという事例も見られます。

このように祭りは、地域の内外からさまざまな人を呼び寄せていたわけですが、祭りをオンライン化することで、担い手や興味を持つ人々の関心をつなぎ留めておくという試みも各地で行われていました。その中から目に留まったユニークな事例として、琉球新報社が 2020 年の夏に Google Earth と YouTube を組み合わせて制作した「オンライン道ジュネー」を紹介します（琉球新報 DIGITAL「【特設】全島エイサー ×Google Earth オンラインで沖縄・夏の風物詩を見に行こう」<https://ryukyushimpo.jp/news/zento-eisa-special.html> 最終閲覧日 2021 年 12 月 16 日）。図 3 を見ていただきたいのですが、これは沖縄市の登川青年会さんのページで、この団体がどこで活動をしているのかが Google Earth 上で示されており、右側にありますリンクから飛びますと、過去に収録されたこの団体の記録動画を見ることができます。動画自体は既にあったものですが、航空写真と映像という複数のサービスを組み合わせ、目に見える形でお祭りを仮想的に体験させるシステムが作られていました。もちろんこれは、祭りの代替というわけではありませんが、「ああ、いつもはここでやってるんだな」と記憶を呼び起こさせることで、芸能への関心、ひいては伝承自体を守っていこうとする試みだと評価できます。



図3 琉球新報デジタル編集「オンラインで道ジュネーの旅 沖縄市登川青年会」

<https://earth.google.com/web/data=Mj8KPQo7CiExRDA2Ty1uaEpCOU0zVFJpUTFjYW4wSWpnbIJQVHFOOXISFgoUMDI3RERENkFGMDE1ODgzNDVCNkQ> 最終閲覧日 2021 年 12 月 16 日

3. 祭り・芸能のオンライン配信

新型コロナ感染症が流行し始めてから、多くの祭りや民俗芸能がオンライン配信されるようになりました。コロナ禍以前には、多くの観客が訪れる大規模な祭礼が地元のケーブルテレビで中継されることなどはありましたが、あまり多くの人に知られていなかった小規模な祭りも、伝承者自身によって YouTube など配信されるようになってきています。また、貴重な披露の場である民俗芸能大会も、去年はコロナ禍により多く中止されましたが、福島県の「ふるさとの祭り 2020」のように事前収録の映像を YouTube で公開する形で開催されたり、2020 年 11 月に大分県で開催された「第 62 回九州地区民俗芸能大会」のように現地で収録された映像が主催者により YouTube で公開されたりと、オンライン配信が進みました。このようにコロナ禍は、民俗行事の公開という点で、大きな変化をもたらしたと言えます。

そうした民俗行事の公開映像には、収録映像の配信か生中継か、公開用の舞台か地元の祭りかなど、配信方法や撮影の文脈が違いうさまざななタイプがあります。の中で今回は、コロナ禍で著しく増加した無観客で生中継する事例に絞ってお話をしていきたいと思います。これも本当に数多の事例があるので、すべてを踏まえることはできていないですが、私はオンライン配信を鑑賞型と参加型という 2 つに分けてみました。

鑑賞型の例として挙げるのが宮崎県の神楽の配信、特に 2020 年 12 月に行われた NPO 法人東米良創生会による銀鏡神楽の例です。現在アーカイブとして残されていませんが、1 日目の 16 時 30 分から 2 日目の昼前までほとんどの演目が、数台のカメラで非常にきれいに配信されていまし

た（東米良創生会「【独占ライブ映像①】2020 銀鏡神楽【前編】清山～荘厳【視聴期限は 2021/1/10 まで】」<https://www.youtube.com/watch?v=nLHRKpSFjww> 最終閲覧日 2020 年 12 月 20 日）。この事例の珍しい点は、動画配信と連動させてネット上でお花を募集したということです。YouTube の概要欄に寄付サイトへのリンクが貼られており、1 口 3000 円からクレジット決済・銀行振込・現金書留で「お賽銭・ご奉納」が募られていました（NPO 法人米良創生会「お賽銭・ご奉納募集ページ」<https://www.livedomain.online/shiromi> 最終閲覧日 2020 年 12 月 20 日）。

また、無料のオンライン配信はたくさん行われていますが、有料配信をする団体も現れました。

鳥根県大田市内の石見神楽の伝承団体を支援する石見銀山神楽連盟は、石見神楽の有料配信を始めています。Web 上でオンライン視聴券を購入すると、視聴用の URL が送られてきて、リンク先で神楽公演を見るという仕組みです。初回の配信では、2020 年 10 月 31 日の 19 時から大田市の佐毘売山神社で多根神楽団が「八重垣」を演じました（石見銀山神楽連盟「鳥根県大田市の石見神楽」<https://shop.iwamiginzankagura.com/> 最終閲覧日 2022 年 2 月 17 日）。

コロナ禍における映像配信の多くは、関係者の手弁当による無料配信でしたが、オンライン配信とクラウドファンディングを合わせた形式は、持続的に祭りを開催していく上で非常に参考になる事例です。

それに対して、盆踊りなど地域外の人も一緒になって参加することが出来る芸能では、参加型のオンライン配信が行われました。ただし、その配信映像の演出には違いが見られます。たとえば、岐阜県の「郡上おどりライブ配信」では、通常とは異なる特設会場で少人数の舞手が 1 台の固定カメラの前で踊っていました。これは、各家の視聴者が一緒に踊るための見本としての映像だと言えます（郡上おどり運営委員会「郡上おどりライブ配信 盂蘭盆会（8 月 14 日）」<https://www.youtube.com/watch?v=S8YQ25bqix0> 最終閲覧日 2021 年 12 月 16 日）。それに対して、秋田県の「西馬音内盆踊りライブ配信 2021」では、入場規制した大通りにて事前登録制の舞手のみで開催された祭りを、無観客を逆手にとって雰囲気良く PV のように配信していました（羽後町みらい産業交流課「西馬音内盆踊りライブ配信 2021」<https://www.youtube.com/watch?v=-q60d2Qil3w> 最終閲覧日 2021 年 12 月 16 日）。

このように、祭りや民俗芸能のオンライン配信といっても、芸能の性格や配信者の意図に応じて、さまざまな映像が作られているのが現状です。

4. 伝承者自らが作成する伝承用映像

ここからは少し目的が違う映像をご紹介します。山梨県丹波山村の「ささら獅子舞」の伝承団体である丹波山村文化財保存会さんは、自分たちで撮影・編集した伝承用映像を作成されてい



図 4 石見銀山神楽連盟「鳥根県大田市の石見神楽」
<https://shop.iwamiginzankagura.com/>
最終閲覧日 2022 年 2 月 17 日

ます。YouTube で公開されている動画には、篠笛の吹き方の教則動画と、吹き方のコツや練習方法などをベテランが語るインタビュー動画の 2 種類があります。教則動画は、「わたりびょうし」や「ちーひゃる」など名前が付けられた 5 つのパート毎の短い動画と、全体の通し動画（17 分 29 秒）の合計 6 本です。カメラは、太鼓・笛・歌からなる囃子の録音音声に合わせて笛を吹く演奏者の肩口に固定され、演奏者の運指に焦点が当てられています。また、動画の名づけ方も興味深く、「【篠笛のこと聞いてみた！】口伝について【ささら獅子舞（丹波山村）】」といったように、いわゆる YouTuber が投稿する「やってみた動画」が意識されていて、若い視聴者の興味を引くことを目指しておられることがわかります（たばやまレコード「【ささら獅子舞】篠笛の吹き方【丹波山村】」<https://www.youtube.com/watch?v=XMJM3A5OTGY&t=383s> 最終閲覧日 2021 年 12 月 16 日）。

こうした「伝承者自らが作成する伝承用映像」は、他の団体でも作成されていまして、岩手県宮古市の小沢獅子踊りの事例も目に留まりました。宮古市小沢獅子踊り保存会さんは、笛編・太鼓編・踊り編の 3 種類、合計 9 本の動画を YouTube に上げておられます。動画は、正面と背面、右側面と左側面のように複数の角度から撮影した映像が組み合わされていたり、太鼓の演奏時に口唱歌をテロップで入れたり、大変工夫されています。この動画は、小学校の生徒を念頭において作成されているようです（宮古市小沢獅子踊り保存会「★練習用★後庭（側 ver.）」<https://www.youtube.com/watch?v=tNZT0GvPnzk&t=54s> 最終閲覧日 2021 年 12 月 16 日）。

これまで、多くの民俗芸能の伝承者は、学校の郷土学習の中で生徒に直接教える機会を持ってきましたが、コロナ禍では教習機会が大変少なくなっています。そうした時に、自分たちの手で教則動画を作り、映像で後継者育成を図ろうとされている姿がみられました。こうした教則動画は、先ほどの趣旨説明の中で出てまいりました、行政が作成する 3 点セットの記録映像の「伝承・後継者育成用」に相当するものです。そうした映像が、伝承者自身により作成されるようになったことは注目すべきことかと思えます。

5. アーカイブ化の進展

最後に、コロナ禍が契機となって、民俗行事に関する記録の集積と公開が進んだ事例を紹介したいと思います。

たとえば、福井県大野市の地域文化課が 2020 年度に実施した「心をひとつにおどり結び事業」では、市内に伝承される未指定のものを含めた神楽や踊りの映像が、YouTube 上で 22 本公開されました。この事業は、芸能に関わる方々に発表の機会を設けて活動の推進を図ることも意図しており、既存動画を編集した 4 本を除く 18 本が新たに撮影されました（大野市「動画配信開始！「心をひとつにおどり結び事業」」<https://www.city.ono.fukui.jp/kosodate/bunka-shinko/odorimusubi.html> 最終閲覧日 2021 年 12 月 16 日）。動画自体は、観光地やロケーションの良いところで演じてもらったりと、活用という側面も意識されていますが、地域の芸能を一括して映像に残す事業が行われたことは、貴重なことかと思えます。

もうひとつ面白いのが、埼玉県川越市の「川越まつり今昔アーカイブプロジェクト」というものです。この事業は、コロナのために 2 年連続で中止になった祭り文化の継承のために、オンライン上で川越まつりに関する記録を収集するとともに公開しようという試みです。実行委員会が管理する Facebook グループが設けられていまして、そこに誰彼構わず川越まつりに関する写真や動画を、古

収録動画一覧				
指定	踊りの名称	団体名等	撮影／既存動画編集	
県指定文化財	扇踊り	扇踊り保存会	撮影	
	神子踊り	神子踊り保存会	撮影	
	平家踊り	平家踊り保存会	既存動画編集	
文市文化財	南乞い踊り	南乞い踊り保存会	撮影	
	しぐさ踊り	しぐさ踊り保存会	撮影	
	貴調衣ちよい		撮影	
未指定文化財	やんしき	六馬民謡保存会	撮影	
	やんごらせ		撮影	
	大野音頭		撮影	
	御前踊り	越前大野おどり保存会	撮影	
	しつちよいな節		撮影	
	小山旗踊り	小山旗おどり保存会	撮影	
	小山農民踊り		撮影	
	麻那姫音頭	上庄踊り振興会	撮影	
	ねこのこおどり	神子踊り保存会	撮影	
	ふるさと「下庄」廻り歌	下庄史跡めぐり踊り会	撮影	
	西谷もじり	西谷もじり保存会	撮影	
	結の故郷・里芋音頭	結の故郷里芋音頭愛好会	撮影	
おのの遺産	木本領家里神楽	木本領家区青年会	撮影	
	蔵生里神楽	里神楽実行委員会	既存動画編集	
	権座神社の里神楽	権座神社獅子舞保存会	既存動画編集	
	稲郷里神楽	稲郷青年会	既存動画編集	

図5 大野市「おどり結びチラシ」

<https://www.city.ono.fukui.jp/kosodate/bunka-shinko/odorimusubi.files/0331chirasi.pdf>

最終閲覧日 2020 年 2 月 17 日

いもの、新しいもの問わずアップロードしてもらうことで、オンライン上での集積が行われています。それとともに、事務局が作成した伝承者へのインタビュー記事なども、情報発信プラットフォームの note で公開されています（「川越まつり今昔アーカイブプロジェクト」<https://www.facebook.com/groups/kawagoematsuri.konjaku> 最終閲覧日 2021 年 12 月 16 日）。

この事例の面白い点は、野村證券の川越支店さんが事務局を務めている点です。実行委員会には、教育委員会などの公共セクターや祭りの伝承団体も入っていますが、商工会議所や民間企業も参加しています。こうした民間の力の活用によって、アーカイブプロジェクトに柔軟な発想が生まれているのだと思いますが、民間企業にとっても、地域の民俗文化を守ることが社会貢献につながり、SDGs という観点からも評価される活動になるようです（NOMURA HOLDINGS「地域活性化 with Nomura 川越まつり 今昔アーカイブプロジェクト」<https://www.nomuraholdings.com/jp/sdgs/article/011/> 最終閲覧日 2021 年 12 月 16 日）。

最後に、2021 年の 3 月に公開された沖縄県南城市教育委員会文化課による「なんじょうデジタルアーカイブ」を紹介したいと思います。これはコロナとは直接関係ないかもしれませんが、非常に先進的な事例で、南城市の歴史・文化に関する写真や動画、文書が Web 上で公開されています。この中には、民俗芸能に関する動画も多数含まれていて、昭和 40 年代の芸能大会の記録なども 8 ミリフィルムからデジタル化されて公開されていたりします。このアーカイブは、市民との協働で資料の発掘を進めていき、新たな資料もどんどん追加されていくそうなので、今後の展開も注目されると思います（南城市教育委員会文化課「なんじょうデジタルアーカイブ」<https://nanjo-archive.jp/> 最終閲覧日 2021 年 12 月 16 日）。

6. おわりに

これまで、簡単ではありますが、各地での映像の活用事例を紹介してきました。こうした事例を見ていくと、無形民俗文化財の関係者は、コロナ禍で失われたさまざまなものを、映像技術を使って取り戻そうとされていることがわかりました。

その1つが、祭りや民俗芸能により生まれる人と人との「つながり」です。そのつながりは、伝承者間、伝承者と関係人口、伝承者とファン（観客）、ファン同士など、いろいろな関係性がありました。

2つ目は、祭りが中止されたために失われた「披露・教授の場」です。観客を集められない代わりに、映像配信することで実施機会を確保しようとされていました。ただ、収録方法や作成される映像は、事例毎にさまざまであり、鑑賞型か参加型かといったように芸能の性格にも規定されていました。また配信目的も、直接来られない観客への中継、ファンを増やす広報活動、活動資金を得るための有料配信など、多様なものが見られました。

そして3つ目としては、開催されないことで失われた「文化財に関する関心・記憶」をオンライン上で喚起するとともに、プラットフォームを作成して集積し、残していこうという活動が行われていました。それらは「記録」としてアーカイブされ、オンライン上での公開も進んでいます。

以上、雑ばくなお話になりましたが私の事例紹介を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

問題提起

今、映像記録に求められること

川村 清志（国立歴史民俗博物館）

国立歴史民俗博物館の川村清志と申します。早速、本日のお話をさせていただきたいと思いますが、大きくは民俗文化の映像化をめぐる図1の図式の中でお話ししていきたいと思います。かなり複雑なものではありますが、基層に現状におけるコロナの問題があり、その上に映像制作に関わる自治体の文化財担当者や、地域の博物館のスタッフ、教育委員会の人たちがいらっしゃる。それを取り巻く中で地域の祭礼や芸能などの行事、つまり無形文化を継承している人たちがいます。そして、それを文化財として記録、保存、活用を求める国や文化庁、あるいは実務を委託される形で映像制作を担っている人たちがいる。こういった関係性の中で、改めて映像記録について考えていきたいと思っています。

ただ、今日お話しする中身は大体4点ぐらいに分かれますが、ほとんど明るい話にはなりません。私自身はコロナ禍の話を考えるにしても、コロナの問題だけにとどめた議論はできないだろうという立場です。それなので今日の目次は、コロナ以前とコロナ以後の確認、祭終い・村終い・研究終い、映像というツールの果たす役割について、最後に餅は餅屋ではないと。これが一応の落とし所になる予定です。

本日、ここにお集まりいただいた皆さんの多くは、恐らくなんらかの形で無形文化の映像制作に携わってこられた、あるいは携わらざるを得なかった人たちが大半だと思います。その方たちに――こ

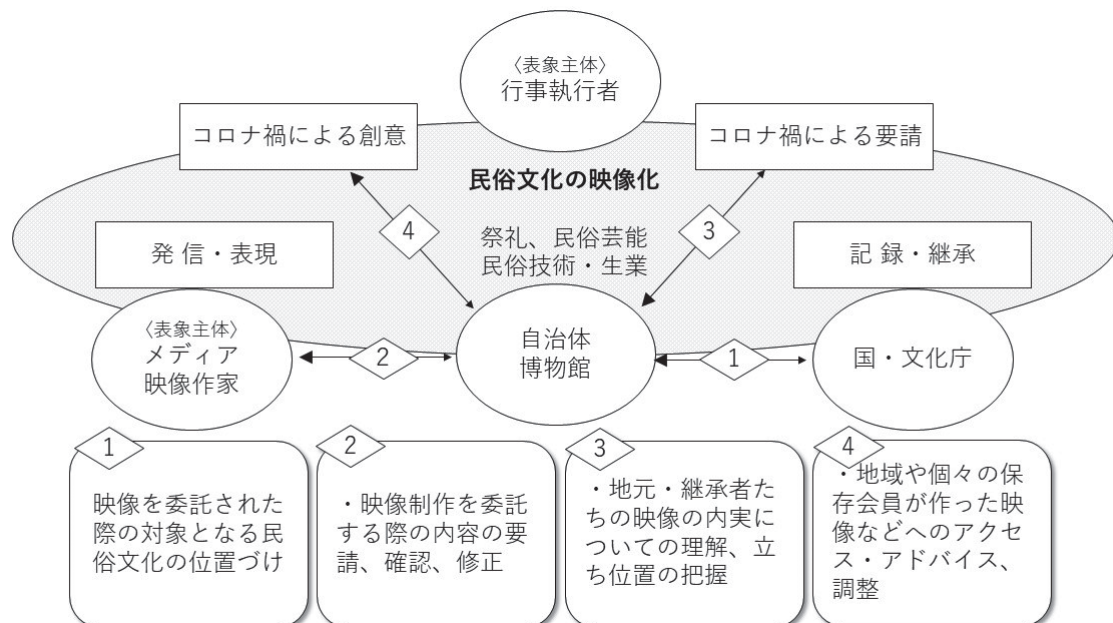


図1 コロナ禍における民俗文化の映像化に関わる社会関係

れは私自身の経験も踏まえてですけれども——、われわれ自身が映像をもっと身近なものとして捉えていく必要があるだろうということをお伝えしたいと思います。映像というツールを何か特別なものとみなすべきでないことは、先ほどの村上先生がおっしゃったさまざまな技術的な進歩を踏まえると、ある程度は理解できるでしょう。もっと身近な話をいえば、われわれが今持ってるスマホの中には、映像を録画する機能、そして簡易ではあるけれども編集する機能まで入っています。一人一人が映像を作って、場合によっては発信できる立場になった時代であることを前提に考えていくつもりです。

1. コロナ以前とコロナ以後

さて、最初の話題としてコロナの問題からはじめていきます。既にご発表、ご紹介いただいたように、コロナ禍によって祭りや民俗芸能、さまざまな行事が中止を余儀なくされてきました。その中で、たとえば地域の団体から「記録を残してください」と自治体や博物館に来る人たちもいるし、あるいは自分たちの手で YouTube などを使って発信していこうという方たちもいるわけです。だけど、これは決してコロナによってのみ生じた話ではありません。既に過疎化、高齢化という慢性的な社会の病の中で、地域社会の中にこういうディマンドは常にあったし、そして映像で発信していく試みも地域によっては進められてきました。

だから、コロナ以前とコロナ以降について、私の認識では基本的な変化はないだろうと考えます。ただし、これまでは文化の緩慢で継続的な「終わり」が進行していました。こういう緩慢な「終わり」が、皮肉なことに文化財保護法によって見えにくくなっていた側面もありました。地域のなかの特定の文化が、「民俗文化財」に指定されることで、保存団体という主体が囲い込まれます。これはもちろん保存や活用という方向では必要な措置だったとは思いますが、それらの一部の文化が保護される一方で、それ以外の民俗文化が徐々に消えていくことに、われわれは目をつぶっていたんじゃないかということも、考える必要があるでしょう。コロナ禍は、言ってみれば、そういった慢性的な病というものを一気に顕在化させたのではないかと思います。

コロナ禍では、継承される地域の中で世代間の価値観の違いや対立を顕著にさせたこともあるだろうし、行事を支えてきた保存会をいよいよやめてしまおうという選択、祭りも今後も休止して「直会だけでいい」ということもあり得るわけです。コロナ禍がダメ押しとなって、個別の地域社会が、ほんとに村終^{しま}いしようとする状況もあるわけです。

2. 祭終い・村終い・研究終い

私が30年ほど通い続けてきた能登の輪島市のお祭りも、ご多分に漏れず、昨年、今年と2年続けてコロナ禍で中止になってしまいました。輪島市には、国から民俗文化財に指定され、ユネスコの無形文化遺産にも登録されている「アマメハギ」という行事もあるのですが、こちらも非常に制限された形でしかおこなうことができませんでした。

この間に露わになったのは、祭りの主たる担い手である青年会という組織がコロナ禍によって、決定的に終わりつつあるという事態です。と同時に、「祭りは何とかやりたい」と願う青年会の世代と、「正直、村に帰ってくるな」と考えるお年寄りたちとの対立という側面も顕在化してきました。結果として普段、都会に住む青年会員たちは、祭りのために地域に戻るというルーティンに疑問を抱くように



写真1 破損した曳山の面幕（撮影、2021年8月、小谷紘樹）



写真2 破損した曳山の面幕（撮影、2021年8月、小谷紘樹）

なりました。

上記した輪島市皆月の山王祭りでは、祭りの物質的なリソースも危機に瀕しています。この夏、青年会員の役員たちはせめて曳山を組み立てたいということで、許可を得ずに宮の倉庫の中に入ったんです（その後、地区からはかなり文句を言われたそうです）。そうするとまる2年開けていないことで、胴幕や面幕という曳山を飾る幕が、ネズミにぼろぼろにされていました（写真1、2）。これまでは祭りを1年ごとにおこなうというインターバルの中で防虫剤なども入れていたんですが、そういうことも怠ってしまう状況が出てくるわけです。

この祭りの現状を伝える映像は、発表の後半でお見せできたら良いなと思っていますが、いずれも私が撮ったものではなくって、——私が「撮ってくれ」とお願いした部分もありますが——、地元の青年会長や元青年会長が撮ってくれたものです。これらの映像は、コロナ禍での出来事や思いを語ってくれたり、あるいは簡略化された行事を撮ってくれたものです。両方とも、いわゆる iPhone などのスマホによって撮られた映像が元の素材で、私はこれを20数分ぐらいの動画にまとめてYouTubeで配信しています。そういう事例を後ほど、時間があればご紹介したいと思います。

3. 映像というツールの果たす役割

それでは次に映像の果たす役割について、改めて考えていきたいと思います。

今日では自治体による歴史文化表象の中でも、映像が用いられることが増えてきました。たとえば、最近発刊された『青森県史』では、書籍として出版された民俗編（通史編3（近現代・民俗）、2018

年刊行)に、付録として民俗文化を紹介する画像と動画が収録されています。県史と関連するものとして、「青森県史デジタルアーカイブシステム」もウェブ上で公開されています。また、国からの補助や要請で作られる民俗文化財の記録保存の映像もあります。これは先ほどから村上先生や久保田先生がおっしゃっている3点セット、記録、普及、研究といったことに映像が使われつつあるわけです。国や自治体における文化財の記録・表象メディアとして、映像が定着してきたといえるでしょう。

そういった流れは確かにこの数十年、急速に進行してきました。そこで影響を与えたのは、ビデオカメラの高度化と大容量化、編集機器の簡易化に加えて、YouTubeやニコニコ動画などの動画配信サイトによる普及が大きな役割をはたしています。一般の人たちはもちろん、研究者たちもこれらのサイトを利用することで、テレビとは異なるレベルで映像メディアにアクセスするようになりました。結果として市町村単位のホームページ上でも、数多くの動画を紹介する試みがおこなわれているわけです。

私はこのような状況の中で映像、とりわけ民俗文化映像を発信する際には、作り手側や発信する側が、映像の文法やリテラシーを理解していく必要があるだろうと思っています。それは単に映像の形式や編集について理解するというだけにとどまりません。映像をどうやって作っていくのか、どのように委託するのかといった広い意味でのマネジメントの問題でもあり、あるいは、映像に寄せられるさまざまな意見、ディマンドを集約し、調整するディレクターのような、難しい立場を担うことをも意味しています。

図2にあるように、映像制作の過程では、映像を作る公的機関からの要請があり、その映像を作るための理由や価値付けがなされ、個々の団体との交渉や対象についての検証があります。その後、実際の映像化という作業があり、撮影、編集をへて、完成した作品の利活用という課題が出てきます。一連の過程で研究者や地元の団体・伝承者、映像制作を担う業者や、完成した作品をアウトプットしていく先のメディアや施設との関わりが生じます。そういった様々な過程で自治体や教育委員会、博物館の職員などが、地域の文化を記録し、表象する立場を担わなければいけないわけです。

ただし、そこではいろんな問題が生じてまいります。映像に対する要望とか違和感というものが当然、作られる過程で出てきます。研究者、継承者、撮影する側といった立場の違いによって、異なる

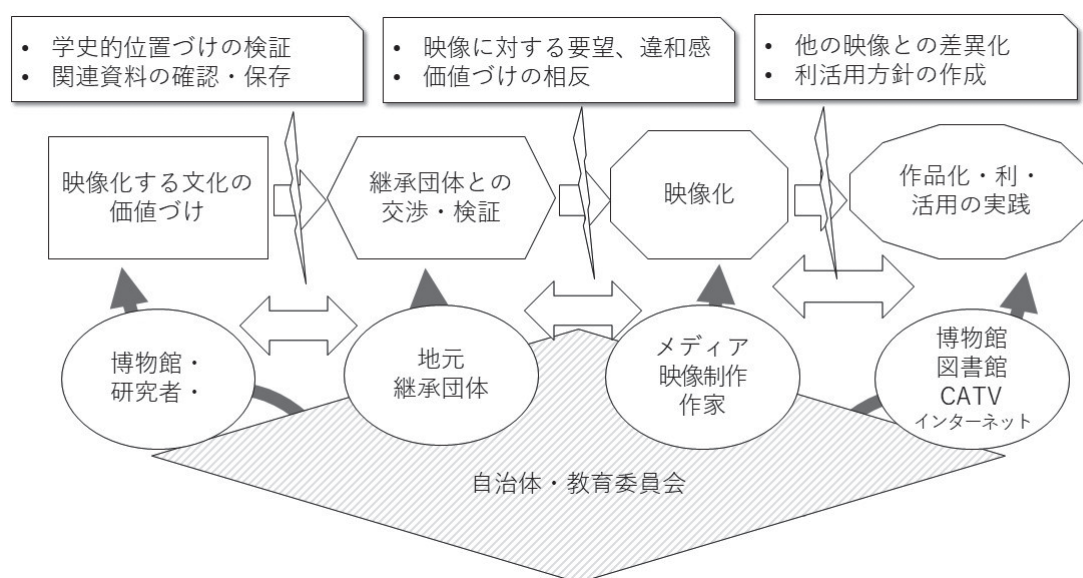


図2 映像の構想・制作・記録・発信の過程

ダイヤモンドが対立することもあるでしょう。それらをどう調整し、最終的にどのような作品にするのかを決めるのは、やはり記録映像を作る自治体や教育委員会になるでしょう。あるいは、完成した映像を活用する際には、いろんなメディアとの差異化も図らないといけないし、その際には、われわれの映像はこういう方針で作りましたからこういう意図で配信しています、といった説明も必要になってきます。

4. 餅は餅屋ではない

そこでもう一度、「餅は餅屋ではない」という言葉を思い出してください。それを言い換えると、民俗映像を記録する側は、映像の内容や制作を人任せにはしてはいけない、ということです。われわれより若い世代、Z世代でも何でもいいんですが、若い世代の人たちは、日々、当たり前写真を撮り動画を撮って、仲間内や時には公開のSNSなどに発信しています。つまり、映像というものをより身近に感じる人たちなんですね。YouTubeなどの存在も勘案しつつ、民俗映像を撮る側、あるいは記録する側の人間も、その映像に関するリテラシーを向上させていくべきです。場合によっては、そこで映像の文法を自分たちで進化させる必要があるでしょう。

それは、決してこれまでの映像表象を否定するものではありません。むしろこの数十年かけて少しずつ洗練させてきたさまざまなやり方や成果は、できるだけ尊重しなければなりません。その上で、もっとお互いに理解し合える視座の共有が必要なのです。作り手側も、あるいは発信する側も、それを享受する側も、映像による表象を読み解く能力——同時に編集する能力——を向上させていく必要があるのではないかと思います。

最初に提示した大きな枠組みの中で、映像制作を委託する際にはいろんな問題があると申しあげました。この問題と大きくリンクするのは、映像の文法、つまり、撮影したり編集したりする過程の理解にあると考えます。また、地元の方や継承者の人たち自身、そうした撮られる側の人たちへの理解も必要です。彼らがどういう映像を求めているのかを考えていく時には、他のメディア——たとえば、テレビの定型イメージ——との差異化や高度化が求められています。また、地域の個々の保存会が作った映像などへの目配せも必要です。それらには、テレビのようにこなれた撮影や編集はおこなわれていなくても、民俗文化を記録する当事者たちの意図や思いは、よりストレートに表出されているかもしれません。先ほど紹介していただいた篠笛の教則動画などはまさにそうですね。そういったローカルな映像のスタイルを理解しつつ、既存の手法を改良することで新たな試みを見据える必要があると思います。繰り返しますが、ここで重要なことは、映像そのものをより実践的に理解する立場です。

表1については細かくなるので省略しますが、私が初めて映像を撮り始めた経験を整理しなおしたものです。私は決して映像を専門にやった人間ではなく、下手の横好きに少しばかり映像人類学の先生から撮影と編集の教えを受け

表1 携帯を用いた映像撮影の試み

手順	作業	内容	道具
①	任意の対象の映像を撮影	フレーム上のサイズ感や距離感を把握 (1) 静止物と動く物の撮影 (2) 近い対象と遠い対象の撮影 (3) 明るい場所と暗い場所での撮影	スマートフォン
②	データの移送と保存	パソコンへのデータ移送、動画の形式、容量、動作の確認	パソコン モニター
③	大きなモニターでの映像の確認	映像としての見栄え、基本操作（天地の水平性、音の強弱、対象との距離、パン、ズームの早さ）	パソコン モニター
④	決まった時間内で編集なしの撮影記録	(1) 内容、テーマの決定 (2) 撮影時間（5～10分）を決めて、撮影＝編集	スマートフォン
⑤	撮影した映像の批評	複数人、グループなどで、お互いの映像の視聴、批評、課題や改良点について意見交換（ネット上でも可能）	パソコン モニター

たぐらいです。その数少ないレクチャーの一番最初に出された課題を思い起こして作成したものが表1です。当時はまだハードディスクタイプではない8ミリカメラを持って、いろんなテーマを撮られました。その時に「編集なしで撮るように」と言われたんです。5分なり、10分なりという決まった時間の中で、祭りであってもいいし、あるいは何かを作る過程であってもいいけれど、それを編集なしでもまとまりのあるものを撮りなさいと。時間を区切って撮るということは、撮影する行事や作業の全体像を理解しておく必要があります。また、予め見る人たちを想定して撮る必要もあります。一連の作業の中で必要な場面とその尺を整理し、見る側に理解しやすい映像にしなければなりません。レクチャーでは、実際に撮影した映像を参加者たちで見直し、批評しあうということをおこないました。

5. おわりに

これまで、文化財の価値付けとか意味付けといった最初のポイントは、研究者が主にやってきたことで、各地の文化をオーソライズすることでした。それは、国や文化庁に向けての発信であり、主に研究上の問題として語られてきました。だけど、決してそれだけではなくて、こういった側面も映像制作に生かしていくべきなのです。

図3 民俗文化の映像化に関わる社会関係と求められる映像リテラシー

次に映像の文法や撮影編集の理解というものを踏まえて、映像の作り手、プロの人たちとも議論していく必要があるでしょう。さらに「映像で記録してください」と言う保存団体の人たちに対しては、そのメディアの意味付けの意義を伝え、交渉しなければなりません。作られる映像は、教育なのか広報・普及なのか、あるいはしっかり記録して、次の世代に受け継いでもらうための映像なのか。

また、保存団体の中には、取材を受けるだけではなくて実際に発信している人たちがいます。時には保存団体の人だけではなくて、地域に入ってきた外部の人たちがそういう活動をしている場合があります。立場的には、研究者がフィールドワークに入るのと同じような形で現地に入っている人たちが、映像を担いつつあるんです。そういった人たちとの議論やディスカッションも必要になってきています。地域の文化に関わるものの総体の中で、われわれはもうちょっと映像の記録化とリテラシーを考えていく必要があるだろうと思っています。

最後に、先ほどお話した輪島市の山王祭りに関する映像を流したいと思います。これは私が制作して、YouTube で限定配信しているものです。祭りの担い手である青年会の役員たちが、コロナ禍で祭りができないことへの思いを語ってくれています。

（映像上映）

先ほど申し上げたように、これは行事の継承者の自撮りです。最初の小谷会長は縦長で撮ってきたから、私のほうで画角を変えたので、ああやって頭が見切れているんです。こちらは、アマチュア感が滲み出ている映像です。逆に前会長の升本君は自撮りなのにどこまで計算したのかというアングルで撮ってくれました。斜め下からの対象を捉える角度や背景の床の間らしき様子も、長男として家の次代を担う彼の人柄をよく表しています（写真3）。

これは継承者に映像を撮ってもらって映像を作るという、双方向的な映像制作の試みになります。同時に私が提案してきた行事の継承者との対話・交渉と、民俗映像を発信する側の積極的な映像制作の——過程を色々と端折っていますが——、一つの事例と捉えてもらえればと思います。また、これがコロナ禍において調査者が実地に行きづらい状況での映像による現地とのコミュニケーションのあり方としてもご理解いただければと思います。継承者が映像を通じて自分たちで表象していく方法について考えていきたいし、たとえ現地にいけなくても、一歩踏み込んだ形での映像を作っていく手立てが、あり得るんじゃないかと考えています。

以上で私からのお話は終わりとさせていただきます。ありがとうございました。



写真3 報告者からの依頼で近況について語る升本一理
（撮影、2021年4月、本人）

発表①

3点セットの映像記録制作 —あげお文化遺産ガイドから—

関 孝夫（上尾市教育委員会）

埼玉県上尾市教育委員会の関と申します。「3点セットの映像記録制作」ということで、上尾市では「あげお文化遺産ガイド」というウェブサイトを立て上げております（図1参照）。こういうトップページになっているわけなんですけれども、今日は上尾市で行ってまいりました無形民俗文化財の映像記録制作事業の概要と、映像記録の公開プラットフォームとして整備したこのウェブサイトについてお話させていただきます。よろしくお願いいたします。



図1

1. コロナ禍と無形民俗文化財の映像記録

各地の民俗事象は、近代化が進む社会の中で、中断・廃絶の危機にあったということは間違いないと思います。それに対し民俗文化財行政は、保護施策として映像記録をして記録保存しようということを長年行ってきました。

さらに、このところコロナ禍によって大きな影響を民俗文化財は受けているわけです。特に、無形民俗文化財は、伝承により常に再現をすることが前提となっている文化財ですが、ここ2～3年中止が続いてしまっています。そのため、民俗文化財の伝承の危機がさらに加速する可能性が高いということを、ここで改めて述べておきたいと思います。そういう意味で民俗文化財の映像記録、これを進めていかなければいけないのではないかとということで、それを前提にして話をさせていただきます。

2. 3点セットの映像記録とは

実際の3点セットの話に移りますが、先ほど久保田さんのお話にも出てきましたように、東京文化財研究所での『無形民俗文化財映像記録作成の手引き』では、3点セットについて「広報普及用」「記録保存用」「伝承・後継者育成用」という3種類の映像を作ることだと述べられています。

それに対して、上尾市の「あげお文化遺産ガイド」では、「紹介映像」「普及編」「記録編」ということで、

東文研のものをほぼほぼ読み替えて作っています。

上尾市の場合、平成 5（1993）年度から平成 28（2016）年度にかけて、市内に所在する民俗文化財について映像記録をずっと進めてきたわけなんですけれども、それは主に記録保存のための映像記録事業が中心でした。いわゆる普及編の制作が中心で行われてきたわけです。それが平成 13（2001）年ぐらいから民俗芸能の記録を中心にして、逐次普及編に加え、記録編の制作をしてきました。さらに、平成 29（2017）年度に「あげお文化遺産ガイド」というウェブページを制作するにあたって、紹介映像を作っています。

それで、この「紹介映像とは」ということですが、実際に映像を見ていただいたほうが良いので、ウェブサイトに行ってみましょう。上尾市のホームページの中にバナーがあります。「あげお文化遺産ガイド 無形文化遺産編」というところをクリックしていただくと、先ほどのトップページになります。合計 15 あるコンテンツのバナーをクリックしてもらくと、それぞれの文化財のトップページに行きます（図 2 参照）。トップページは、簡単な文字の解説があつて、そこから紹介映像、普及編映像、記録編のページへのリンクがあるという形になっています。今日は「藤波のささら獅子舞」の映像を見ていながら、これについてご説明していこうと思います。



図 2

（1）紹介映像

「紹介映像」は、あくまでも広報普及用の発信型の映像記録、短編映像となっています。対象は研究者を含む市民全般ですが、この獅子舞の内容について短時間で理解できる作品としています。藤波ささら獅子舞という、無形民俗文化財の情報発信をする目的で作っているというように理解いただければと思います。作り方の特徴といたしましてはナレーションを入れずに、テロップでずっと内容の説明をしていくというところがございます。ナレーションですとなかなか意味が取りにくい、どういう文字なのかがよく分からないので、こういう形でテロップを見ていただくことによって、短時間で理解が容易に行われるというように考えて、こういう形を取らせていただきました（図 3 参照）。

また、この 4 分という時間ですが、これもいろいろ考えたんですけれども、大体このぐらいの時間で説明しきれかなというように考えました。ものによっては 4 分 40 秒だったり 3 分 50 秒だったりするんですけれども、4 分という数字を基本にしています。たとえば NHK の「新日本風土記」という番組の連動番組で「もういちど、日本」というのがあります。あれは 5 分番組なんですけど、正味は 4 分であり、参考にしています。これについてはあくまでも発信用の、皆さんに簡単に理解していただくための映像として作らせていただいています。



図 3 紹介映像：藤波のささら獅子舞

（2）普及編映像

次は、「普及編」映像です。これは平成 18（2006）年に制作されたもので、この時代ですから、画面が 4 対 3 のスタンダード画面になっています（図 4 参照）。

普及編の制作目的は、対象となる無形民俗文化財についての理解を深めるための記録保存作品というようにしています。そのため、あくまでも情報発信というより、記録保存に基軸を置いた作品ということになります。また、民俗文化財ですので、伝承されている地域の地勢や風土、あるいは本来の生活基盤などを取り巻く環境を、構成の中



図 4 普及映像：上尾市指定無形民俗文化財藤波のささら獅子舞

に取り込んで表現しているところです。要するに、この民俗文化財について総体的な理解を図るための作品ということになります。対象といたしましては、研究者を含む市民全般というように考えています。ただし、繰り返しになりますけれども、市民や研究者に対して情報発信するためではなくて、映像記録作品として制作するというので、かなり詳細に前後の状況なども映像の中で表現しています。

形態といたしましては、30 分から 50 分程度の中編の記録映像作品となっています。あえて「作品」と言っていますが、この映像記録作品編は、藤波のささら獅子舞の無形民俗文化財としての記録保存という意図に基づき制作されたものです。しかし、見るための映像を制作するということを考えた場合、客観的な要素の連続では単調になってしまうため、どうしても作品という形で整理しなければなりません。したがって、この記録保存された映像の中から選択して見せるための作品を作る、作品化ということがどうしても必要になってきます。

獅子舞を映像で語るためにはさまざまな切り口がありますが、たとえば 1 人の伝承者に視点を当てたヒューマンドキュメンタリーみたいなやり方もあると思います。ただ、そうしますとどうしてもその人の、1 人の考え方の中でずっと進んでいきますから、なかなか適当ではないかなというように考えて、そういう制作はしておりません。また、獅子舞の印象から客観的な資料も存在しないのに、たとえば「修験だ」とかそういったような解釈を指摘するような制作も可能ですけれども、あまりそういうこともやっておりません。また、アピールする部分だけを取り上げて編集していくようなやり方もありますが、これも当然やっておりません。

というわけで、全体的にこうしたことにならないように、作品として普及編を制作する際の留意点として、4 つほど挙げております。①客観性を担保するために主観的な表現を抑制すること、②当該文化財の特色の位置付けを踏まえ独自の意図的な解釈による表現は避けること、③複眼的な表現に努めること、④行為や所作に通常とは異なる演出を加えないようにすること。こうした留意点を意識して制作している状況があります。

この中編の映像記録作品、これはいわゆる記録映画という分野になってくるかと思うのですが、これについては昭和 50（1975）年代、あるいはその前から、記録映画を制作する業者さんに委託するというのでやってきたことが多かったと思います。30 分から 40 分という時間についても、やはりフィルム映画を作るということは保存性が高いということでもあったんですけども、その分コストも高くなってしまいます。そういった理由で、中編作品を作るというイメージが根付いてきてしまった感

があるというのは否めません。

また、記録映画ということで、制作者である監督の思いが強過ぎるという課題もありました。しかし近年は、民俗芸能の映像記録作品の制作について、制作者の皆さんから深い理解が得られるようになっていくように私は思っています。たとえば、藤波のささら獅子舞の映像は、残念ながら現在は映像制作を行っておりませんが民族文化映像研究所の作品になります。彼らは、その辺の理解はかなり進んでいるというように思っています。このホームページ自体は、CN インターボイスに制作していただきましたが、これについてもかなり理解が深まっているというように思っています。また、ヴィジュアルフォークロアが埼玉県飯能市のホームページ（「落合西光寺双盤念仏」アーカイブス）と映像を作っておられます。このサイトは、落合西光寺双盤念仏に関する記録映像を、解説とともにYouTube を活用して公開する素晴らしいサイトです。

かつてのように記録映画の監督の思いが強過ぎるというような記録映画の制作は、少なくなっているような気がします。それはあくまでも行政がクライアントになって制作する記録作成の映画に限ってのことですけれども。ただ、彼らは彼らできちっとした思いを持った作品を作っていたらいいと思います、私は思っております。確かに私も、撮影現場で1回あったんですけども、制作してる人があたかも結婚式のビデオ撮影のような感覚で制作に挑んでいるような業者もございました。別にそれを否定するわけではないんですけども、私と話をしていたら「あ、これは監督を立てなきゃ駄目ですね」って言い出したときにはちょっとびっくりしてしまいました。だから、全体の構成を考える監督がいなくて、とにかく撮りっ放しで回しちゃって、後でつないで何とか作っちゃいましょうというようなイメージが業者にあったのには、ちょっと驚きました。最近はそういう話も随分少なくなってきたと思っております。

（3）記録編

続きまして、3点セットの3番目になりますが「記録編」です。やはり民俗芸能の記録編というと、それぞれの演目をトータルで撮影したものが必要になってきます。藤波のささら獅子舞の記録編ページを開いてみますと、こういうように5つのタブがございます（図5参照）。ここに獅子舞の全演目の記録が格納してあって、出演者の情報とあわせて5章立てになっているような感じです。

この獅子舞は、基本的に1曲形式で、実際に演じられる時にはすごく長いんです。1時間半ぐらいかかります。ですが、どうも「切り」という演目の切れ目があって、1つの演目が、その切れ目切れ目を単位にして作られていることになっています。ただ、演目の名前は「12切り」と呼ばれているんです。そうすると12に区分できるのかなと思うんですけども、実は12に区分できません。そうした「切り」を地元の方から教えていただきながら、1つの演目を分節して、5つの実演映像に分けました。また、用いられる楽器であるとか、衣装の装着方法であるとか、歌などについても、それぞれ映像で記録しています。

記録編につきましては、普及編でカバーできない部分の映像も記録することを目的にしています。ですが、この記録編ではささら獅子舞の芸態の全貌は明らかになりますけど、これが上演され



図5

る祭り行事の観点は十分に記録されていません。また、道具立てについても十分な記録があるとは言えないと思います。たとえば、この獅子舞の先頭を行くダシ（山車？）だとか、^{まんとう}万灯とか呼ばれるものがあるんですけども、その組み立て方法等についてはこの映像の記録編の中には入っていません。

少なくともこの映像記録の記録編では、記録の足りない部分が散見されます。確かに芸態編として全てを記録し、周辺の情報を拾っているんですけど十分じゃないんですね。

3. 総合調査報告書的な映像記録

さて次に、「平方祇園祭のどろいんきょ行事」の映像記録なんですけれども、これはかなり大きな映像記録になっていまして、他と同じように紹介編・普及編・記録編の3部構成ですが、どろいんきょは記録編がちょっと特徴的です。それは、下部にあります横長のパネルのようなところで、階層的な管理システムを構築することによって、大量の映像記録を整理しています（図6、7参照）。

階層的な管理ということで、まず全体を7つの大項目に分けています。この中の「祭り当日」というのをクリックしていただきますと、小項目として「朝っぱやし」だとか「当番のお祓い」だとか「当日準備」というようになっている。この小項目それぞれについて、文字の解説と映像記録が付いているということになります。映像は、まさに回しっ放しに近いものなんですけれども、その行事がどういうように進行していくかということが分かるような映像記録になっています（図8参照）。



図6

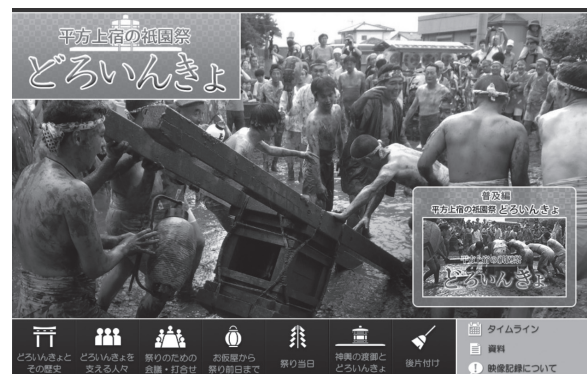


図7



図8

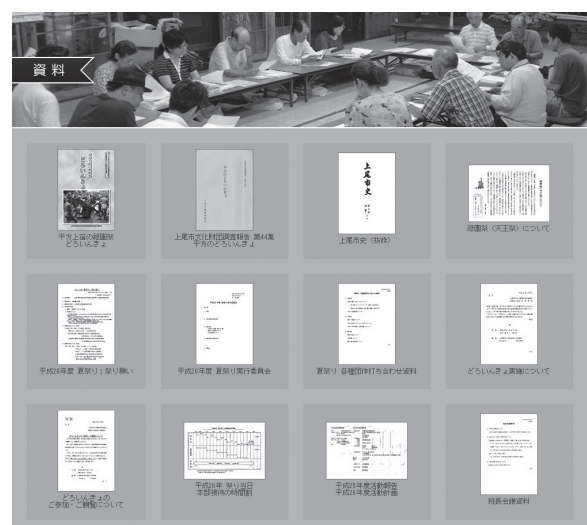


図9

この記録編は大項目、小項目、小見出しという階層性があり、紙媒体の報告書の目次のような構成になっています。概説としての紹介映像、総論として普及編があり、それに加えて、記録編は各論に相当します。

また、資料編もありまして、「資料」をクリックしてもらうと、たとえば紙媒体の資料も PDF でダウンロードできます。こんな形で紙媒体の報告書も、この一体のパッケージの中に入っているということになります。こういう形で、いわば総合報告書的な映像記録を制作しているということになります（図9参照）。

これまでの場合、大量の映像記録があったとしたら、それを何枚もの DVD に分割して作製し、記録保存するというやり方もありました。ですが、技術の進歩によって、こうした簡単なシステム込みの映像記録のパッケージが可能になってきました。よくハードディスク型なんて言い方もするんですけども、その1つの形というように見ていただければと思います。

4. 悉皆調査報告書的な映像記録

続きまして、悉皆調査報告的な記録映像ということで、一定地域に多数存在する同一形態の民俗行事の記録映像にも、こうした階層的な管理システムは大変有効です。

たとえば、大山灯籠行事のページを見ていただきますが、これは紹介映像があって、普及編として2本の映像があります。それで、ここの記録編に入ってもらいますと、上部のタブから「大山講とは」をクリックしてもらうと、文字の解説と普及映像が出て、「大山灯籠行事とは」を押すと、こちらも文字の解説と普及映像が出ます。それで、今度はこの左側の地名のところを押してもらうと、各論的なところとして各地区の情報が見られます。他にも、「日程表」や「地図」から各地区の記録のところへ入ることもできます。たとえば、これは箕の木地区の大山灯籠行事ですが、「灯籠立て」と「点灯」、これはちょっと特殊なんですけれど「山王社祭り」が入って、「灯籠納め」「インタビュー」で構成されるという形になっています。他の地区も大体同じような形になっておりまして、灯籠を立てて納める一連の行事を、比較しながら映像で見ていくことができます（図10～12参照）。

こういうものがあといくつかあります。ざっと紹介だけしておきますけれども、たとえば「^{やえだ}八枝神社のお獅子様」という行事のサイトでは、やはり紹介映像があり、普及編があり、記録編があります。記録編では、各地区での行事を見ることができますが、それぞれ「お獅子様を借りる」「地域での行事」「お獅子様の引き渡し」というように分かれて整理されています。

また、「上尾の祭り囃子」についても同じような形になっておりまして、記録編では、保存会毎に

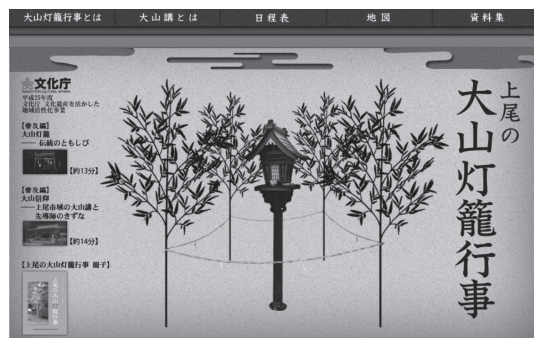


図 10

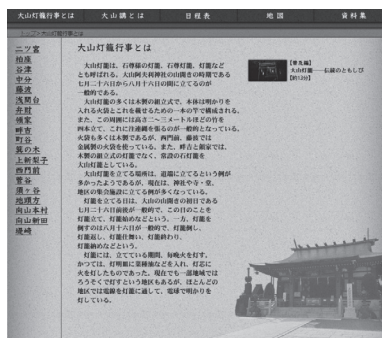


図 11

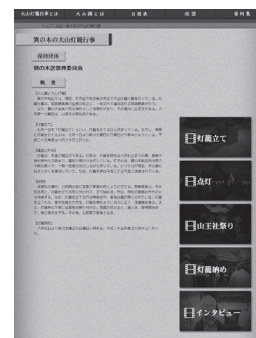


図 12

収録映像を曲目順に見ることができます。ここの特長は、伝承者の要請で撮る角度を決めたことで、太鼓を打つ打面が見えるような角度を基本にしています。また、笛の運指がわかるように、笛のどこを押さえているのかも見られるように制作をしました。

5. おわりに

この「あげお文化遺産ガイド」につきましては、平成5（1993）年から平成28（2016）年に制作された普及編による映像記録事業が基本となっています。23年間に撮りためた映像記録の集積ということなので、当初は16ミリフィルムで映画を制作していた状況があります。記録編については平成13（2001）年からということで、逐次記録編の制作を行ってきました。そして平成29（2017）年度に改めてまとめて紹介映像を制作したという経緯で作成されてきたものです。

我々が行ってきた事業は、関西の方、特に滋賀県が中心に提唱した3点セットの方式とはちょっとイメージが違うと思いますけれども、全体的な方向性としては決して違うことはないかなと思います。そのあたりの整理も今後必要かなというように考えております。

以上でお話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

3点セットの映像記録製作 ～上尾文化遺産ガイドから

関 孝夫（上尾市教育委員会）

1 コロナ禍と無形民俗文化財の映像記録

○無形民俗文化財の記録作成の必要性

・世界的な規模で進む近代化の影響は、全国的な生活の均質化をもたらしました。その結果、各地の特色ある民俗事象は急速に失われつつあります。無形の民俗文化財は、一般の人々の日常生活のなかで受け継がれてきたものであり、生活環境の変化とともにその姿も変わっていくことを避けることはできません。つまり、その姿を固定してそのままの形で保存することはきわめて困難です。

・無形の民俗文化財を後世に伝える手法として、早くから重視されてきたのが記録の作成です。無形の民俗は、そのものをそのままの形で保存することが困難である以上、記録を作成しそれを保存することが、次善の策として長く文化財としての保護の主要な手段となってきました。その中でも、とくに近年需要が拡大しているのが映像による記録の作成です。

東京文化財研究所『無形民俗文化財記録作成の手引き』2008年
「1 無形民俗文化財保護における映像記録の大切さ」から抜粋

○災害による無形民俗文化財の危機

・近代化による無形民俗文化財の影響

→既に中断・廃絶の危機があり、それに対する保護施策として、記録保存は行われてきた

・コロナ禍による無形民俗文化財の影響

→無形民俗文化財は、伝承により常に再現することが前提となっている。

毎年定期的に行われてきた多くのものが、既に2年間中止、さらに先行きが不透明

近代化による中断・廃絶の危機は、さらに加速する可能性が高い。

2 3点セットの映像記録とは

○東京文化財研究所「無形民俗文化財映像記録の手引き」

広報普及用、記録保存用、伝承・後継者育成用

○web ページ「あげお文化遺産ガイド 無形文化遺産編」

紹介映像、普及編、記録編

平成5年度～28年度製作した普及編 ⇒記録保存のための映像記録事業の中心

平成13年度から民俗芸能を中心に逐次、記録編の製作

平成29年度に紹介映像、情報発信のための web サイトを製作

○紹介映像とは

1 目的

広報普及用の発信型の映像。

基本的には普及編と同様、対象となる無形民俗文化財の内容について短時間で理解できる作品。

2 対象

研究者を含む市民全般

資料1-2

3 形態

短時間で内容理解ができるという観点から、原則的に4分程度の作品としている。

なお、紹介映像の特徴としては、ナレーションを入れずに、テロップによる内容の説明するコンパクトな作品を目指した。文字情報によって、的確に情報を伝えることができることに重きを置いている。

○普及編とは

1 目的

対象となる無形民俗文化財の内容について、理解を深めるための記録保存映像

単に対象の文化財の理解にとどまらず、民俗文化財として、伝承される地域の地勢や風土、本来の生活基盤など取り巻く環境を、構成の中に取り込み表現することにより、その総体的な理解を図る

2 対象

研究者を含む市民全般

3 形態

30分～50分の中編記録映像作品

⇒ 作品としての普及編製作のための留意点

- ① 客観性を担保するために、主観的な表現を抑制すること
- ② 文化財の特色の位置付けを踏まえ、独自の意図的な解釈による表現を行わないこと
- ③ 複眼的な表現に努めること
- ④ 行為や所作に通常とは異なる演出を加えないこと

○記録編とは

1 目的

伝承者にとっては、通常時には後継者育成用の教材。中断、廃絶時には復活のためのリカバリーポイントとなる資料。

研究者等にとっては、詳細な分析が可能になる資料となり、中断、廃絶した場合には、その後の研究の素材。

2 対象

伝承者、市民全般（研究者を含む）

3 形態

民俗芸能であれば全演目を記録

風俗習慣（民俗行事）・民俗技術であれば全過程の映像記録

このほか、伝承者や記録者の考え方によって、多様な記録の形態が考えられる

3 総合調査報告書的な映像記録

●一定以上の規模を持つ民俗行事・民俗芸能の場合、記録編が膨大になってしまう。

○記録編は大量な映像記録データの集積。階層的な管理システムの構築が必要

⇒ 階層的な管理＝ 大項目－小項目－小見出し といった目次的な構成

紙媒体である報告書の目次の階層性をそのままシステム化

○紹介映像（概観）－普及編（総論）－記録編（各論）

といった形の、映像による総合調査報告書のような形態のコンテンツ

＜事例＞平方祇園祭のどろいんきょ行事（平成 26 年度製作）

平方祇園祭のどろいんきょ行事は、7 月の日曜日に上尾市平方の八枝神社を中心として行われる夏祭り。神輿のほか、いんきょ神輿と呼ばれる装飾のない白木の神輿が町内の神酒所を回り、このうち 5 か所で「どろいんきょ」が行われる。「どろいんきょ」は、神酒所の家庭には、あらかじめ水を撒いておき、この土の上でいんきょ神輿を転がす行事である。この際には、いんきょ神輿を転がす若い衆に対して水を浴びせることもあり、神輿も転がす若い衆も泥だらけとなる。

「どろいんきょ」の最中には、いんきょ神輿を荒川に入れたり、いんきょ神輿を山車にするなどの行事が行われる。山車とは、いんきょ神輿を立て、2 本の担ぎ棒を足とし、これに太縄をかけ山車のようにつなぐもので、山車上には、歴史上の人物とか物語の作中人物に扮装した 2 人が乗る。平成 23 年 3 月 18 日埼玉県指定無形民俗文化財に指定。

紹介映像 「平方祇園祭のどろいんきょ行事」（4 分 10 秒）

普及編 「平方上宿祇園祭 だろいんきょ行事」（40 分 00 秒）

＊「平方のどろいんきょ」（43 分 07 秒）＝平成 6 年製作

記録編 延べ 36 時間 47 分 12 秒の映像と、これに関する文字情報で構成。

構成は、大項目－小項目－小見出しというように階層的になっている。

⇒紙媒体でいう「目次」。映像を主体とした調査報告書という様相。

「小見出し」に編集した映像記録を格納。冒頭に文字情報の解説を付す。

⇒構成上の必要性から、文字情報と静止画像のみのページもある。

4 悉皆調査報告書的な映像記録

●比較的簡素な構造で、同一形態で多数存在する民俗行事・民俗芸能の映像記録

○紹介映像・普及編は共通、記録編は個別に製作

記録編が大容量となるため、全体的に階層的な管理システムの構築が必要

⇒個別事例は、同一形態の簡素な構成で項目を作成して記録

○紹介映像（概観）－普及編（総論）－記録編（個別事例）

といった形の、映像による悉皆調査報告書のような形態のコンテンツ

＜事例 1＞大山灯籠行事（平成 25 年度製作）

「大山信仰」は、神奈川県伊勢原市の大山阿夫利神社を信仰対象とする大山講、石尊講などという講集団による代参を伴う信仰。上尾市域では、かつては、ほとんどの地域に大山講があり代参が行われてきた。時代とともに代参が行われなくなり、製作段階で 1 地区のみ代参を行っていた。

「大山灯籠」は、その大山講の行事として、大山阿夫利神社の山開きの期間、それぞれの代参講を結成している地域内に大山灯籠と称する灯籠を立てる行事。大山講がなくなる中で、大山灯籠を立てる行事だけは地域の行事として、19 か所で伝承。本映像記録は、上尾市登録無形民俗文化財に登録されている大山灯籠行事の映像記録

紹介映像 「大山灯籠行事」（3 分 30 秒）

普及編 2 つの普及編を製作

「大山信仰 上尾市域の大山信仰と先導師のきずな」（14 分 30 秒）

「大山灯籠 伝統のともしび」（12 分 50 秒）、

資料1-4

記録編 19 件の大山灯籠行事を撮影して製作。
 各行事は「灯籠立て」、「灯籠の撤去」、その間、毎晩行われる「点灯」で構成
 総時間数 8 時間 58 分 22 秒、1 件平均 28 分。

＜事例 2＞八枝神社のお獅子様（平成 27 年度製作）

「八枝神社のお獅子様」は、埼玉県上尾市平方に所在する八枝神社から、他所に疫病退散等の目的で
 出興（貸出）する行事。現江戸時代から疫病除けの信仰が深く、八枝神社の御眷属である獅子頭が、現
 在の埼玉県南部から西部、東京都の 23 区西部や多摩地域に貸し出されてきた。貸出先の地区では、そ
 の地区内をお獅子様が巡行しており、貸出先の熊谷市や伊奈町では、それぞれの地域で行うお獅子様行
 事について、市・町指定無形民俗文化財としている。

昭和初期には 170 地区に出興していた、現在では 30 地区余り。本映像記録は、このうち 28 地区の映
 像記録を基に製作。

紹介映像 紹介映像を 2 本製作

「八枝神社のお獅子様 巡廻と上尾のお獅子様」（3 分 50 秒）

「八枝神社のお獅子様 お獅子様行事の典型」（4 分 00 秒）

普及編 普及編を 4 本製作

「八枝神社のお獅子様」（20 分 50 秒） 「八枝神社と平心講」（15 分 00 秒）

「お獅子様の巡廻」（20 分 30 秒） 「上尾のお獅子様」（42 分 20 秒）

記録編 28 件のお獅子様行事を撮影して製作。
 各行事は、「お獅子様を借りる」「各地域での行事」「お獅子様を返す」で構成
 総時間数 19 時間 50 分 11 秒。

＜事例 3＞上尾の祭りばやし（平成 24 年度製作）

「上尾の祭りばやし」は、江戸囃子（神田囃子）系の祭りばやしの系統で、小太鼓 2、大太鼓 1、笛
 1、摺り鉦 1 の 5 人で演奏。演目や演奏形態は類似しているが、細かなところで演奏上の工夫がなされ、
 それぞれの地区で「独自」の演奏伝承。9 件が上尾市登録無形民俗文化財。

近隣の川越祭の祭り囃子に影響を与えた、堤崎流祭り囃子は上尾市指定無形民俗文化財となっている
 が、他の祭り囃子もおおよそ同じ価値を持ち、保存活用の措置が必要であり登録。

紹介映像 「上尾の祭りばやし」（3 分 40 秒）

普及編 「上尾の祭り囃子」（25 分 00 秒）

記録編 9 件の祭り囃子をホール収録で撮影して製作。
 各演目を、「背面全体」「正面全体」「笛」「太鼓の画面」に分けて収録
 総時間数 31 時間 00 分 52 秒
 ⇒「背面全体」を基本にした四面マルチ画面で、全編を視聴する動画も用意
 ⇒伝承者の意見で、太鼓の打ち方がわかるよう「背面全体」を基本とする
 ジゴトと呼ばれる口唱歌を収録

発表②

コロナ禍における記録作成事業 — 島根県での取り組みから —

石山 祥子（島根県教育庁文化財課古代文化センター）

島根県教育庁古代文化センターからまいりました石山と申します。よろしくお願いします。今ご紹介にもありましたとおり、「コロナ禍における記録作成事業—島根県での取り組みから—」という題名で発表させていただきます。

1. はじめに

島根県では 2020 年度以降、2 件の記録映像の作成事業を実施しました。1 つは、結果的に新型コロナウイルス感染症の流行下で開催された、比較的大掛かりな祭礼行事を記録することになりました。もう 1 件は、コロナ以前から伝承の危機に直面する団体にとって、県や自治体の記録作成事業がどのような意義を持ち得るのかを、改めて考える機会になったと思います。

いずれも今お話している 2021 年 12 月時点では事業として完了しておりません。また、どちらも事前に綿密な計画を立てて、計画や準備をして臨んだものではありませんでしたが、コロナ禍で取り組んだ記録、映像作成事業の 1 事例として今日はお話を聞いていただければと思います。ですので、活用というお話よりも、1 つ前の段階、記録映像の作成そのものについて焦点を当てたお話になるかと思います。

2. 島根県における記録作成事業の特色と現状

その前に、少し島根県の記録作成事業の概要についてお話しておきたいと思います。

島根県内の無形民俗文化財は、国指定が 7 件、県指定は 34 件あります。このうち県の無形民俗文化財の指定に関しては、他の県ではあまり見られない制度があります。「保持者認定」と呼ばれる制度です。文化財の保持者や保持団体が明らかなものに対しては、団体の代表者に対して保持者の証明書、会員にはそれぞれ個別に構成員の証明書を発行しています。その構成員が新たに加わる場合、その確認のために行う審査を保持者認定と呼んでいます。保持者認定をするのは芸能が主です。この保持者認定に関しては、県の条例や施行規則に規定があるわけではないのですが、構成員の証明書を発行する際の前段階の確認というような位置付けで行われてきました。

保持者認定自体は、県の文化財課の業務で、今日お話しする島根県の記録映像の作成事業は、私が所属する島根県古代文化センターの業務になります。古代文化センターは、島根県の歴史文化に関する「調査研究」と「情報発信」を主な役目とする機関で、県文化財課の内室として 1992 年に設立さ

れました。島根県による無形民俗文化財の記録映像作成事業は、古代センターの民俗分野の基礎研究事業として、1993 年から実施されています。

初めの頃は結構予算も時間もあったということで、1993 年から 2005 年度あたりですと、1 つの無形民俗文化財に対して、①報告書、②写真、③映像を作成してきました。映像については、今日これまでもお話がありました 3 点セットというやり方とは少し違いますが、ほとんどノーカットの「記録編」、テロップとナレーションを入れた 30 分ほどの「公開編」、公開編を 5 分程度に縮めた「短編」を作成しています。2006 年度以降は、別に研究事業が立ち上がったということもありまして、現在は②写真と③映像を中心に、記録作成を進めています。

これまで県では、59 タイトルを制作してきたのですが、そのうちの 2 タイトルに関しては島根県教育委員会時代、つまり古代文化センターができる前に作ったものですので、92 年以降には 57 タイトルを作ってきたことになります。この中には公開編しか作っていないもの、あるいは記録編しか作っていないものもありまして、記録編、公開編、短編、全てを制作しているものは 31 タイトルになります。さらにこのうち、県指定の文化財は現在 25 件、国指定の文化財は 6 件まで撮影を行いました。公開編と短編については、島根県の YouTube 公式チャンネル「しまねっこ CH」というものがあるんですが、その中で視聴可能です。記録編を含む、映像の活用方法は、島根県の今後の大きな課題と考えているところです。

近年の映像作成の状況をまとめた図 1 をご覧ください。記録編、公開編、短編の 3 種類を撮影する場合ですと、1 年目に撮影、そして 2 年目に編集をするというのが一般的なスタイルです。56 番目として挙げている「三谷神社の獅子舞」は、2018 年に映像の撮影をしまして、2019 年に編集して 3 種類の映像を作成しました。同じ年に、57 番目の「唐川神楽」の記録編だけを撮影しました。こちらは記録編の作成だったので、同年に編集も行いました。そして、58 番の「梶の屋神楽」、59 番の「熊山三寶大荒神式年神楽」というこの 2 本が、今回取り上げる記録作成した芸能になります。

	タイトル	成果品	2019年 (R1)	2020年 (R2)	2021年 (R3)	2022年 (R4)	2023年 (R5)
56	三谷神社の獅子舞 (出雲市)	記録編 公開編 短 編	編集				
57	唐川神楽 (出雲市)	記録編	撮影・編集				
58	梶の屋神楽 (雲南市木次町)	記録編		撮影・撮影	(延期)	撮影・撮影	撮影・撮影
59	熊山三寶大荒神式年神楽 (松江市)	記録編 短 編		(延期)	撮影・編集	撮影・編集 (御誕生祭)	

図 1 近年の作成状況

3. コロナ禍における記録作成の取り組み

今回取り上げる事例の 1 つ目は「熊山三寶大荒神式年神楽」といいます。図 2 の地図に挙げている松江市の南部に位置し、雲南市との境目にある東忌部町というところで撮影をしました。ただし、撮影対象となった県指定の文化財である「大原神職神楽」は、実はその市の境を越えてさらに南のほうにあります雲南市の神職により保持されている神楽です。2 つ目の「梶の屋神楽」の伝承地は、雲南市の中部に位置します。この 2 件を 2020 年、2021 年に撮影しました。

図5をご覧くださいとわかるように、大原神職神楽と槻の屋神楽は、それぞれ以前にも撮影をしたことがありました。大原神職神楽は、1998年に記録編、公開編、短編を既に作成しました。槻の屋神楽も2002年に、3種類の映像の作成を終えています。大原神職神楽については、今回の熊山式年神楽が3回目の撮影でした。そして槻の屋神楽は2度目の撮影ということになります。

最初にお話をする、熊山の式年神楽については、元々撮影すること自体は予定どおりだったのですが、槻の屋神楽については、コロナ禍で例年の祭礼が行われず、記録作成事業のスケジュールが予定どおりにできない中で、急ぎょ計画したものでした。その経緯についてはこの後お話しますが、今回こういうコロナ禍の中で映像を作成するという時に、2つの事例とも既に一度きちんと記録作成をしていた点は、今回の撮影が可能になった1つの大きなところだったと思っています。



図2 今回取り上げる事例の所在地



図3 大原神職神楽（熊山三寶大荒神式年神楽）



図4 槻の屋神楽（雲南市木次町）

撮影対象	撮影年	記録編	公開編	短編	備考
大原神職神楽	1998年	○	○	○	
大川端式年神楽	2014年	○	—	—	式年神楽実行委員会制作のダイジェスト版あり
熊山式年神楽	2021～22年	○	—	○	
槻の屋神楽	2002年	○	○	○	
槻の屋神楽	2020年～	○	—	—	

図5 大原神職神楽と槻の屋神楽の記録映像作成状況

(1) 大原神職神楽（熊山三寶大荒神式年神楽）

それでは、1つ目の大原神職神楽（熊山三寶大荒神式年神楽）に移りたいと思います。最初に大原神職神楽について簡単にお話をしておきます。この神楽は、雲南市の北部を中心とする旧大原郡の神職で構成される大原神職神楽保持者会により伝承されている神楽です。島根県内では貴重な神職のみで神楽を伝承する点、それから出雲地方では他に例のない神懸かりを伴う託宣神事などの特殊な神事や演目を保持するという点から、1961年に県の無形文化財に指定されました（後に無形民俗文化財に改称）。現在の会員数は約25名です。先ほども言いましたように、2000年に報告書、写真、映像による記録作成を実施しました。また、2014年には大川端^{おおかわばた}三寶大荒神式年神楽の記録編を作成しています。これは今日お話をする、熊山の三寶大荒神式年神楽と同じ祭式で行われる神楽なのですが、熊山の隣の大川端という地域で行われたものです。

これから熊山三寶大荒神式年神楽開催までの経緯についてお話しますが、県指定になっている大原神職神楽が担当するのは、祭祀と神楽の部分で、祭り自体を主催するのは、松江市東忌部町熊山地区（約30戸）です。前回は、1988年に式年神楽が開催されました。式年神楽の準備自体は、2016年に地元で組織された荒神神楽準備委員会を中心に進められて、2019年に実行委員会が改めて立ち上げられて準備が本格化しました。

2020年の5月が44回目の式年神楽の催行予定日だったのですが、この年の4月、県内で感染者の確認などを受けて、同月中旬に開催の延期が決定されます。この時既に仮設の舞台設営が始まっていて、広報物や記念品も発注済みでした。図6は、2021年に撮影した熊山三寶大荒神式年神楽の準備の様子ですが、神楽は普通の神社の拝殿や神楽殿でやるわけではなくて、仮の舞殿を建て、そこで一晩の祭祀や神楽が行われます。

本来の神楽の当たり年であった2020年の4月14日に、舞殿はここまで設営が進んでいましたが（図7参照）、この後に開催が延期になり、このまま残しておく訳にはいけないため、一旦取り壊されました。左側のようにパンフレットとかポスターも準備されていました。

2020年の10月、来年の5月にはどんな状況でも必ず催行するというのを地元の人が決定します。当初は時間の短縮なども検討されましたが、結果的には2014年の大川端での三寶大荒神式年神楽とほぼ同じ規模と内容で催行されるに至ります。その代わり、参集する神職の人数は、大川端の時よりも抑えられましたし、事前の広報などはせず、地区外からの見学者は親戚も含めて原則受け入れなしで、感染防止の対策も徹底されました。

見学者を地区外から受け入れな



図6 舞殿の準備（2021年5月15日撮影）



図7 左：パンフレットの表紙 右：舞殿（2020年4月14日撮影）

いというのは、地元には大きな判断でした。地元の方にとっては、33年に1回地区外から地元に関係や知人を呼んで、盛大にお祭りをする日と意識されています。仮設舞台の周りに莫塵などを敷いて、夜はまだ寒いのでこたつなどを持ち込んで、一晩中ご飯を食べたりお酒を飲んだりしながら賑やかに神楽を見るとというのが通例でした。このように、地元の方々が非常に楽しみにされているお祭りでもあったんですが、そういうところを全て今回はやめて、その代わりに、式年のお祭りを省略なしできちんとやるという判断をされました。図8に神楽の進行表を示しましたが、約17時間にわたる非常に長時間にわたるお祭りです。これがほとんど省略せずに行われました。

撮影時の状況ですが、大原神職神楽保持者会では2019年の夏から稽古を始められましたが、2020年度以降の上演機会は熊山の式年神楽までありませんでした。稽古もあまりできず、皆さんが集まって打ち合わせをする機会もなかなかなかったとかがっています。ただ、この神楽の実施主体である熊山地区のほうは、延期が長引くほど地区民のモチベーションが低下することを懸念されて、早期の開催を目指されていました。2014年に大川端の式年神楽も県で撮影をしましたが、準備や関連する神事までは撮影しなかったのが、今回は前日の準備から撮影を行いました。その過程で目に入ったのが、地元の熊山地区の皆さんが式年神楽開催に向けて尽力される姿でした。

そういう姿を目の当たりにし、またいろいろな映像も取れましたので、神楽が中心となる記録編に加えて、コロナ禍で開催された式年神楽をテーマにした15分程度の短編の制作を新たに追加することにしました。

それから、今回は記録編に対する期待が高いということがありました。先ほども言ったように、本来ならば集まるはずだった地区外に住む親戚などから、「式年神楽の様子を見たいから映像が欲しい」という要望が早い段階から地区の方を通してこちらに寄せられていました。本当は編集作業を来年度に回したかったんですが、こういう要望がありましたので、何とか今年度内に仕上げようと、今頑張っているところです。

（2）槻の屋神楽

「槻の屋神楽」は、槻の屋神楽保持者会が伝承する出雲神楽の1つで、こちらも1962年に県の無形文化財に指定されました（後に無形民俗文化財に改称）。先ほども説明しましたように、2002年に写真と映像による記録作成を実施しています。この団体では、2018年に保持者認定を行い、新たに4名の若手会員を認定しました。現在の会員数は16名です。

2020年度に撮影を予定していた熊山三寶大荒神式年神楽の開催延期を受けて、その代替事業として計画、実施しました。今回の撮影では2002年度に撮影しなかった演目、それから奏楽の模範演奏、舞所の準備などを撮影対象とすることに決めて、3カ年の計画で開始しました。

時 刻	次 第
14:00～14:20	湯立神事
14:20～15:00	式年祭
15:30～17:30	七座神事（7 演目）
19:00～5:45	神楽能奉納（12演目） （3:45～4:50 託宣神事）
5:15～6:30	奉祝祭

図8 熊山三寶大荒神式年神楽進行表

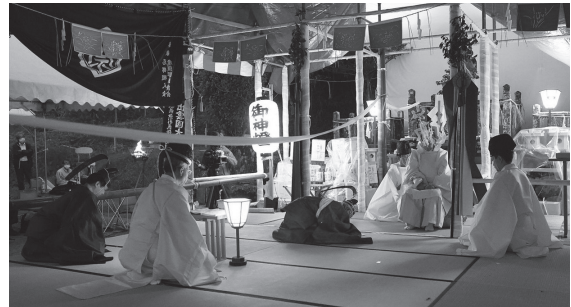


図9 熊山三寶大荒神式年神楽の様子

こうした内容に決まったきっかけは、保持者認定が終わった後に行われた講評という伝承者との交流機会の時でした。その中である伝承者の方から、2002年に収録できなかった演目の中に、まだベテランの方が記憶をされていて、上演可能な演目や演出があることをうかがいました。また、近年、上演機会が減少し、若手に伝承する機会も減っているというお話もうかがいました。このようなお話を講評の場でうかがっていたので、この内容ならコロナ下での撮影も可能であり、ちょうど良いのではないかとということで、撮影することになりました。

それを受けまして、2020年の10月に2演目を収録しました。2年目の今年度も収録する予定でしたが、コロナ感染の第5波が島根県の山間部にまで及び春から稽古ができなかったため、収録は来年度に延期となってしまいました。来年度以降も梶の屋神楽は撮影していく予定です。



図 10 梶の屋神楽保持者認定の様子



図 11 梶の屋神楽収録風景

4. おわりに

昨年度と今年度の夏に、県内の無形民俗文化財の伝承団体を対象としたアンケート調査を実施しました。調査結果からは、コロナ禍による上演機会の減少だけでなく、コロナ禍以前から課題になっていた、芸能の伝承者や祭礼の担い手の減少が改めて浮き彫りになったのですが、2021年度の調査ではコロナ禍の長期化によって、運営面の不安とともに会員のモチベーション低下を懸念する回答が増加しました。

熊山の式年神楽の実施主体である熊山地区では、延期が繰り返されることで地域民の意欲が低下する恐れがあったため、延期を一度限りにしたとうかがいました。また、熊山地区の方々の場合、記録撮影について、困難な状況下で遂行された式年神楽の記録を残すことで、次回の33年後の式年神楽につなげたいという思いもあったようです。熊山三寶大荒神式年神楽の実行委員長さんにインタビューした時には、以下のような発言がありました。

新型コロナウイルスという感染症の中での、感染予防をする中での催行ではありましたが、これもまた時代の流れの中で一つの伝承の中の1ページとして後世に受け継がれるものだと、そういう風に感じています。

感染症対策をしながら神楽を行ったこと自体は、次の式年神楽の開催時に役立つわけではないけれども、困難な中でも式年神楽をやり遂げたことを、後世の人には映像を通して見て欲しいと、おっしゃっていたのが印象に残っています。

それから梶の屋神楽では、コロナ禍以前から上演の場が減り、ベテランから若手への伝承機会が減少しており、保持者認定や記録作成という県の制度や事業自体も、新たな担い手の確保や伝承の貴重な機会として捉えられているという現状に直面しました。将来の伝承者育成の教材への活用が想定される成果品、記録映像だけでなく、記録映像の作成過程や制度そのものが、現在の伝承活動の側面的支援になりつつあると、少し楽観的かもしれませんが、感じているところです。

時間の都合上、お話できなかった部分もありますので、また後の議論の時に少しご紹介できればと思いますが、私のほうからは以上です。ありがとうございました。

コロナ禍における記録作成事業 — 島根県での取り組みから —

島根県教育庁文化財課古代文化センター
石山 祥子

1. はじめに

島根県では2020年度以降、2件の記録映像の作成事業を実施した。ひとつは、結果的に新型コロナ流行下で開催された比較的大がかりな祭礼行事を記録することになり、もう一方は、伝承の危機に直面する団体にとって、記録作成事業がどのような意義を持ちうるのかを改めて考える機会となった。

いずれも21年12月時点では事業として完了しておらず、また、事前に綿密な計画や準備をして臨んだものではないが、コロナ禍で取り組んだ記録映像作成事業の一事例として報告したい。

2. 島根県の記録作成事業について

(1) 島根県内の無形民俗文化財について

- 島根県指定の無形民俗文化財は34件、国指定は7件（2021年12月現在）
- 県の無形民俗文化財への指定に際し、保持者や保持団体が明らかなものに対しては、団体の代表者に対して保持者の証明書、会員には構成員の証明書を発行
- 新規に構成員が加わる場合は、確認のため審査（保持者認定）を実施

(2) 島根県における記録作成事業の特色と現状

- 記録映像の作成は、県文化財課の内室である島根県古代文化センター（1992年設立）の民俗分野の基礎研究事業として1993年度（平成5）から実施

【1993～2005年度の事業内容】

- ① 報告書
 - ② 写真…道具・文書類、当日の模様等
 - ③ 映像…「記録編」（ほぼノーカット）
- 「公開編」（約30分）
- 「短編」（約5分）
- 2006年度（平成18）以降は②・③を中心に実施
- これまでに59タイトル制作（うち、2タイトルは県教委時代制作分）
 - うち、「記録編」・「公開編」・「短編」全て制作しているのは31タイトル
 - 県指定は25/34件、国指定は6/7件を撮影済み
- 「公開編」と「短編」は、島根県のyoutube公式チャンネル「しまねっこCH」等で視聴可能

資料2-2

第16回無形民俗文化財研究協議会
発表②

2021年12月17日(金)
於・東京文化財研究所

【図1】近年の作成状況

	タイトル	成果品	2019年 (R1)	2020年 (R2)	2021年 (R3)	2022年 (R4)	2023年 (R5)
56	三谷神社の獅子舞 (出雲市)	記録編 公開編 短 編	編集				
57	唐川神楽 (出雲市)	記録編	撮影・編集				
58	槻の屋神楽 (雲南市木次町)	記録編		撮影・撮影	(延期)	撮影・撮影	撮影・撮影
59	熊山三寶大荒神式年神楽 (松江市)	記録編 短 編		(延期)	撮影・編集	撮影・編集 (御誕生祭)	

3. コロナ禍における記録作成の取り組み

【図2】今回取り上げる事例の所在地



【図3】大原神職神楽と槻の屋神楽の記録映像作成状況

撮影対象	撮影年	記録編	公開編	短 編	備 考
大原神職神楽	1998 年	○	○	○	
大川端式年神楽	2014 年	○	—	—	式年神楽実行委員会制作 のダイジェスト版あり
熊山式年神楽	2021～22 年	○	—	○	
槻の屋神楽	2002 年	○	○	○	
槻の屋神楽	2020 年～	○	—	—	

(1) 大原神職神楽（熊山三寶大荒神式年神楽）

①大原神職神楽について

- 旧大原郡（雲南市北部）を中心とする神職で構成される「大原神職神楽保持者会」により伝承される神楽

- 県内では貴重な神職のみの神楽を伝承する点、出雲では他に例のない神懸りをともなう「託宣神事」等の特殊な神事や演目を保持する点等から、1961年（昭和36）に島根県の無形文化財に指定（のちに無形民俗文化財に改称）
- 1870年（明治3）に松江藩より神職による神楽が禁止され、旧大原郡でも一時は神職の手から神楽が離れたが、大正時代に保存会の前身である「神能再興会」が組織され、今日にいたる。現在の会員数25名。
- 2000年度（平成12）に報告書・写真・映像による記録作成を実施
- 2014年度（平成26）に大川端三寶大荒神式年神楽の「記録編」を作成
→大原神職神楽を撮影するのは今回（熊山）で3度目

②「熊山三寶大荒神式年神楽」（松江市東忌部町熊山）開催までの経緯

- 松江市東忌部町熊山地区（約30戸）で、33年に1度催行される式年神楽
※前回は1988年（昭和63）開催
- 式年神楽の準備は2016年（平成28）に地元で組織された荒神神楽準備委員会を中心に進められ、2019年（平成31）に実行委員会が改めて立ち上げられ、準備が本格化した
- 2020年（令和2）5月16～17日に44回目の式年神楽を催行予定だった
- 同年4月、県内での感染者確認などを受け、同月中旬に開催の延期が決定
→この時点で仮設の舞台設営は始まっており、広報物や記念品も発注済み
- 同年10月、来年5月の催行が決定される
- 2021年5月15～16日に式年神楽を催行
- 時間の短縮等も検討されたが、結果的には2014年の「大川三寶大荒神式年神楽」（松江市東忌部町大川端）とほぼ同じ規模・内容で催行された
- 参集する神職の人数は、大川端の時よりも抑えられた
- 事前の広報はせず、地区外から見学者は親戚も含めて原則受け入れなし
- 受付での検温・連絡先の記入、会場内での飲食禁止等の感染拡大防止対策が徹底された

⇒式年神楽の催行が最優先された

【図4】熊山三寶大荒神式年神楽進行表

時 刻	次 第
14:00～14:20	湯立神事
14:20～15:00	式年祭
15:30～17:30	七座神事（7演目）
19:00～5:45	神楽能奉納（12演目） （3:45～4:50 託宣神事）
5:15～6:30	奉祝祭

③撮影時の状況

- 大原神職神楽保持者会は、2019年（令和1）の夏から式年神楽に向けた稽古を始めたが、20年度以降の上演機会は熊山の式年神楽までなかった
- 「熊山三寶荒神式年神楽」の実施主体である熊山地区では、延期が長引くほど地区民のモチベーションが低下することを懸念され、早期開催を目指した

資料2-4

第16回無形民俗文化財研究協議会
発表②

2021年12月17日(金)
於・東京文化財研究所

- 2014年に大川端の式年神楽も撮影したが、準備や関連する神事までは撮影されなかったので、今回は前日の準備から撮影を行った
→「記録編」に加えて、コロナ下で開催される式年神楽を題材とした「短編」の制作を新たに追加
→「記録編」に対する期待

cf. 大川端三寶大荒神式年神楽（2014年）の場合

(2) 槻の屋神楽（雲南市木次町湯村字槻屋）

①槻の屋神楽について

- 槻の屋神楽は「槻屋神楽保持者会」が伝承する出雲神楽のひとつで、1962年（昭和37）に島根県の無形文化財に指定（のちに無形民俗文化財に改称）
- 2002年度（平成14）に写真・映像による記録作成を実施（報告書は1980年〔昭和55〕に県教委で制作済み）
- 2018年度（平成30）に保持者認定を実施し、新たに4名の若手会員を認定
現在の会員数は16名

②撮影時の状況

- 2020年度に撮影を予定していた「熊山三寶大荒神式年神楽」の開催延期を受け、その代替事業として実施
- 保持者会との打合せにより、未収録の演目・奏楽・舞所の準備等を撮影対象とすることを決め、記録映像の作成を3ヶ年の計画で開始
←保持者認定時の雑談がひとつのきっかけに
- 2020年10月に2演目（2002年度収録分の再撮影）を収録
→舞い手は若手会員中心
- 2021年度（令和3）は未収録の2演目と奏楽の撮影を行う予定だったが、第5波の影響により春以降稽古ができず、収録は来年度に延期

4. おわりにかえて

- 2020年度と21年度夏に、県内の無形民俗文化財の伝承団体を対象としたアンケート調査を実施した¹。コロナ禍による上演機会の減少だけでなく、コロナ禍以前から課題になっていた芸能の伝承者や祭礼の担い手の減少が改めて浮き彫りにな

¹ 20年度は県下の国・県・市町村指定の無形民俗文化財を対象とし99団体より回答（県文化財課で実施）、21年度は国・県指定の無形民俗文化財を対象とし27団体より回答（古代文化センターで実施）。

第16回無形民俗文化財研究協議会
発表②

2021年12月17日(金)
於・東京文化財研究所

ったが、21年度の調査ではコロナ禍の長期化により、運営面の不安とともに、会員のモチベーション低下を懸念する回答が増加した。

→熊山の式年神楽の実施主体である熊山地区では、延期が繰り返されることで、地区民の意欲が低下する恐れがあったため、延期を一度限りにしたという。

⇒主催した熊山地区の人々にとっては、困難な状況下で遂行された式年神楽の記録を残すことで、次回の式年神楽につなげたい思いがあった。

新型コロナウイルスという感染症の中での、感染予防をする中での催行ではありましたが、これもまた時代の流れの中で一つの伝承の中の1ページとして後世に受け継がれるものだと、そういう風に感じています。

(熊山三寶大荒神式年神楽実行委員長のインタビュー時の発言)

- 槻の屋神楽ではコロナ禍以前から上演の場が減り、ベテランから若手への伝承機会も減少していた。保持者認定や記録作成という制度や事業自体が、新たな担い手の確保や伝承の貴重な機会として捉えられている現状

→将来の伝承者育成の教材への活用が想定される成果品（記録映像）だけでなく、記録映像の作成過程そのものも現在の伝承活動の「側面的支援」になりつつある。

文化財の保護という観点から我々ができることは、伝承活動の中心を担う者たちの連続性の意識を認め、その意識が十分に発揮できるような環境作りなどの側面的支援を行い、結果として様式が良く保たれることを「期待する」ことにあるのではないかと考える。[俵木 2018: 85]

〈参照文献〉

石塚尊俊／記録 1980年『出雲槻之屋神楽』槻之屋神楽保存会

東京文化財研究所無形文化遺産部／編 2008年『無形民俗文化財映像記録 作成の手引き』東京文化財研究所無形文化遺産部

島根県古代文化センター／編 2000年『出雲国大原神職神楽』島根県古代文化センター

俵木 悟 2018年(2006年)「民俗芸能の変化についての考察」『文化財／文化遺産としての民俗芸能：無形文化遺産時代の研究と保護』勉誠出版

発表③

動画配信の影響力 —静岡県掛川市の三熊野神社大祭を事例として— 谷部 真吾（山口大学）

皆さまこんにちは。ただ今ご紹介にあずかりました、山口大学人文学部の谷部と申します。私自身は、これまで主に日本の祭礼の近現代における変化をテーマに、研究を続けてきました。そのため、映像に関しては初心者もいいところです。また文化財をめぐる問題に関しても、ほとんど知らないというのが正直なところです。今回「映像記録の力」というお題をいただきましたが、ここ最近、調査に入っている祭りで、「祭り」と映像に関する興味深い現象が見られましたので、本日はそのことをご報告したいと思います。お耳汚しですが、おつきあいいただければ幸いです。

本発表では、静岡県掛川市横須賀地区の三熊野神社大祭を事例として取り上げます。この祭りの関係者たちは、新型コロナウイルスの感染拡大が収束しない状況でも、安全・安心な祭りの実施を模索するため検証実験を行い、その様子を YouTube に公開しました。本日は、そうした動画公開にいたるまでの一連のプロセスを紹介しつつ、祭り関係者自身が動画を撮影し、編集し、公開することの意義について考えてみたいと思います。午前中の川村さんの話の中に、映像を身近なものとして捉える必要があるという指摘があり、またその後に YouTube の動画を紹介していましたが、そうした方向に沿う内容になるかと思います。したがって私の発表は、文化財との関係で映像を議論するといったものではなく、祭り関係者あるいは祭り当事者にとって映像とは何かについて、考えていくことになるかと思います。

1. 地域と祭りの概要

まずは、事例として取り上げる地域と祭りの概要について、簡単に触れておきたいと思います。静岡県掛川市の横須賀地区は、掛川市の南部に位置しています。人口は2021年（令和3）4月現在で2,300人となっています（掛川市のwebサイトより）。三熊野神社大祭は、ここに鎮座します三熊野神社の祭りであり、毎年4月第1週の金・土・日に行われます。この祭りには氏子地区13町が参加し、祭り当日には各町から^{ねり}祢里と呼ばれる二輪の山車が曳き出されます。右側の写真が祢里です（図2参照）。祭り好きの方はご存じだと思いますが、祢里は一本柱万度型と呼ばれるタイプの山車であり、近世の江戸で行われていた山王祭や神田祭で曳き回されていた山車と同じであるとされています（松崎2010:130）。そうしたこともあってか、この祢里の曳き回しは、2019年（平成31）に国から「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択されています。

次に、この祭りの行事構成を紹介します。まず金曜日の午後に、祢里の曳き回しが町ごとに行われます。土曜日になりますと、午前中に奉納祭と呼ばれる囃子の奉納が三熊野神社境内で行われ、その

後、役廻りとなります。役廻りとは各町へのあいさつ回りのことをいいます。祢里を曳いてよその町の会所に行き、そこであいさつを交わします。最終日の日曜日には、まず朝に三熊野神社で神事が行われ、その後、神輿の渡御となります。夕方になりますと、地固め舞、田遊びと呼ばれる民俗芸能が神社境内で奉納されます。夜には、千秋楽が行われます。千秋楽では境内に13町の山車が集り、一斉に囃子を奏でて解散となります。以上が、三熊野神社大祭の主な行事構成です。ちなみに祢里は3日間とも、それぞれの町が決めた巡行路にもとづいて曳き回されます。

祭りの概要の最後に運営組織について述べたいと思います。運営組織は各町の運営組織と、大祭全体の運営組織とに大別されます。まず各町の運営組織は、町の役員、練係、青年の3つからなります。町の役員は区長、副区長などの町内会の役員から構成されます。祭りの際、区長は総代と呼ばれ、町内運営組織の総責任者を務めます。次に練係は、町によって異なるのですが、30代から40代の男性が担当し、練係の代表は取締と呼ばれます。祭りの運営は、準備から後片付けにいたるまで、実質的に練係を中心に行われます。最後に青年です。青年も町によって異なるのですが、20代から30代半ばまでの男性からなり、青年の代表は幹事と呼ばれます。彼らは祢里の曳き回しを担います。これらが各町の運営組織ですが、大祭全体の運営組織は、氏子総代会、祭典総代会、取締会、幹事会という4つの組織からなります。このうち、氏子総代会は三熊野神社の氏子総代によって、また祭典総代会、取締会、幹事会の3つは、それぞれ各町の総代、取締、幹事によって構成されます。これらの諸組織が連携して、三熊野神社大祭は執行されます。

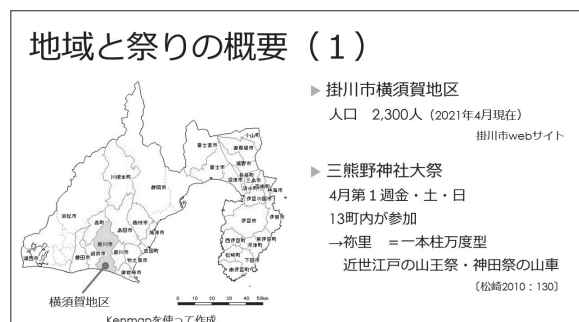


図1



図2

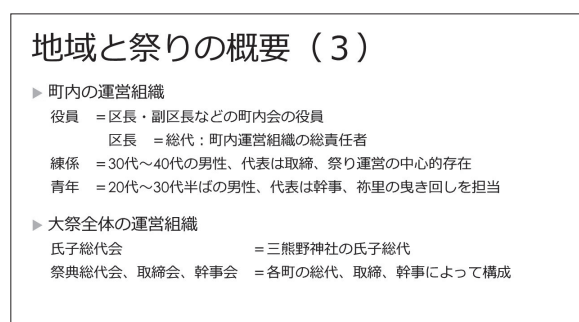


図3

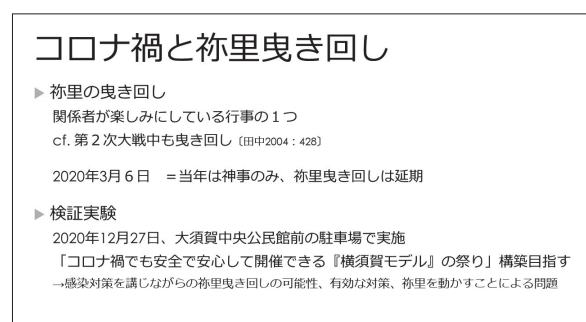


図4

2. コロナ禍と祢里の曳き回し

こうした三熊野神社大祭におきまして、祢里の曳き回しは関係者がもっとも楽しみにしている行事の1つです。そのことを象徴するエピソードがあります。この祭りは第2次大戦下でも、曳き回しを続けたそうです——但し、1938年(昭和13)は、最終日の夜のみの曳き回しであったようです——(田

中 2004：428)。それほど祢里の曳き回しは、当事者たちからすると重要で楽しい行事なのですが、彼らの思いをもってしても新型コロナウイルスには勝てませんでした。全国的に新型コロナウイルスの新規感染者が拡大し始めた 2020 年 3 月 6 日に、祭りは神事のみ行い、祢里の曳き回しを延期するという決定が氏子総代会で下されました。これにより、2020 年の祭りで祢里が曳き回されることはありませんでした。翌年、つまり 2021 年ですが、翌年はなんとかなるだろうと思っていたのですが、新型コロナウイルスの猛威は収まりませんでした。このため、翌 2021 年の祭りにおける祢里の曳き回しもどうなるか、先が見通せない状況でした。そうした中、暮れも押し迫った 2020 年の 12 月 27 日に、横須賀地区にある大須賀中央公民館前の駐車場で検証実験が行われました。なお、あらかじめ申しておきますと、2021 年の三熊野神社大祭における祢里の曳き回しは、検証実験が行われたにもかかわらず中止となっています。

3. 祢里の曳き回しに関する検証実験

2020 年 12 月 27 日に行われた検証実験は、「コロナ禍でも安全で安心して開催できる『横須賀モデル』の祭り」の構築を目指し、感染対策を講じながらの祢里の曳き回しは可能なのか、どういった対策が有効なのか、実際に祢里を動かすといかなる問題が生じるのか、などを確認するために実施されました。検証実験の発案者は、横須賀の祭りに参加する 13 町の 1 つである川原町^{かわらまち}の取締であった A さん（1975 年生まれ）でした。A さんは検証実験をするというアイデアを思いつきますと、川原町の練係のみならず、町の主だった人々にも相談しました。A さんによると、当初はもっと簡単に小規模な実験を構想していたそうです。しかし、このアイデアを川原町の総代であった B さん（1954 年生まれ）に話したところ、「中央公民館前でやるべきだ」と指摘され、B さん自ら中央公民館の駐車場を予約してくれたそうです。同所はそれなりの広さがありますので、そうした広いところでやるならば、検証実験をしっかりしたものにする必要があると A さんは思ったといいます。また、B さんからは、この検証実験を自町だけで行うのではなく、取締会の監修の下で行うよう——それは、検証実験を、三熊野神社大祭実施に向けた公式行事として行うことを意味しているといえます——早い段階からいわれていたそうです。

このようにして、検証実験に向けて本格的な準備を始めることになったわけですが、その準備過程は大きく 2 つに分けることができます。1 つは関係者への説明であり、もう 1 つは検証項目の確定でした。まず関係者への説明に関して、10 月は川原町の人々を中心に意見交換をしたといいます。その結果、2020 年 12 月 12 日に開かれた町の定例会で承認されました。やや話が前後しますが、川原町の定例会で承認されるちょっと前、ある程度町の意見がまとまってきた 11 月末ごろ、祭典総代会や取締会にも、こういった検証実験を実施しようと思っているという話をし始めたそうです。最終的に、検証実験を監修することになる取締会の承認を取り付けたのは 12 月初旬だったといいます。ちなみに取締会では、当初、その実施をめぐって後ろ向きな意見もあったと聞いています。

次に、もう 1 つの検証項目の確定について、検証実験を実施するというアイデアを立ち上げたものの、具体的に何をどう検証するべきなのかに関しては、実のところ A さんにもよくわからなかったといいます。そのようなときに、川原町の練係の 1 人がネット上にあった記事、具体的には佐賀県の web サイトに掲載されていた「お祭り開催のポイント」という記事——この記事は、すでにネット上に存在していないようです（2021 年 12 月 17 日現在）——を紹介してくれたことにより、国のガイド

ラインや静岡県資料を集めながら、開催に向けて横須賀独自のガイドラインを作っていくことにしたそうです。また、横須賀の検証実験のおよそ1カ月前にあたる2020年11月21日と22日に、徳島県徳島市で「阿波踊りネクストモデル」と呼ばれる検証実験が行われました。この検証実験は、阿波踊り実行委員会がニューノーマル時代における阿波踊りの開催方法を模索するために、徳島県および徳島市との共催で行ったものだったのですが（徳島市のwebサイトより）、そうした阿波踊りネクストモデルに関する新聞記事やネットニュースの記事、さらにはテレビニュース、YouTubeなども見て、どんなことを検証するべきなのか考えていったといいます。これらを参考に、最終的に40にもおよぶ検証項目を確定していきました。また、検証実験に臨むにあたり、参加者の健康確認のため

のフローも整備しました。参加者は、まずネットを使用して参加登録と健康チェックを行い、その後、受付で検温、消毒をし、マスクをしているかどうかのチェックをします。さらには新型コロナウイルス接触確認アプリ、いわゆる「COCOA」がスマートフォンにインストールされているかどうかをチェックし、すべてに問題がないようであれば実験に参加できるという手順を構築しました。

こうして、ようやく2020年12月27日の検証実験当日を迎えます。当日は朝8時から、大須賀中央公民館前の駐車場にて実験が行われました。参加者は川原町の練係・青年を中心に40名弱であり、川原町の衾里を使って行われました。その実験の様子がYouTubeに上がっています。この動画は地元の人が撮影し、編集したものです。大体35分ぐらいの動画なのですが、その動画の一部をご覧くださいと思います。

（映像を上映しながら解説を加えていく）

※動画は、以下をご覧ください。（【本編】コロナ禍でも安全で安心して開催できる「横須賀モデルの祭り」を目指す 遠州河原町・か組による 第一回検証実験（試し曳き）2020 12 27 SUN 大須賀中央公民館 遠州横須賀 三熊野神社大祭 [https://www.youtube.com/watch?v=9vhwu7Q-CEs] 最終閲覧日 2022 年 2 月 17 日）

これは開会式の様子です。これが参加のときのフローになります。左側に出ているのが、参加の際のネット登録画面になります。これをやってから検温をして消毒をすることになっていたのですが、このときに行列ができてしまったとのことでした。また、衾里を曳く綱に、何メートル間隔で人を配置するのがよいかを確認するための検証実験も行われました。さらに衾里を曳く際、衾里を左右に振るのですが、観光客がいた場合、道幅との関係で観光客と曳き手との距離がどうなるのか、観光客にはどこにいてもらうべきなのか、そのようなことも検討されました。加えて、祭りでよく見られる光

検証実験までの経緯（1）

▶ 発案者

川原町の取締役のAさん（1975年生まれ、男性）
当初、もっと簡単に小規模な検証実験を構想
⇨川原町の総代のBさん（1954年生まれ、男性）
大須賀中央公民館前の駐車場を予約 →しつかりとした検証実験に
取締役監修で行うよう示唆

図 5

検証実験までの経緯（2）

▶ 関係者への説明

10月、川原町の人々を中心に意見交換 →12月12日 =定例会で承認
11月末、祭典総代会・取締会に相談 →12月初旬 =取締会の承認

▶ 検証項目の確定

ネット上の「『地域のお祭り』開催のポイント」という記事
→国のガイドラインや県の資料を収集、横須賀独自のガイドライン作成へ
「阿波踊りネクストモデル」（2020年11月21日～22日）関連の記事・映像

最終的に、40の検証項目確定
参加者の健康確認フローの整備
→参加登録・健康チェック、受付（検温・消毒・マスクチェック・COCOAチェック）

図 6

景でもあるのですが、酔っ払いが乱入したらどうするのかといった検証もやっています。

このように、事前に定めた 40 項目について、いろいろなことを想定しながら実験を行ったわけです。そうした検証実験当日の様子は、新聞やテレビなどでも報道されました。また、練系の 1 人を映像撮影係にあって、実験の様子を撮影しました。このとき撮影した映像を、後に A さん自身が編集し、2021 年 1 月 1 日に YouTube 上で公開しました。今ご覧いただきました動画が、それになります。

検証実験当日

- ▶ 2020年12月27日
8:00、大須賀中央公民館前の駐車場にて、実験開始
川原町の練係・青年を中心に40名弱が参加
- ▶ 当日の様子
新聞やTVニュースなどでも報道
動画撮影係（練係）による撮影
→Aさんが編集、2021年1月1日にYouTube上で公開

図 7

4. 映像の影響力

先程も申しましたように、三熊野神社大祭関係者が検証実験を行ったことは、新聞やテレビ、さらにはネットニュースの記事によって広く知られることになりました。その結果、静岡県西部地方、つまり遠州地方の祭り関係者から、検証実験について詳しく教えてほしいという問い合わせが相次いだといえます。彼らは新聞やテレビを見て問い合わせたといっていたそうです。他方、ネットニュースには批判的な書き込みが多く、A さんにその一部を見せてもらったところ、この時期に祢里を曳くのはどうなのかということがいわれていました。

このようなネットニュースの書き込みとは対照的に、YouTube で公開した動画には、2021 年 6 月の時点で、71 の高評価と 3 の低評価がついていたと A さんは語ります。そうしたネットニュースと YouTube における評価の違いに関して、A さんは次のように指摘しています。

映像の影響力（1）

- ▶ 検証実験についての報道
新聞・TV・ネットニュースにより広く知られた
→遠州地方の祭り関係者からの問い合わせが相次ぐ
ネットニュースには、批判的な書き込み多し

図 8

YouTube は動画を見たい人が検索して見るものなので、検証実験動画を見てくれた人は、おそらくお祭り好きなのだろう。そう考えると、YouTube の高評価はお祭り好きの人たちがつけてくれたものであるため、世間一般の意見とは異なり、浮世離れたものなのかもしれない。

A さんによると、検証実験に関する動画を YouTube 上で公開した理由は、いくつかあったとのこと。たとえば、自分たちが真剣に取り組んでおり、祭りを大切に思っていることを、横須賀の人々に理解してほしいという考えもあったといえます。あるいは、新聞やテレビ、ネットニュースなどを見て批判的な意見を持った人たちに、自分たちがどんな検証実験を行ったのか詳しく知ってほしい、いい加減な気持ちでいい加減なことをやったのではないことを知ってほしい、という思いもあったと語ります。もっとも A さん自身も、そうした批判的な意見を持った人々が、この検証実験の YouTube 動画を見ることは、現実的にはないだろうと考えていたそうです。ただ何かのきっかけで、たとえば知り合いなどから、「そうやって三熊野神社大祭のことを批判するけれども、一度、

YouTubeの動画を見てみなさい」であるとか、「横須賀の連中も結構まじめにやっているぞ」といわれることもあるのではないかと思います。Aさんによりますと、実際、彼が期待したようなことが起こったとのこと。Aさんは、知人から、次のようにいわれたことがあったそうです。

この間、ちょっと話をしていたら、「なんか、横須賀の方で、変なこと始めたぞ」といっている人がいたもんでな、「あれは、変なことじゃないよ。こんだけまじめにやっているんだぞ」って、いっておいでな。

繰り返しになりますが、三熊野神社大祭の検証実験に批判的な意見を持つ人々の周囲で、こうしたことが起こるといいと、Aさんは考えていたそうです。また、YouTubeに動画を公開したことにより、その動画を見てくれた人たちが個人のSNS、主にFacebookなのですが、そこにリンクを張ってくれたそうです。そのおかげで、検証実験で具体的にどのようなことをしたのかが、じわじわと広がっていったのではないかとAさんは述べます。そのことを象徴するようなエピソードとして、次のようなことがあったといいます。Aさんが、祭りとはまったく関係のない、掛川市で開かれた教育関係者の集まりに参加したときに、ある女性から話しかけられ、「横須賀ではお祭りの実施に向けて真剣に取り組んでいますね」といわれたそうです。一般に、遠州地方の男性は祭りに熱心なのに対し、女性の関心はあまり高くないといわれています。だからこそ、女性から祭りのことをいわれるのはめずらしいと、Aさんは語っていました。

こうした検証実験をめぐる一連のプロセスについて明らかにした上で、Aさんは、祭り関係者自身が動画を撮影・編集し、YouTube上で公開することの意義について、「新聞やテレビでは伝わらない、当事者の思いを伝えることができる。だから下手でもいいので自分たちで動画を撮影し、編集するべきだ」と指摘していました。

映像の影響力（2）

- ▶ YouTube動画の評価
71の高評価と3の低評価（2021年6月時点）
- ▶ ネットニュースとYouTubeの評価の違い
YouTubeは動画を見たい人が検索して見るものなので、検証実験動画を見てくれた人は、おそらくお祭り好きなのだろう。そう考えると、YouTubeの高評価はお祭り好きの人たちがつけてくれたものであるため、世間一般の意見とは異なり、浮世離れしたものなのかもしれない。
- ▶ 動画をYouTubeで公開した理由
真剣に取り組む、祭りを大切に思っていることを、横須賀の人に理解してほしい
批判的な意見を持った人に、どんな検証実験を行ったのか、知ってほしい

図 9

映像の影響力（3）

- ▶ Aさんが知人からいわれたこと
この間、ちょっと話をしていたら、「なんか、横須賀の方で、変なこと始めたぞ」といっている人がいたもんでな、「あれは、変なことじゃないよ。こんだけまじめにやっているんだぞ」って、いっておいでな。
- ▶ 視聴者による拡散
個人のSNSにリンクを張る → 検証実験の内容 = じわじわと拡散
教育関係者の集まりで、ある女性からかけられた言葉
→ 「横須賀はお祭りの実施に向けて真剣に取り組んでいますね」

図 10

映像の影響力（4）

- ▶ 祭り関係者自身が動画を撮影・編集・公開する意義
新聞やTVでは伝わらない、当事者の思いを伝えることができる
下手でもいいので自分たちで撮影・編集するべき

図 11

5. おわりに

以上、本発表では三熊野神社大祭関係者によって実施された、新型コロナ禍での祭り実施に向けた

検証実験を事例として、祭り関係者自身が動画を撮影、編集、公開することの意義、あるいは可能性について報告してきました。これまで祭りや民俗芸能を撮影する主な機会とといいますと、行政による記録映像やテレビ放送用の撮影——有名なものとして、ダイドーグループの「日本の祭り」があります——、さらにはケーブルテレビによる生中継用の撮影などがあったかと思います。本発表

まとめにかえて

- ▶ 祭りや民俗芸能の撮影機会
記録映像、TV・CATV放送用の撮影……
- ▶ 本発表の事例
コンテキストが大きく異なる（撮影主体、撮影・公開の目的、撮影対象）
当事者の認識 = YouTubeは自分たちの思いを伝えることができるツール

図 12

の事例は、こうしたこれまでの撮影のあり方と、コンテキストが大きく異なるといえるのではないかと考えています。まず撮影する主体が異なりますし、映像を撮影したり公開したりする目的も異なります。さらには、撮影対象も異なるものと思われます。誰が撮るのか、何のために撮るのか、何を撮るのか、なぜその映像を公開するのか、こういった点に差異が見られるのではないかと考えます。加えて、Aさんも述べていたように、YouTubeは当事者たちの思いをダイレクトに伝えることができるツールであるといえます。粗っぱい言い方をしますと、YouTubeは、当事者によるセルフプロデュースを可能にする映像ツールだと指摘することができるかと思われます。

そうしたことを踏まえますと、不特定多数に動画を見てもらえるという意味で、これまでもあった16mmフィルムや8mmフィルムとも、またちょっと違う位置づけになるのではないのでしょうか。私自身は現在、このYouTubeに関して、イメージとしては郷土史家による出版物に近いのではないかと考えています。ただ、その種の出版物に比べて、人々の目に触れる可能性が格段に高いということとを考慮しますと、YouTubeで公開された動画の影響力は、良いにつけ悪いにつけ、大きいだろうと思っています。さらにYouTubeでの動画公開の特徴としまして、先程事例の中でFacebookを通じて動画のことを拡散してもらったことがあったと述べましたが、このようにYouTubeとSNSとの相性のよさを指摘することができます。その上、削除しない限り、いつでも視聴することが可能です。このあたりは、既存のテレビやケーブルテレビなどとも、また大きく異なるのではないかと考えます。

以上からしますと、どうやら、なにか新しい現象が立ち上がろうとしているのではないかと、そんな予感が私にはあります。その「新しい現象」とは具体的に何なのかについては、もう少し広く深く分析する必要があるだろうと思われます。さしあたり、今回ご紹介した事例は、民俗事象と映像との関係をめぐる問題系に、新しい切り口を与えてくれる可能性があるのではないかとこのことを指摘しまして、本発表を終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

（参考文献）

田中興平 2004『続・遠州横須賀三熊野神社大祭 そこに江戸の祭文化がある』

松崎憲三 2010「静岡県下の『小江戸』と『天下祭り』」松崎憲三（編）『小京都と小江戸』岩田書院 pp.129-165

掛川市（web サイト）

<https://www.city.kakegawa.shizuoka.jp/gyosei/docs/7692.html>（2021年12月15日閲覧）

徳島市（web サイト）

<https://www.city.tokushima.tokushima.jp/kankou/awaodori/taisei/jikkou/2020/202004zitu.files/2020-04siryo1.pdf>（2022年2月26日閲覧）

発表④

テレビで届ける。楽しく伝える。獅子魂^{し し こん}流映像活用法！

大島 信彦（獅子魂プロジェクト）

初めまして。富山県高岡市からまいりました、獅子魂^{し し こん}プロジェクトという活動をやらせていただいております大島と申します。よろしくお願いいたします。今回、このような場所で発表させていただくという機会を得ることができまして、大変光栄だと思っております。よろしくお願いいたします。

それでは、ちょっと何か今までの発表者とは全く異色な感じの人間なものですから、簡単な紹介から入っていくんですけども、本日、活動紹介から発表総括まで、7つぐらいに分けてお話をさせていただきます。と思っております。

1. 富山の獅子舞と獅子魂プロジェクト

獅子魂プロジェクトって一体なんだという話なんですけど、私、実を言いますと広告代理店を営んでおります。それから、若い時から獅子舞に参加したり、現在は地元の神社の総代をしていたり、いろんな文化的なことはちっちゃい頃からやってきていました。その中で今問題になっているのは、少子高齢化によって地域文化の継承が難しくなっていることです。これはかなり前からなんですけど、私どももそれに対して何かできるんじゃないかなというように思いまして、何か発信できないかというところから始めたのが獅子魂プロジェクトの活動です。

富山県には、県のほうで調べたところ 1,170 の獅子舞があるとの調査結果があります。私自身は、富山にはかなりの数の獅子舞文化が残っていて、それが日本一であったということを知っていましたが、それを県民が知らない、獅子舞をやってる人間も知らないということで、そういった人たちにまずは知ってもらおうというところから活動を始めました。

具体的には、獅子舞文化の伝承、富山の日本一というものを情報発信したり、あと獅子舞団体に関する情報の交流、関係者間の交流を促進させる取り組みを行っています。あともうひとつは、富山の獅子舞という文化の、どう言いますか、重さというか、そういった重圧に耐えられなくなるような若い人たちがたくさんいるので、まずは好きになってもらおうというところから活動を始めております。2013 年に活動開始しまして今に至るんですが、このコロナ禍においては、獅子舞に関するよろず相談窓口のような感じになっております。


そのコロナ禍において、今どんなことが起こっているかと言いますと、富山県ではもう 2020 年 2 月から、今日の 2021 年 12 月に至るまで、ほとんど獅子舞はできておりません。開催したところも今年は何箇所かあるんですが、それもほんとに神社だけで行うとか、希望されるお宅だけを回るとかというような感じで、縮小形態で獅子舞が開催されたというように聞いております。

では、その間何もしていないのかという話になってきますが、獅子魂は細々と活動していました。

たとえば、いろんな新聞とかテレビなんか載ったことをもう一度獅子魂のホームページで再度お知らせしたり、新聞などのメディアに載らないようなイベントとかを紹介して欲しいんだという声があれば、そういった方々のPRの応援をしたり。あとは先ほども言いましたように、よろず相談みたいな感じで、感染対策に対する相談を受けたり、いろんな情報の提供をしたりというようなことをやっておりました。

①獅子魂プロジェクトってなに？ (活動紹介)

- 獅子舞文化伝承数日本一富山の獅子舞に関する情報を発信
- 獅子舞団体や関係する個人、団体、企業をつなぐ活動
- 獅子舞を受け継ぐ人に獅子舞文化を好きになってもらう活動



- ・2013年に活動開始
- ・ホームページを中心にした情報発信 & 交流活動
- ・獅子舞関係のイベント開催
- ・マスコミ各社への情報提供および報道依頼
- ・テレビ番組の企画制作、放送
- ・獅子舞文化を活用した商品やサービスの企画、開発
- ・その他よろず獅子舞に関する相談窓口

獅子舞文化伝承数日本一を富山県内の獅子舞関係者に知ってもらおう事を最初の一步として活動開始

www.shishi-kon.com

図 1

②富山の獅子舞もコロナ禍は冬眠中が！ (現状紹介)

富山県では2020年2月以降、新型コロナウイルスの感染不安により日常生活から行事ごとまで大多数が休止や中止状態に向かいました。その影響は、様々な文化活動にも大打撃を与え、富山県内の獅子舞はもちろんのこと神事、祭事のほとんどが中止に迫られました。令和3年12月現在においても獅子舞の状況は改善していません。

コロナ禍の獅子魂プロジェクト活動あれこれ

H P や SNS 通じて県内の獅子舞に関する新聞記事やテレビニュースなどを再配信

- 若い世代は新聞離れが進んでいるためインターネットでアプローチ

獅子舞に関する富山県内の活動やイベントなどをPR応援

- マスコミで報道されないような小さな取組などは、依頼を受けた場合に発信応援

獅子舞団体や関係者からの相談、情報提供

- 他の獅子舞団体の動向確認や感染対策相談、コロナ後の獅子舞再開への相談

www.shishi-kon.com

図 2

2. 「おしえて！獅子舞テレビ」

さて、今回のテーマであります映像の話に移っていきますが、獅子魂は映像、テレビ番組だけをやっているということではなくて、これはあくまでも一部です。それで、なぜテレビに着目したかというのと、本業の広告代理業という部分もあるんですが、何か自分でやりたいなと思った頭の中を、その時のものをちょっと図にしてみました(図3参照)。これがその時に思っていた、テレビ番組をやりたいなとか、獅子魂で何か伝えたいなという思いをちょっと図面化したんですけども、こういったことをやって、ホームページやいろんな活動をやり始めますと、その思いを汲み取ってくれるテレビ局とか、新聞社とか、そういったところから取材の打診が来たりしておりました。

その中で一番大きかったのは、今回ご紹介するケーブルテレビ高岡さん、正式には高岡ケーブルネットという放送局なんですけども、そこの制作部長さんから、お会いしたこともなかったんですが、突然電話を頂きました。「ちょっとテレビで富山県の獅子舞の魅力を伝えてみたいんだけど、何か協力してくれる、一緒にやらない」っていう話が電話であって、30分後にテレビ局で制作部長と会って、1時間後にやるぞというように決まってしまうました。こうしたとんでもないような展開から始まったわけですが、それがなぜこうなったのかと言いますと、図3の右上にある「意外と多かった獅子舞バカ」っていうことで、その部長も結構獅子舞が好きで、富山県は、意外とこういう人たちが多くというちょっと特殊な地域ではあります。

難しく説明していてもどうしようもないので、まずはこのケーブルテレビで放送していた映像を見てもらいましょう。この「おしえて！獅子舞テレビ」という番組は、2014年5月から2016年4月まで放送していた30分の番組です。すべてをお見せすると発表時間が無くなるので、ケーブルテ

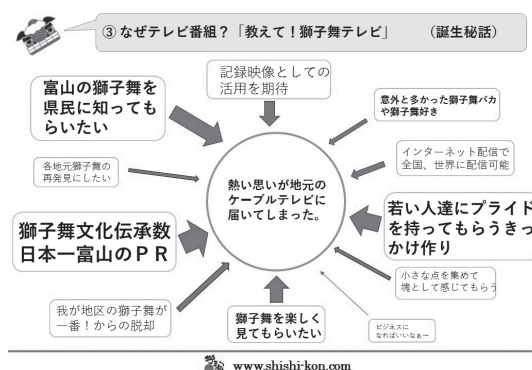


図 3

レビさんをお願いして5分ほどのダイジェスト版を作っていただきました。今回の映像は、2015年7月6日に放送された高岡市下黒田地区の獅子舞の紹介映像です。ちょっとご覧になっていただければ、富山の獅子舞の様子もお分かりいただけるんじゃないかなと思います。

さて、映像を流しながら解説をしていこうと思いますが、これがオープニングです。「全国初！獅子舞エンターテインメント番組！」っていうのを謳っています。二人の芸人さんがメインの司会といえますか、ご案内人という形でやらせていただいていた。記録としてもちゃんと伝えられるように、地域や団体の情報は細かく丁寧に盛り込んでいるつもりではあります。

富山県の獅子舞は、こういうおっきな獅子で、^{むか}百足獅子と言われています。他にもちょっと荒々しいもんですから、あばれ獅子とも言われる人もいます。やっているのはこういう若連中という青年団の人たちです。今は保存会っていう形にどんどん切り替わっているんですけども、こういう若い人たちがどんどん減ってきていて、もう継続が難しくなっている状況です。でも撮影の時には、若い人たちのノリが良いもんですから、何でもやろうというように協力してくれるんです。

番組は、各地区の獅子舞について調べた情報を基に制作していきます。番組で紹介している自分たちの獅子頭がいつどこで作られたのかという情報は、地元の青年団も年配の人たちも多くが知らない



図 4



図 5



図 6



図 7



図 8



図 9

情報でした。この番組の撮影で、初めてそうだったのかと、知ることばかりだという声もよく聞きました。これが「獅子頭の重さチェック」っていうすごく人気の企画でした。獅子頭を測りに載せるだけのコーナーですが、自分の振ってる獅子頭が何キロっていうのは全然分からないままやっていたんで（図7参照）。

これは、「5分でわかる獅子舞講座」というコーナーで、地元の郷土史家の樽谷さんが出てますが、獅子舞にすごく造詣が深い方です。樽谷さんが講師となって、座談会形式で獅子舞の由来や歴史とかを話します（図8参照）。

この「大花のコーナー」も大人気のコーナーでして、獅子舞の余興として出る出し物の中で若い人たちが悪乗りしている様子を載せていったものです。これは序の口ぐらいで、もっと激しいのもあります（図9参照）。

これはダイジェストで、ちょっとはしょって見ていただいたんですが、基本的にひとつの団を、30分番組で2週にわたって紹介していて、実質1時間の紹介番組です。

こんな感じで獅子舞だけで番組を作って、毎週流していました。こんなこと、ほんとにできるのって言われたんですけど、富山県の場合はそれが成立するわけなんです。この番組が終わった後にえらい反響がありまして、「何でやめんがっ」て、結構言われたんですけど、制作の段階でも結構大変な労力が要るもんですから、さすがに2年間で目いっぱいでした。

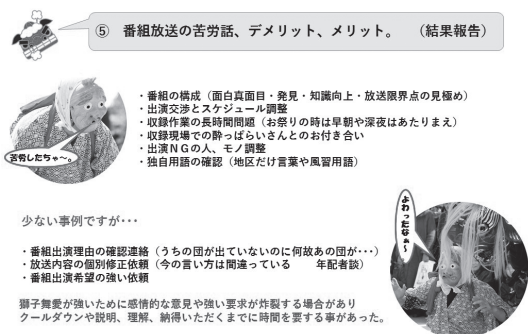
このテレビ番組「おしえて！獅子舞テレビ」は、高岡ケーブルテレビネットワーク株式会社が運営するポータル動画サイト「高岡放送部」で、過去の放送分を見ていただくことができます。是非とも番組を検索してご覧ください。

3. 番組放送の苦労話、デメリット、メリット

この番組を放送してどんなことがあったのかということですが、自分たちでもかなり苦労したところ、デメリット、メリットっていうのは何となく見えてきました。

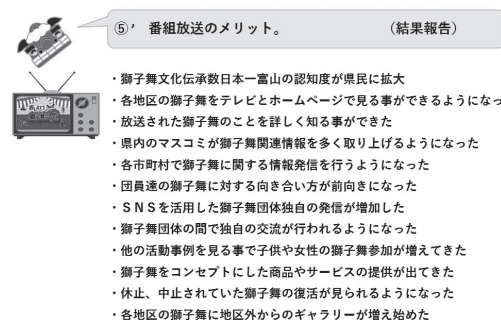
一番こだわったのは番組の作りです。獅子舞の記録としても見てもらわなくてはいけないものから、どうしたら見てもらえるのかなということで工夫、苦労したのが、この「面白真面目」という部分です。

真面目で面白く仕立ててということをおっしゃる方が、よく行政の方の中でもたまにいらっしゃるんです。ですが、たとえば料理と同じで、うんちくを先に長く語られてからどうぞ食べてくださいって言われても、なんとなく素直に味わえないですね。食べた時にエッて驚く料理は、これ美味しい



www.shishi-kon.com

図 10



www.shishi-kon.com

図 11

よね、どうやって作ったのとか、どんな材料なのっていうように、口にした後で興味や質問が出てきます。やっぱり、まずは美味しく感じていただくことが大事です。この獅子舞テレビでも、面白く見てもらってところから始まって、そして、何か新しいことを発見してもらおう、それから知識を向上してもらおうって順番になる。そういう放送限界点の見極めというのがあるんですが、こういったことをほんとに苦労して、番組構成を考えて、ご覧の番組になりました。苦労話は他にもいくつもあるんですが、そちらのほうは図 10 を見ていただければと思っております。

ちょっと少ないデメリットといいますか、獅子舞テレビをやってみて、こういうこともあるんだなと思ったことを紹介します。少ない事例なんですけれども、番組出演理由の確認連絡というのがたまにあったりします。それっていうのは、「うちの団が出てないのに何であの団出すのか」とか。放送後、放送内容の個別修正依頼で「今の言い方違うとっちゃ」っていう話です。大体この辺は、年配者の方が多いんです。どう言いますか、獅子舞に対する熱が非常にある方たちが後で連絡されることがありますね。

あと番組出演希望の強い依頼。何とか会長さんとか、何とか先生といわれる人たちから、ちょっと内々的に出演希望の話が入ってきまして。今でいう付度という言葉に当たるんでしょうか。そういったこともあったようです。

獅子舞愛の強さのあまり、感情的な意見や強い要求がさく裂する場合があるんですけれども、番組関係者のほうではそういった部分のクールダウンとか説明、それから理解、納得いただくまでに、ちょっと時間を要することがありました。この辺についてはちょっとデメリットだったかなということと思います。

ただそれだけに、逆に載せてくれ、出させてくれというご要望も多く頂いていたというのも事実です。この番組が終わってからもうだいぶ長いんですが、すごく良かったことがいくつもあったように思います。

まず、獅子魂が伝えたかった「富山の獅子舞文化伝承数は日本一」なんだということ、これが県民の中にかなり広がって、認知されてきました。それから、それまでは自分たちの獅子舞しか知らないという人たちがほとんどだったんですけど、各地区の獅子舞をテレビとホームページで見ることができるようになったもんですから、他所の獅子舞の情報に触れることができたということも良かったことです。そして、放送された獅子舞のことを詳しく知ることができたということです。それは、他所の獅子舞ということではなくて、自分たちの獅子舞のことをまず知ることができたということで、すごく好評を得ました。

それから、県内のいろいろなマスコミです。新聞社さん、テレビ局、雑誌社、あとフリーペーパーとか。そういったところが、「え、富山の獅子舞って日本一なの」っていう感じで、獅子舞を取り上げていただき、認知度が徐々に徐々に広がっていきました。たとえば新聞社ですと、春と秋の毎週の土日月ぐらいは獅子舞の写真付き記事が出ない日がないという形で、他県からいったら富山県の新聞って何と思われるぐらいに、獅子舞が新聞記事を賑わしています。もちろんテレビなんかでも紹介されております。

また、各市町村の方々も、たとえば観光課であったり、教育委員会であったりとか、そういったところが情報発信をされたり、独自のホームページを作り始めたりされています。富山県さんも、文化庁から補助金を受けて作成した「とやまの文化遺産」というホームページの中で、獅子舞の特集ページを設けて PR されています。

それから、各団員たちの獅子舞に対する向き合い方が変わってきてくれているように思います。昔は嫌々というか、もう獅子舞をする順番が回ってきたのってという話だったんですけど、この頃は、「富山県の獅子舞一番やぞ」という話になってくると、やっぱりこの一番という言葉が富山県人好きなんでしょうね、「おらたちも一番の一翼を担っとんやぞ」っていうような感覚に変わっていききました。やっている人の気持ちが前向きになったのは、すごく良かったなと思います。

あと、テレビの取材が来るぞという話になると、何か若い人たちも「今日、取材来んが」っていうので、そわそわしだしたり。何か知らんけどうちの嫁さんに「なに化粧しとんが」って聞いたたら、「何か取材に来るらしい」って、別にあんたの取材に来るわけじゃないよってことなんですけれど、「映ったらどうするが」ということで一生懸命化粧されていたという話もあったりして、何か関わっている人たちの気持ちが違ってきています。

他にも、SNSを活用した獅子舞団体間の交流や発信が増えました。また、子どもや女性の獅子舞参加はすごく増えました。今までは、獅子舞に参加するのは男性だけの形が多かったんですが、他地区の団体が出る番組を見ることによって、「あそこはたくさん女性入っとるやんか」っていう話になってきて、うちでも女性を入れていこうという、そういう前向きな考え方も増えてきました。それから、獅子舞をコンセプトにした商品やサービスを作ってくれないかというのが、これは私らの仕事として舞い込む時も出てきています。

あと一番うれしいのが、中止、休止されていた獅子舞の復活が増えてきたということです。残念ながら今年は全くやっていないんですけども、アフターコロナに向かって、もう獅子舞の道具を新調して、準備するぞって意気込んでいる団体もありますし、もうこれを機に復活させるぞっていう団体も新聞記事なんかに出ていますので、その辺は大変嬉しいことかなというように思っています。

それから、各地区の獅子舞のお祭りの日に、地区の住人以外のギャラリーが増えてきて、デッカイカメラを持った人たちが、ちょこちょこいろいろなところを撮影に来たり取材に来たりしています。そういう人たちはSNSやネット上で発信していたりもしますね。そういう外の人も来るようになったので、昔の祭りでは、「あんたんとこのお嬢ちゃん大きくなったね」などと言っていた会話が、「あの人誰？」とか「あのカメラ持ったもん、どこから来たのかね」っていうような話にもなってきているので、結構各地区にいろんな人が交流というか、出入りしているような感じです。

4. 富山の獅子舞映像が持つ可能性

今後の活動目標としては、テレビのほうは一昨年からフジテレビ系列の地上波の富山テレビ放送で「獅子魂 TV」を2年間放送いただいたのですが、これはもうコロナで獅子舞祭りが無くなってやめました。ただアフターコロナになったら、やっぱりテレビ番組やYouTubeチャンネルで発信していきたいなと思っています。

これまでは、先ほどダイジェストで見ていただいたような団体毎に紹介する感じのものが多かったんですけども、次からはもう少し細分化して作っていききたいなと。たとえば、獅子メン。ラー

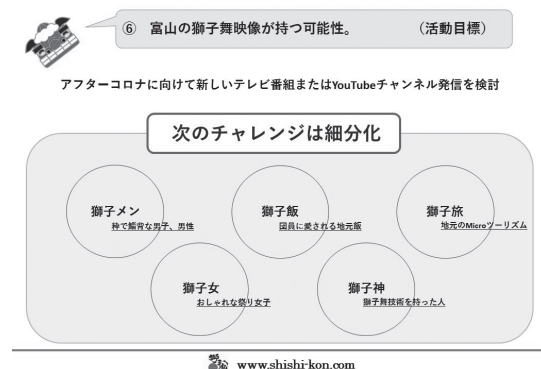


図 12

メンとかではなく、獅子舞好きの男です。粋でいなせな男子とかをフィーチャーしてみたり。ここには獅子女^{ししじょ}って書いてありますが、おしゃれな祭り女子をフィーチャーしたり。

あとこれ、獅子飯^{ししめし}って書いてありますが、団員に愛されている地元飯の紹介。そして、獅子神^{ししがみ}と書いてありますが、これは獅子舞にまつわる技術者です。獅子舞をカッコよく舞う技術だけではなくて、それを支える道具とか、そういったものを作る方々の技術とか。そういう技術をコンセプトにして人をフィーチャーしてみたり。それで、今やってみたいなと思ってチャレンジしているのが獅子旅^{ししたび}です。獅子舞を使って地元のマイクロツーリズムをする。富山県とかっていう広さではなくて、なんとか町とかいう小さい範囲の旅番組を、1,100 という富山に伝わる獅子舞の数ぶん作っていければ面白いのかなと。いずれインバウンドが復活する時には、面白いことにならんかなというように思ったりして、それを映像を通してやっていきたいなというように思っております。

5. おわりに

最後、総括的なことなんですけど、獅子魂が映像に求めていることは、もちろん記録という面が大きいんですが、プラス刺激^{しき}っていうものをすっごく強く求めるようにしています。制作のサイドにもそういったコンセプトを共有してもらっています。映像を見ることで視聴者が刺激を受けて、何かの行動につながっていくことを期待しているんですけども。その新たな行動というのは、それこそ記録であったり、学びであったり、体験であったり、交流であったり。もちろん獅子舞の継承活動にもつながっていく。いろんな人が、さまざまな形で刺激されて、触発されて、新たな動きが生まれてくることを願っています。

映像はほんとに手元のスマートフォンから簡単に見られるようになったので、そういったものをうまく利用して、いろんな方々にやる気とか元気を出してもらえるような、そういった形にしたい。ですから、獅子舞に関する面白真面目な番組を作っていった放送したことが、富山県では結構いい流れになったかなというように思っております。

それから最後にちょっとおまけの情報なんですけれども、この番組を作っていた高岡ケーブルネットワークが2019年9月に表彰されたんです。ケーブルテレビ高岡というよりも県内のケーブルネットワーク8社で作ったのですが、「シシ年だヨ！富山の獅子舞大集合」という特集番組を作って放送しまして、それを番組アワードに応募されたら、何と最高のグランプリ総務大臣賞まで頂きました。それくらい富山県は、獅子舞についてちょっと特殊な興味を持っている県ですので、こういう作品を作って、全国の方にまた知っていただければというように思っております。

ばたばたと話は進めましたけれども、獅子魂プロジェクトは別にテレビ番組だけを作っているわ

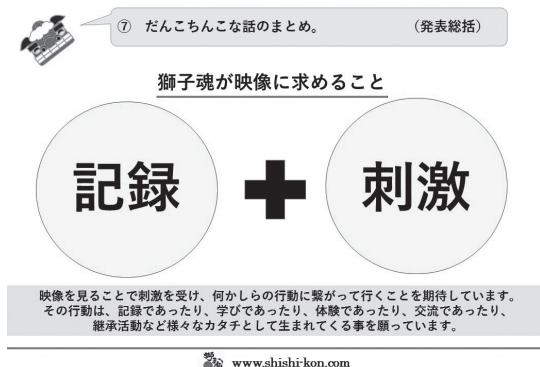


図 13

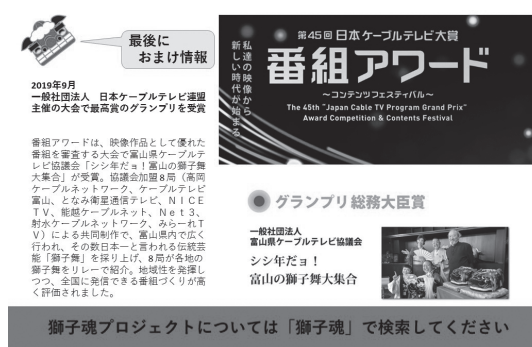


図 14

けではなくて、他にもいろいろ活動はしております。詳しくは「獅子魂」で検索をお願いいたします。ということで、「あいそんな〜い話を聞いてくださりきのどくな」(富山弁：つまらない話を聞いていただきありがとうございました)。

後藤知美：大島さま、ありがとうございました。それでは、まだ時間がございますので、事実確認の質問をお受けします。どなたか、おありになる方は挙手でお示してください。

森本仙介：奈良県の森本です。今後、また違う形でテレビもやっていかれると思うんですけども、番組が終わることになった理由をちょっと教えていただけたらと思います。

大島信彦：やっていた番組は2つありまして、今ご紹介したのはケーブルテレビさん。先ほどどちらと言ったのは、フジテレビ系列の地上波の富山テレビさん。後者は2019年、2020年と2年間やっていたんですが、完全にコロナの問題です。地上波なので、スポンサーが必要なもんですから、そのスポンサーが下りるという話になったのと、祭りが開催されないもんですから映像を撮れないということで、これはもう物理的に無理になってしまい、テレビ局も私どもでもやめましょうという話になりました。

ケーブルテレビさんについてはスポンサーが要らないんです。予算で動いているテレビ局です。全国どこも同じですけども、皆さんの受信契約をもとに予算が決められていて、そこで番組を制作してケーブルテレビを引いている皆さんに届けるという形なもんですから、これは予算の中でやっていました。この番組はもともと2年ぐらいの予算でやっていたということと、あと取材が大変な祭りなもんですから。ちょっと裏事情は後ほどしゃべればいいのかと思っていたんですけども、今ちょっとお時間あるようなので言っておきます。

やっぱり祭りの時に撮影をやりますと、もちろん皆さんご存じのとおり、スケジュールが朝早くから深夜までとかっていうように長時間になってしまいます。それを取材するのは大変な話で、だいたい面白いのは遅い時間のほうが多いもんですから、そういったところを撮るためにずっと取材し続けるのは、なかなか大変だという現場もあります。ただ現場のスタッフも面白がっていたので、継続したかったんですけども、先ほども言いましたように、予算的な部分と編集などの作業の部分です。それらを検討して、2年間でやめましょうという話にはなりました。

後藤：その他、質問ございます方、いらっしゃいますか。それでは大島さま、ありがとうございました。

総 合 討 議

【コメンテータ】森本 仙介（奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存課）

村上 忠喜（京都産業大学）

【パネリスト】川村 清志・関 孝夫・石山 祥子・谷部 真吾・大島 信彦

【コーディネータ】久保田 裕道（東京文化財研究所）

【総 合 司 会】後藤 知美（東京文化財研究所）

後藤知美：それでは、15時15分を回りましたので、第2部の総合討議に入ってまいりたいと思います。総合討議では、最初にコメンテーターのお2人からコメントを頂き、それを踏まえて司会の久保田と登壇者でディスカッションを進めていきます。

それではまず、奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存課の森本仙介様からコメントをいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

コメント1

森本仙介：奈良県文化財保存課の森本です。本日皆さまのさまざまな取り組みを聞かせていただきまして、どれもやはり必要なことだと感じました。特に、川村先生と谷部先生が紹介されていましたが、映像を保存会自身が自分たちで撮って自分たちで発信することが、もう今はできる時代になってきているという状況があります。その点に関しては、私も行政にいますので、やはり行政と現場の保存会の方々との連携みたいなことを、今後考えていかなければいけないなと思いました。

そして、大島さんから、行政ではない民間のテレビの力をご紹介いただきました。正直言いますと、行政ではあそこまでのものは作れないなという作り方です。ですが、記録のほうもきっちりと担保されていることと、映像作成によって団体間の交流が生まれているというのは非常に素晴らしいことですし、女性を入れるとか、映像の影響で新しい動きにもつながってきている。また、地元では当たり前なことも、映像であらためて地元を見直してみると、実は日本一だったとか、新たな発見も生まれている。こうしたキャッチコピーの作成とか、地域のブランディングというのは、正直、行政だけでやっている者が一番苦手とするところです。やはり行政は、記録というのがまず一番の出発点で、そこからのアーカイブとか活用ということを日々仕事でやっているわけです。

また、同じ文化財行政の立場から関さんと石山さんよりご発表がありましたが、実は奈良県の場合はあそこまで組織的にできておりません。上尾市では、20何年もやってこられたことの積み重ねが今あるということなんですけれども、奈良県の場合は、ここ数年というかほぼ今年ぐらいから、アー

カイズや情報発信もやっとなんとかできるようになってきたという現状です。また石山さんのお話にあったような、博物館で記録をしっかりと撮って調査をやるということも、正直言ってできていません。そういう意味で言うと、今日さまざまな立場からのお話を聞きながら、後発の奈良県としてはいろいろと勉強になるなと思いました。

奈良県では、行政のほうで映像記録を撮ってきたのですが、4～5年前までは今まで撮ったものが公開されていませんでした。過去の記録映像も、ここ3年でやっとデジタル化が済んだというところなんです。撮影も、平成9(1997)年には県費での撮影自体がもうなくなっていたので、それを去年からやっと復活できました。20数年ぶりです。ですので、まだまだこれから、公開とかアーカイブ、あるいは普及ということに関しては、もっといろいろ勉強してやっていかなければいけないなというところなんです。

少し奈良県における無形民俗分野の映像活用のお話をさせていただくと、現在、国指定・県指定の52件のうち、7件以外は一応映像を撮れています。ただ、これを全然公開できていなかった。保存会にはVHSを一部配っていたんですけども、一般には公開していなかったの、そのデジタル化をこの3年でやりました。その映像は、図書館で公開していたのですが、今年、それを「奈良県無形文化遺産映像アーカイブ」という形で400本以上の映像をYouTubeに上げて、多くの人に見えていただけるような形にしようとしているところです。

また、ここ10年ぐらいで18件ほどの映像も撮っているんですが、それもやはり先ほどの関さんの話にありました3点セットという形でやっています。その中で、特に最近力を入れているのが、教則ビデオを作ることです。それは映像記録を作る中で、まずは次世代の伝承者の参考になるアーカイブという形で記録を作りたいという思いがあるからです。そのために、実際に使う伝承者の方と話をしながら、どうやったら使いやすいものができるかを考えていて、歌詞を入れたりとか、五線譜を入れたり、リズム譜を入れたりとか工夫してやっています。その中で、伝承が途切れて今はもう撮れないものなどは、古い映像を再編集して作っています。

そうやっていく中で、今年度は10件ほどの教則映像中心の撮影をやっているんですけども、たとえば十津川では5件の風流踊りが復活したり、おそらく来年から、伝承が途絶えていた地域で大踊りを復活していくことになったりと、新たな動きが出ています。あるいは、これも古い音源が残っていてそれをデジタル化していたからできたことですけども、六斎念仏を10人ほどの研究者や学生が中心となって復活させて、地元これを今後どうやって伝承していってもらおうかということを今試みているところです。それは去年から始まった事例なので、この10月にやっと地元で1曲だけ披露できました。ここでもスマホでも見られる、古い音源を使った教則ビデオを作る予定です。

先ほどの十津川の話は、大阪大学が80年代に踊りを再現して撮影した映像が地元に残っていたので、これをデジタル化し見せたところ、地元がちょっとやってみようかという話になりました。そして今、奈良県立大学で今年度からリモートで十津川の盆踊りの練習をやっています。要するに、都会の人に芸能を習ってもらって、地元に来て踊ってもらおうという形です。コロナのことがあるので、今はZoomでのリモート指導ですけども、そろそろちょっと現地へ行って教習ができるかなというところなんです。先ほどの六斎念仏も、そもそも講員は滋賀、京都、大阪、奈良、和歌山だったりします。コロナが広まってからはリモートで練習しているのですが、Zoomでは踊り等を指導することは出来ませんが、合唱のようなセッションとなるとタイムラグが酷いので、SYNCRoomというヤマハが開発したアプリを使って、リモートでセッションをやって練習をしている状態です。

コロナ以前から中断している民俗行事がある中で、特に継承の問題がコロナによって非常に顕在化したと言えると思います。その中で、映像による記録と普及、それから教則ビデオのような教材を今後どうように活用していくかを考えていきたいと思っています。

また、もうやれないから、なくなるから撮ってくれというので、この10年ぐらいで2件ほどの映像記録を撮りました。実際、もう今はやれなくなっているのですが、できるだけいつか再現できる形で記録を残しておくことを目指しました。これは地元からの要請でやったことです。

映像を使ってできることは、現状を記録することだけではなくて、復活ですとか、伝承につながってきます。そのことを常に念頭において記録を撮るようにしています。

そして、コロナ禍で本番が休止している状態では、教則映像撮影のための実演が久々の練習の場になっていることがわかりました。

山添村の獅子舞もそうですが、十津川村の盆踊りでも、この2年間実演がなかったものですから、撮影を今年やることによって、2年空いたけれども今年是可以するというので、練習を始めてくれました。実際、最初はかなり映像を撮るということに抵抗はあったんですけども、いざやってみると非常に積極的で、当初思っていた以上に練習も皆さんされてきています。もっと言うと、撮影のために、これまで踊っていなかった若い人たちも練習してくれるようになったので、来年はたぶんこれでやれるだろうと思っています。そして、先ほどお話したように、戦後ほとんどやっていなかった風流踊りも記録のために研究して5曲復活できたということで、まだこれからどうなるか分かりませんが、実際に続けていくことができると考えています。もちろん、今後は作成した教則映像を具体的にどのように活用していくかが課題だと思います。

それから今年度、奈良県では映像と音源のアーカイブとそれを元にしたデータベースを作っています。また、先ほどお話したYouTubeに「奈良県無形文化遺産映像アーカイブ」として400本以上の映像を上げるという事業もやっています。奈良県では、まだ上尾市みたいな形できちっとしたものではないのですが、まずはこれまで撮ってきた映像を整理して、いつでもそれを利用できるような形にしておくことが、中断とか、復活とか、何かあった時に大事なことだなと思います。

すみません。ちょっと感想みたいになってしまいましたけれども、以上です。ありがとうございました。

後藤：続きまして、京都産業大学の村上忠喜様からコメントを頂きたいと思います。

* * *

コメント 2

村上忠喜：村上です。発表者の皆さま、どうもご苦労さまでございました。非常に面白く聞かせていただきました。

これまでの文化財の仕事というか、広い意味での文化政策は、一般的に文化財の所有者というか、民俗行事を伝承する保存会を対象にした事業をずっと考えてきました。しかしここ近年は、そうした行政と保存会という 1 対 1 の関係性だけでは立ちいかなくなってきているという現実があると思います。

そこで特に享受者ですね。文化財で楽しむ人たちをどこまで対象にしていくのかという話が当然出てくるわけです。今日の大島さんの話とのかかわりで獅子舞を例にしてお話すると、富山県ではない他府県の例ですが、獅子舞の担い手に獅子の袋なしで演じてもらって、それでどのような動作をするのかを記録としてたくさん撮ることが行われました。県内のものをたくさん撮って行って、それを全部伝承者の人たちに渡した。そうすると、獅子舞の団体さんが、「ここはこんな形でやっているのか。これは面白いな。じゃあ、うちも真似しよう」となって盛り上がったことがありました。フォークロアの立場からいくと、それはある種の民俗破壊として受けとられる場合もあったりするわけです。だからその辺が難しく、先ほど森本さんがおっしゃったように、なかなか行政ではたぶん使えないというか、踏み込めない領域なんだと思います。しかしながら、享受者に対してどう開くかということが、たぶん、存続のための重要なポイントになってくると思います。

そういうことをひとまず考えた上で、本日の皆さんのお話は、立場が大きく三つあったのかなと思います。研究者としての立場、文化財の保護行政担当者、それからどう言いますか、テレビ局とかマスコミの方、換言すれば享受者の代弁者とでも言える立場です。

そして、内容的には、文化財的な映像記録と、一方では伝承者、あるいは享受する側からの発信というものを非常に重要視した見方の 2 つがあったと思うんです。これは先ほど森本さんもおっしゃったように、現在すでに映像自体は身近なものになっているわけで、どんどん簡単に発信できるような状況になっています。これをどのように文化財の映像記録とか、伝承を継続させる契機に取り込んでいくのかというのが、やはり大きな問題になります。

趣旨説明のところで少しだけ申し上げましたが、われわれの共同研究は、最もたくさんの民俗の映像記録が溜まっているこの文化財映像の分野から出発しました。

その流れの中に今日のご報告を位置付けるといえるのか、その流れの中でコメントをしたいと思うのですが、これまで東文研さんでやってこられた 3 点セット方式の中でも、いわゆる総合的な記録のところの議論は、とりあえず脇に置かれていました。これは、制作したり維持するのにものすごいお金がかかるというのがひとつの大きい理由ですけれども、いわゆる伝承者にバックするものではなかったんですね。研究者にはバックされたけれども。また、将来のために保存するということが目的であったので、なかなかその議論は進まなかったというのがあります。

もう一つは、現在のようなネット環境を想定していなかったもので、結局は撮ったものをみんな死蔵

しているんですね。データがどこにあるかさえ分からない。どこかに保存はされてはいても、それはもう見れない状態になっていると。そうなってくると、もう議論もへちまもないわけです。その現実を打破しようというところから出発したのが、われわれの共同研究であります。

ところが、実際関さんがやられたように、IT 技術の進歩によってウェブ上に総合的な映像記録を載せることが可能になってきました。あれは驚愕のウェブサイトであって、ハードディスク型の映像記録の発信ですけれども、当然ああいうところまで到達している行政体はほとんどありません。総合的な映像記録の問題を議論する場合、そうした公開のためのプラットフォームをどう作るかというのは非常に大きな問題になるわけです。なおかつ、そこにもうひとつ関わってくるのは、つい近年まで想定もしなかった、双方向の映像のやりとりが可能になったということです。伝承者自らが、自分たちが撮影したものを出してくると。当然、撮影者の立場性を勘案するなど、いろいろ考えるべき点はあるとは思いますが、これからの民俗文化財というか民俗行事の映像記録の議論は、そうしたものを包み込んだものに当然すべきだろうと思うんです。このあたりは、まだ議論の端にもついていないようなところではありますけれども、今回のこの協議会でも、そういった話題がもう表に出てきてるわけですから、これを皆さんで協力して考えていかないといけないと思いを強くした次第です。

ちなみに、冒頭、久保田さんがおっしゃいましたが、国のほうもコロナ禍のこの状況を記録するという形で、たとえば「地域無形文化遺産継承のための新しい生活様式支援事業」が行われています。

京都市では GoPro を伝承者に渡して、地元の人にコロナ禍での自らの行事の状況を撮ってもらい、それを再編集するという実験的な試みをされています。これまでは、完全に研究者なり行政のほうで、民俗行事の調査をして、その調査をした上で文化財的な映像を撮っていったというところがありました。そこから、さあこれどうなるでしょう。どういうふうになるのか僕もちょっと分かりませんが、おそらくいわゆる享受者も入るでしょうね。享受者も入り、伝承者も入って映像が蓄積されていくのでしょうし、それをどう包み込んでいけるのかということが課題になっていくのかなという感想を持ちました。

そうした時に、冒頭に歴博の川村さんがおっしゃった、映像制作の「リテラシー」が、非常に大事な要素になっていくのだらうというように聞いておりました。おそらく、そのリテラシーは、ものすごく多岐にわたるものであるし、どんどんまた変わっていくものだらうと思います。それを、我々は共有していかなければならないのだと思います。

さて、記録に関しまして、たとえば石山さんから映像記録自体が伝承活動の側面的な支援になりうるというご発言がありました。あるいは谷部さんのほうから、今回のテーマにぴったりのコロナ対策の中での映像の使われ方の話が出されました。コロナに対する地域社会の対応というのは、統率が取れなくなって、おそらくばらばらに動いているのだと思います。そういった中で、あんまり言えないこともたくさんあるのだと思いますが、その動きの面をどう記録して、残していくことが、現在の課題となっているのだと感じられました。それがたくさん積み重なってくれば、将来の民俗学の研究なり、伝承をどう守っていくかというところの良い資料になると思います。

民俗行事を伝承する地域社会がコロナ禍でどのような対応をしたのかという点は、今手が付けられたばかりですので、まだ数的にはそれほど集まってないと思いますし、なかなか生々しい話なので、ちょっと冷静に分析するのは難しいところも多々あるかと思います。しかしながら、これはちょっとすぐ公開というわけにはいかないと思いますけれども、コロナ禍の状況を記録して残すという行為自体は進めていくべきという印象を受けました。

雑ばくなコメントになりましたが、また質疑応答の中で、皆さんとこの問題について考えていききたいなというように思います。どうもありがとうございました。

後藤：村上様、ありがとうございました。コロナ対策のため、コメンテーターのお2人には、席の前列にご着席をいただいて、討議にご参加いただけたらと思います。ここで、司会を久保田に変わりまして、実際の討議のほうに入ってまいりたいと思います。よろしくお願いします。

ディスカッション

久保田裕道：久保田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

これから総合討議ということで、皆さまからいただきましたご質問や、そこから出てまいりました問題等について討議を重ねてまいりたいと思います。一応 17 時までを予定しております。たくさん時間があるようなんですけれども、おひとりずつ喋っていただくと、大体何回りかするともうお時間になっているという感じですので、早速入っていきたいと思います。

1. 議論の前提事項の整理

久保田：まず、議論の前提となる事項について、いくつか確認というか、私のほうで取りまとめさせていただきたいと思います。今、コメンテーターのお 2 人にもご指摘いただきましたけれども、今日のお話には、村上さんのおまとめによりますと、文化財的な映像記録をどう作るのかということ、それから、もうひとつは伝承者からの発信がなされるようになったということ。つまり、記録と発信の問題ですよ。このふたつが大きな柱としてあったかと思います。

それから、「3 点セット方式」という言葉がたびたび出てまいりました。これは決して東文研で言い始めたわけではなくて、どちらかというと関西の方たちが言い出したもので、ルーツがどこにあるのか分かりませんが、今は文化庁の映像記録作成でも、その 3 点の映像を作るようにというのが主流になっているかと思います。

その 3 点が何に当たるのかというのは、これも担当する行政とか、撮る方、作る方によって違うとは思いますが、おおむね中ぐらいのバージョンと、それよりかなり短いバージョンと、それからもっと詳しいバージョンの 3 本の映像を作る。そのようなそれぞれ用途が異なる映像が作られています。

それから、この言葉も時々出てまいりましたが、「ハードディスク型」というもの。これもなかなか一般の方には通じにくいと思うのですが、結局、以前の映像制作では、フィルムですとか、ビデオ、カセットですとか、なんらかの記録媒体 1 本にまとめざるを得なかった。時間軸に沿って一筆書き的に作品を作らざるを得なかったわけですが、これがハードディスクというようなものが出てきたことによって、行事の全体を同時並行的に提示することが出来るようになってきました。たとえば、この行事をやっている時に、裏ではこういう行事をやってますよという具合に。たとえば上尾市さんがやってるような全体を示す画面がトップにあれば、そこから飛んで「じゃあ、こっちを見よう」とか、「このときには裏ではこういう行事やってるんだ」とかいう見方もできますし、あるいは「この詳しいバージョンは、じゃあこっちを見ればいいんだ」というように、選りながら見ることができる。これを仮にハードディスク方式と言っておりますけれども、今のデジタル化によってそういう選択肢が広がってきたんだなということだと思います。そのあたり、ちょっと用語の確認をさせていただきました。

そして、そういった文化財的な記録に対して、新しい技術もたくさん出てきております。本日話題に上がりました撮影の面、それから編集の面、見せ方の面でも新しい方法論が入ってきているんだと思います。最近では特に、それは発信のほうで活用されているのかなと思います。そのあたりも、これからのお話で触れられればと思います。

そして、最初に川村さんから言っていた「祭終い」「村終い」という衝撃的な状況ですよ。

この協議会でも以前、「いま危機にある無形文化遺産：無形民俗文化財の休止・廃絶・継承をめぐる」というテーマで開催したこともございますけれども、どこも存亡の危機にあるような状態で、そういった中で映像がどういう役割を果たしていけるのかということ、これも究極のテーマになるのだと思っております。

2. 映像記録制作の実際

久保田：大前提となるお話を申し上げましたけれども、まずはご質問に応答していきたいと思えます。例年そうなんですけれども、ちょっとご質問された方にとっては趣旨が違うことになってるかもしれませんが、おおよその感じでまとめましたので、それをご登壇の皆さまにおうかがいしていきたいと思っております。

まずは現実的な問題から入っていききたいと思うのですが、事業計画の話ですね。たとえば、関さんに対して、「ポータルサイトとして仕上がってるように見受けませんが、当初から想定をされて事業を進められてきたのでしょうか」という質問。また、「映像を作るに当たってどういう準備が必要でしょうか」とか、「年間何本作るのでしょうか」といったような質問が寄せられています。

それから、これは大島さんに対してなんですけども、「獅子魂プロジェクトをやっておられる組織と役割分担はどういうようになっているのでしょうか」という質問がございました。そうした人間的な問題ですね。

そのあたりについて、今回の登壇者の皆さまは、映像を作って公開というお話をされてきたと思いますので、これはもう全員にお聞きしてみようと思います。それでは、関さんからお願い致します。

関孝夫：正直申し上げて、長いスパンで映像記録をやっておりますので、それこそフィルムの時代から VTR になってからとか、いろいろありました。それと、計画的にやっているのかということですけど、ご承知のとおり、平成 1 桁の時代から初めていますから、まさかこういう形になるとは思っていませんでした。最初は、とにかく 50 分なり 40 分ぐらいの記録映画を作るところから始まっています。その当初は、たまたま芸能が、芸態が短いもので、60 分とか 50 分の映画の中で全部収まっちゃったんですね。ですから、意外とコンパクトにできているんです。後で藤波の餅つき踊りのサイトを見ていただきたいのですが、記録編は記録編で今回作りましたけれども、本編でも実はそれぞれ入っているんですね。

というわけで、初めの頃はほんとに映画をああいのような形で、1 本の記録映画を作ってきていました。それが藤波の獅子舞だとか、万作踊りだとか、そういう芸能の記録を作る段階になって、全部を映画の中に入れられないので別に撮りましょうと。それはビデオで良いんじゃないかっていうことで、初めはビデオで撮って。しまいにはデジタルビデオになりましたので、今見ていただいたものなどは、デジタルビデオで撮ってるので、非常に画質も良く見ていただいています。ということで、何か最初から計画して作ってきたのではなく、次第に形が整ってきたというのが正直なところです。

最後のほうになってきますと、ほんとに、じゃあこれもやってみよう、あれもやってみようということで、お祭りの場合は映像による総合調査報告書的なものを作りました。また、時間的に非常に短い行事については、地域に伝承されている同種の事例を一括してざっと映像記録を撮っちゃって、各地区の個別編を作成しながら、行事全体を説明する本編の部分部分に使うというような計画をもって作っていることは確かです。

ですから、だんだん映像の技術が進歩していくに従って、あるいは、撮影方法も含めて変わってい

くに従って形を整えていき、最終的には平成 29（2017）年に、ああいう今見ていただいているようなポータルサイトの形。ウェブサイトの形を作ったという感じです。

ちなみに、一番最初の時は、埼玉県の県費補助で製作事業をやりました。その後、5 件ぐらいは市の単独事業でやっていたのですが、1 回途切れるんですね。それでその時、地域創造の助成金をいただくことをやりまして、それを 4 回やりました。それでも当時 70% ぐらいの助成だったと思います。その後、国の 100% 補助で実行委員会を立ち上げて実施するというようにしました。

したがって、一番最初は県費補助事業でしたが、2 番目から 6 番目に作ったフィルム作品については市単独事業だったんですけど、それ以外についてはかなり助成金をいただいてやっているような状況がございます。

久保田：ありがとうございます。続きまして石山さん、お願いいたします。

石山祥子：鳥根県の場合は、民俗分野の基礎研究事業の中で記録撮影をしております。ただ、県費で全部撮影・編集しておりますので、この撮影事業が始まったのは 1993 年なんですけれども、始まった当初は、撮りやすいものから撮っていくというような方針でした。そして今、国・県指定に関してはあと 10 件ぐらいの撮影が残っているのですが、これまでの予算の範囲ではちょっと収まらないようなものが残っています。鳥根県としては、それをどのように撮っていくかが課題です。

久保田：ありがとうございます。次に谷部さんは、ちょっと性格が違うというか、直接行政が作るということではないと思うんですけれども、たとえば今回ご報告してくださいました掛川の例では、どのように映像が作成されていったのでしょうか。それから、別の方からの質問で、キーパーソンとして A さんが出てまいりましたが、A さんは、かなりスキルを持った方ではないかというご質問もありました。そのあたりも含めてお願いいたします。

谷部真吾：先ほどご覧いただいた動画は、全部関係者の方たちが作成しておりまして、費用も全部手弁当です。組織とか人員配置に関しては、今回の検証実験動画において、カメラは正確に言うと 2 台ありました。1 台は先ほども発表の中で言いましたが、川原町の練係の人が専属として撮影を担当し、A さん自身もまた、自分の持っているカメラだったか、iPhone だったか忘れましたが、それで撮り、それらをつなぎ合わせたのが今回の動画だそうです。

今回ご紹介した動画は検証実験に関するものでしたが、2021 年 4 月のお祭り当日にも、祢里の曳き回しはやらなかったのですが、実は祢里の展示をやっており、その際にも展示した祢里の様子をライブ配信しておりました。この時も、お金は全部自分たちで工面していました。人員も取締役会の中から撮影メンバーを厳選し、4K カメラと、Wi-Fi 用のモデムだったかルーターだったかを借りてきて撮影したといえます。したがって、全て手弁当でやられていたわけです。

話は前後しますが、検証実験動画の編集は A さんお 1 人でされたそうなのですが、A さんは映像関係のお仕事をされているわけではなく、趣味でやられているそうです。お祭り当日のライブ配信も全部映像好きの素人がやったとのこと。ひとつ面白いエピソードがありまして、ライブ配信をすると今何人がライブ映像を見ているのか分かるらしいのです。下手な人がカメラ担当になると、500 人くらい一気に視聴者が減るそうです。そんなことも楽しみながら撮影していたようです。

久保田：ありがとうございます。大島さんは、お話の中にも出てまいりましたが、広告代理店をやっておられて、テレビとのつながりの中で映像を制作されてきておりました。そのあたりのご苦労とか。それから人員配置ですよね。先ほども朝から夜まで大変だということでしたけれども、どれくらいのスタッフで作っておられるのかとか、そのあたりはいかがでしょうか。

大島信彦：私ども、富山っていうよりも、番組は高岡のケーブルテレビでの仕事になりますので、高岡市中心の話になってしまうんですが、今お見せした番組の部分でお話ししますと、あの番組1つを作るのに、大体プロデューサー1名、ディレクター1名、それから見ていただいたとおり司会ですね、MCが2名、それからカメラマンが2名、それから編集に2名、ナレーションに1名というような人数になります。ただし、ディレクターとカメラマンと編集は同じ人間が兼任するという形になりますので、大体5人から6人の体制であの番組1つが出来上がっていくという形になります。

テレビというものにつきましては、各都道府県によって人口の違いなどいろいろとあるものですから、どうしても電波料とか、制作費が各県によって異なってきます。そのために、各県によってかなり違って来るはずなんです。

それが前提にあるわけですが、獅子舞テレビの番組を動かすためにケーブルさんで予算を年間どれくらい見てたのかなという、たぶんひと月に最低これだけ必要ですよっていう予算立てをするわけですね。それにプラスしてどれだけ追加の予算が必要なのかとか、あとは、スポンサーが付くとさらにこれだけ予算が膨らませますよということが出来るわけです。それを考えますと、たぶん、ひと月30から50万円っていうのが目安になってきていたんじゃないかなと思います。それを12掛けることにしていただければ、年間の予算というのが大体大枠決まってくると思いますし、放送内容によっては、若干減ったり増えたりっていう月もあったりもしますが、大体そんなような感覚の金額です。

久保田：ありがとうございます。それでは川村さん。先ほど見せていただいた中には、現地の方に自撮りをしていただいたなんてこともありました。あの仕組みというか、どういう体制で作られたのかとかいうのも、よろしければ教えていただきたいと思います。

川村清志：先ほどの発表では、本人たちが撮ってくれた映像を少し紹介したんですが、全体では20数分ぐらいの映像作品です。

毎年、4月の初旬に行っていた春祭りでは、10年ぐらい前まで神輿行列を出して村を回っていたんです。しかし、2007年以後、ほんとに宮での直会だけになっちゃったという経緯があるんですね。その年の3月の終わりに能登沖地震があって、鳥居が壊れたりお宮が破損したりとかあったんですが、それ以前から集落に人が少なくなって、都会から誰も帰ってこないというので、行列をやめることは決まっていたんです。その後、10年ぐらい祭りが縮小された状態から、映像に出てきた2人を中心に、Uターンで帰ってきた青年会員たちが、春祭りにもう一度、神輿を出したいという声をあげはじめました。3年ぐらいかけて地道に自分たちができることをやっていきました。毎年、祭り当日に大太鼓を出したり、宵祭りの夜に小さなキリコを引っ張ったりして有志を増やしていきました。それでやっと3年目に、神輿行列まで戻せたという過程を紹介したんです。

ただし、祭りの復活過程の映像があって、そこにプラスして2020年を描くときに、無事復活して良かったよねという話には全然なっていない現実を加えようと思いました。コロナによって祭り自体が完全に中止に追い込まれたり、若者たちも誰も帰ってこれない状況が現にあるわけです。そこを踏まえて、2人に現状について語ってくれと依頼したところ、それぞれiPhone使って収録して送ってくれました。それを私のほうで映像を編集して、1つのものにまとめたという経緯があります。

あれ以外にも、春祭りが3年間かけてどう変わってきたのかを、座談形式で映像を進行していく映像をコロナの直前に撮ったり、あるいは本人たちがそれを見て、さらにここは言っておきたいというところを補足した映像も含めて編集されています。そういう作品を作りました。だから、予算についてあえて言えば、私の出張旅費のみです。

久保田：ありがとうございます。

3. 映像制作における伝承者との関わりのあり方

久保田：今のお話で、伝承者にも撮っていただくという試みをご紹介いただきましたが、映像制作者と伝承者との関わりという問題が出てきました。そういったご質問も来ておりますので、次はこちらをいってみたいと思います。

まず、「祭りの撮影・映像記録を行う上で、各祭りの運営団体や事務局の方々とやりとりする機会があると思います。その際に最も注意する点、あるいは苦労した点、大切なことはなんですか」というようなご質問です。

それから、これは谷部さんに対してのご質問になるんですけども、ネットニュースの批判のことが挙げられておりました。その「ネットニュースの批判が祭りの中止の要因になった可能性はあるんでしょうか」。それからまた別の方からの質問で、「映像・動画を公開した時に、他の祭り関係者の意見はどのようなものだったでしょうか。賛否両論あったのではないのでしょうか」。といったご質問をいただいております。

この問題も結局、映像作成後にそれを伝承者に見せた時の反応ということがあるかと思いますが、それから作る上での人間関係の問題も大きいかと思います。そのあたりも一通りお聞きできればと思いますので、まず、また関さんからよろしいですか。

関：実はここにいるメンバーで、いわゆる基礎自治体の人間って私だけなんですよね。たとえば上尾市だとか、市町村の場合っていうのは、もうほんとに地域の保存会の方だとか皆さんと、普段からいろいろやりとりがありますし、もう毎年お祭りも行ってるし、そういう意味では関係づくりはできています。

それとあともう1つはリサーチ。とにかく映像記録作るのに何が必要かって言ったらリサーチです。リサーチしないでいきなり撮ると言っても、それは撮れません。それについては、その前に民俗調査をしっかり全市的にやってあって、さらに市史編さん事業で民俗編を作る過程の中で、その辺もきちりやってあります。

そういうことを前提に、まず地域にはしっかり入ってるということがまず一番。そういうわけで、関係者との関係づくりもそれなりにできている中で、私が今度は、スタッフを連れてくわけですね。そうすると、ほんとに受注している業者さんも、そういう現場に入ることに非常にいろいろお考えがありますので、そういう意味では、大変フレンドリーにいろいろ話をしてもらったり、聞きたいこともたくさんあるみたいで。そういう取り持ちはずっとしていました。

あともう1つは、地元はやっぱりカメラが入るというのは、それも動画のカメラが入るというのは、すごくウエルカムなんです。映像記録を実施すると伝承自体が盛り上がるぐらいカンフル剤にもなります。そういう意味では、地元は、ほんとにウエルカムでした。

その後も、こちらのほうで作った映像を、被撮影者の方々が喜んで使っているといったこともあります。たとえば、お祭りに関係している神社が、駅からハイキングの立ち寄りスポットになった時に、神社で映像を流してるとか。あと当然、芸能の場合、囃子や所作などの芸態を映像で見ながら、こうなんだとかああなんだって語り合うのを日常的にしているという話も聞いています。また最近では、小学生の副読本にQRコードを入れて、「あげお文化遺産ガイド」のページへすぐ飛べるようにもしたりしていますので、結構活用もされている状況はあるかなと思っています。

久保田：ありがとうございます。次に島根県の場合ですが、先ほどの石山さんの発表の中でも、伝承者の方からこういった映像が欲しいんだというお話もあったということで、かなり関係性が築けているのかなという気はしたんですけども、いかがでしょうか。

石山：関係性の作り方というか、撮影までの地元の方とのやりとりについては、今、関さんがおっしゃったことと同じですけども、県全域の伝承者の方と定期的に連絡を取ることは難しいのが実情です。

梶の屋神楽さんについては、先ほど時間がなくてお話できなかったところがありますので、少し補足させてください。保持者認定に行った時に、講評の際の雑談がひとつのきっかけになって撮影に至ったと先ほど話しましたが、そういう機会は、普段なかなかありません。保持者認定の審査は、地元のお祭りでの奉納神楽にあわせて実施したんですが、実際には地元神社の例祭には最近、神楽が呼ばれなくなっていて、神楽を公開する場が少なく、若手が練習する機会がないという話をされていて、大変驚いたことを覚えています。このような実情をうかがっていたことも、今回の記録撮影にいたるきっかけのひとつになりました。

梶の屋神楽の撮影は、3年に分けて撮影する計画です。会員があまりいないので、1年で未収録の演目全てを稽古し、収録するのは難しいため、3回、3年に分けて撮ることになりました。

伝承の機会が減っている全ての団体に対して、同様の取り組みをするのは難しいんですが、すでに一度撮影している対象でも、再撮影することが次の世代への伝承機会になるようならば、事業として意義があるのではないかと考えています。今回はその最初の試みと位置づけて撮影しました。伝承団体側の現状やニーズを知るためにも、保持者認定など様々な機会を通じて、各保存団体のお話をうかがうことが、第一に必要なと思っていますところですよ。

久保田：ありがとうございます。続いて、谷部さんにおうかがいしたいと思います。先ほど寄せられた質問を紹介しましたように、映像の作成者以外の祭りの関係者・当事者たちは、動画公開に対してどのように考えていたのでしょうか。特に、こういった大規模な都市型の祭礼では、関わる人もたくさんいたんじゃないでしょうか。それから、結果的に祭りが中止になってしまったんだけど、その原因というのにネットニュースなんかも関わっているのだろうか。そのあたりの人間関係の問題はいかがでしょうか。

谷部：ネットニュースの批判が祭りの中止に影響を与えたのかどうかという点から、先にお答えしますと、当初、私もそのように理解していました。しかし、2021年の曳き回しを中止することが決定されたのは、2021年2月4日の祭典総代会でしたが、この祭典総代会に臨席した方からお話をうかがったところ、席上、ネットニュースのことは全然取り上げられなかったとのこと。「祭りを実施してコロナ感染者が出たら、どうするのか」ということを中心に議論がなされ、最終的に曳き回しを中止するという結論にいたったそうです。

続きまして、動画を公開したことによる賛否に関してですが、この点についてAさんによりますと、好意的な意見が多かったとのことですよ。「頑張れ」といった意見が多かったようですよ。ただ、これは難しいですけども、動画公開したことによるコメントとしては、確かに賛成意見が多かったのですが、そもそもこの検証実験を実施するにあたり関係者に説明をした際、最終的に取締会が監修することになりましたが、取締会の中では当初、実施に後ろ向きな意見もあったといわれています。どんな意見であったのか、詳しくは聞いていません。ここからはあくまで私の推測ですが、大勢が集まって検証実験を行うことに対して、批判的な意見があったのではないかと思います。繰り返しになり

ますが、これはあくまで私の推測です。

久保田：ありがとうございます。それでは、大島さんはテレビとしての関わりでもありますし、あるいは獅子魂という活動を通じて、伝承者の方々とのつながりについてはいかがでしょう。

大島：つながりというほどのものを構築しようとはあまり思っていないくて、獅子魂っていうサイトにステージを作ったものですから、伝承者のみなさんはそこに上がって楽しんでくださいというスタンスをずっと続けてます。

ただ、番組という部分において気を付けていたことというのは、まず先ほどもちょっと発表の時に言いましたように、番組の作りです。映像として届けるものですから、できるだけ楽しんで、面白く、それと元気が出るようにというのを、やっぱりどうしても私どもコンセプトに持ってるもんですから、そういうような番組を作るための定型化したもの、番組の流れというか、そういう定型した演出が必要です。他の回の放送を見ていると、自分たちもああいうふうになればいいんだねっていう形で、次の出演する団体なんかも分かっていたるもんですから、できるだけシンプルに分かりやすく作っています。お手本なのは「ちゃんちゃかちゃかちゃか、ちゃんちゃん」の笑点ですね。あの番組は、毎回同じ流れなんですけれども、それでも楽しい、ファンが多い。そういったものを目指すために、番組作りのほうでできるだけ苦勞させていただいて、それを表現した時に楽しく届けられるということですかね。

あとはもう、いざ撮影、編集になったときには、そのフォーマットの中で悪ふざけしてくださいよということをお願いすると、獅子舞団体の中には、特に若い人たちは、先ほど見ていただいたような表現をしてくれます。それをテレビで流すと、団体ごとに面白い演出が始まって、もっと面白いものが勝手に作られていくというのが、番組を放送・編集しているの流れだったかなと思います。

久保田：ありがとうございます。川村さんは、先ほどの話につながるように思うのですが、研究者として現地に入るという人間関係もありますし、また現地では世代間とか、いろいろな問題にも関わられているのではないかと思います。いかがでしょう。

川村：そうですね。映像以前の問題として、先ほどのお祭りが行われる能登には、学部のころから入らせてもらって、祭りの期間には青年会の役員もやらされたりしました。今の青年会員の中心メンバーは、小学生ぐらいから知っている子たちなんです。私自身も思い入れもあるし、付き合いも長いので、彼らの日常、プライベート関係なく、私がカメラを持っていて嫌と言われることはほぼ100%ないかと。だからもはや彼らの日常を撮らせてもらっているという側面はひとつあります。

もちろん、そういう場所ばかりではなく、博物館の展示なんかで種々のフッテージをよく作っています。さきほど関さんがリサーチありきですとおっしゃったのは全くそのとおりなんだけれども、リサーチゼロで撮ったこともあります。2～3年前かな、愛媛県の宇和島の吉田という町のお祭りの映像をまとめたことがあるんです。その時はほんとに、祭りについての報告書だけを見て現地に行きました。それは祭りの記録映像というよりは、そこが水害に見舞われて、水害の後に祭りをやめようという意見が強かった中で、神輿をかつぐ若衆たちが、やっぱり祭りを復興のシンボルにしたいと意気込んでいるという話をうかがい、急ぎょ現地に行って、撮影をしてきました。最終的に、実際の展示では9分ぐらいの映像にまとめたんですが、多くの不備はありました。現場に行っても、撮影のポジショニング自体分かっていないんですよ。撮っていてしまったなとか、こう来たかとかいう場面をいっぱい経験しました。それでも祭りをずっと撮影したり、芸能を撮影してくると、ある程度の起承転結で映像をまとめることが、10分程度の長さならできるんだということも分かったように思うん

ですね。だから逆にこういう作業に慣れてしまうと、ルーティーン化して良くないと思うんです。先ほど映像のリテラシーと言いましたが、それは撮って、できるだけ分かりやすくというか、全体の流れが見えるように表現していく、記録していくっていうことは、一定のスキルとして学べるのではないかと思います。

その時には、もちろん現地とのコミュニケーション、すごく大事なんですけれども、画として残す、行事の記録としてある程度まとめるやり方はあるんだろうなと思うんです。その辺りの濃淡、実際にどのくらいコミットして、それを地元と折衝し、交渉しながら作っていくのかというのが大事になるだろうと。

今日の3点セット、私から逆に久保田先生や関先生にお聞きしたいなと思うのは、今のところ3点セットは地域によって、あるいは、残す側の意図によって微妙にずれるという話です。平たく言うと短い、中くらいの、すごく長い生のデータに近いのというような形に収斂するのかなと思うんです。

もう一つ、関さんが形態としての作品の中で、これは中編記録映像の中での心得として、四つぐらい留意点を書かれていました。ですがあえて、たとえば関さんが省かれた「人にフォーカスする描き方」というのも、私はダメなわけではないだろうと思います。特に芸能などになってくると、これは大島さんが「獅子^{ししがみ}神」とおっしゃっていたけれども、名人っていうか、見ててすごい踊りや舞というのはあると思うんですよね。その人にほれ込むような舞とか芸っていうのは、それが出会った時にはやっぱり残していくべきなんじゃないかなと私なんかは思います。

そういう場合には、より深く伝承してる人たちとコミットしたり、彼らのこだわりが生まれる背景として、ライフヒストリーも含めて残していくやり方というのも、3点セットプラスアルファだけでも、ハードディスク型として、タグ付けしてコンテンツをどんどん広げていけるようなものが仮に作れるとしたならば、私なんかは作っていききたいなと思います。

久保田：ありがとうございます。関さん、補足があるようですのでどうぞ。

関：実は、今回はお話できなかったのですが、上尾市の万作踊りの芸態保存編を作った時に、普通だったら実演を1回やればそれでおしまいかなと思うんですけれども、実際にはいろんな要素がありました。たとえば、もともと万作踊りは男性だけが担い手でしたが、女性も踊るようになると、女性の踊りになってくるんですよ。だから、男性とは別に女性の万作踊りを1つ別パターンとして撮る。あとは、ベテランですよね。ベテランの人たちだけの踊りを撮るっていうのも実際やりました。

それは、意図をもってやったことで、当然ここで意図が出てくるわけです、結局。客観性と言っても、映像資料というのは、映画を作る時にもそういうようになるし。もっと言うと、記録編の中でそういう作業はやっぱりやってくべきだと思うし、それはほんとにケース・バイ・ケースになってくるかと思います。撮影対象が大きくなれば大きくなるほど大変になってしまうんですけれども、さっき見ていただいた獅子舞などもそういうことは言えることで、何を撮るかという意図は、記録編を作る上でしっかり考えていかなければいけないことかなと思っています。

久保田：確かに、私も芸態の記録というものが重要だなと思っているんですけれども、中でも名人芸ですよね。必ず民俗芸能を見に行くと、大体この人はすごっていう伝承者がいて。ただ、そういう人が今どんどん少なくなってきたり、もう踊れなくなったり、亡くなってしまった。でも、そういう名人の技を記録するということも必要なんではないかなと思います。でも、それではどういう人が名人なのかというのは、なかなか一見さんは分からないんですよね。地元の人に聞きながら、そういうこ

とも明らかにしないといけない。たとえば、芸を一度記録して、さらにその映像を見ながら地元の人に語ってもらうとか、いろんな技法が必要になってくるのではないかなというようにも思いました。

それから、3点セット。究極的には時間の短い、中ぐらい、長いだと思うんですけども、やっぱり本来の目的からいうと趣旨が違うものですね。ですから、同じように撮ったものを短くしたり長くしたりすれば済むという話ではなくて、そもそもが撮る方法が違うとか、撮る視点が違うという部分もあるんじゃないかなと思います。それが何かということも考えなくてははいけません。

先ほど YouTube の話が出ておりましたけども、今朝、たまたま NHK のニュースを見ていたら、小説を 15 秒で紹介する TikTok 動画があって、そこで紹介されると、過去の本であってもばか売れをしているということが報道されていました。15 秒でその本の魅力を語るというのは難しいですが、これを何か民俗文化財にも応用できないかなと。そういった方向性も、もしかしたら必要になってくるのかもしれません。YouTube ですと、自分で探さないと見れないですが、TikTok はもうザッピングのように、次々切り替えて見ていく中でそういうのが出てきたらインパクトがあるんじゃないかなという気もするんですけども、どうでしょうか。

4. 撮りためた映像記録の保存・公開について

久保田：続いて、あと、大きなまとまりとして二つ質問があるんですけど、一つは保存に関するご質問で、どなたかぜひお答えいただける方に挙手してお答えいただきたいなと思っております。

たとえば、権利関係の書類、あるいは未編集の映像の保存。「たくさん撮ってそれを編集していくと思うんですけども、その未編集のものについて。将来的な映像作品のさらなる活用に向けて、こうした未編集映像を、公文書センターなどにアーカイブとして移管するといったことはあるんでしょうか」。それから記録の保存について、「作成した記録はどこに保存されるのでしょうか。資料館とか、そういったセンターがある、そういう所に寄託というか、お預けして保存するということをやっているんじゃないでしょうか」。

それから、もっと現実的な問題として、「DVD で作った場合、コピーガードとかは必要ですか」ということ。そして、「どういう方法でやればデータの保存の信頼度が高いでしょうか」。これらにつきまして、どなたでも。では、関さんまずお願いいたします。

関：まずは私から。古いもんですから、16 ミリから作っているんですね。16 ミリ映像で作っている頃は、何とカットネガといって、使わなかったネガまで実は納品していただいています。ただ、そのカットネガをその後活用したかという、活用しませんでした。実際、その後にまた作品を作ったり、記録編を作りましたが、やはりカットネガを全部見直して、要るか要らないかを確認するよりも、それほど時代がまだ経っていないので、今撮っちゃったほうが早いということがありました。なので、そのカットネガを保存してはいたんですけども、活用はできなかったということがあります。

ですが、その他の使わなかったものも含めて、素材は全部提出していただくというのが基本です。今、コピーができてしまいますので、とにかく素材 VTR は全部いただいている。その保存は、残念ながら博物館のような保存施設がないので、事務所などで保管している状況です。

16 ミリに関しては、ネガは製作会社が保存していますが、これは最近、国立映画アーカイブに引き取っていただくような方向で考えています。また、民族文化映像研究所は、持っていたネガを保存がもうできないからということで、そこへ移管をしたような経緯もございます。

これはもうほんとに古いフィルム時代の話で、新しいものについては、一応ひと通りのものは納品

いただいて、平成 19（2007）年に改めて紹介編を作ったり、あるいは記録編を作り直したりするときに活用はさせていただいています。そういうことができるので、今のデジタルの映像はいただいていたほうが、いろいろな意味で後々活用が可能ということになってくるかと思います。

久保田：ありがとうございます。他の方でうちではこうやってるとか、こうやりたいとかいうお話がありましたら、どうでしょうか。コメンテーターでも構いませんし。あるいはフロアの方でも。では、森本さん、お願いいたします。

森本：奈良県も U マチックの時代、昭和 53（1978）年ぐらいから撮っていますが、それも契約の段階で、材料・素材は全部、あるいは権利も譲渡してもらっています。ただそれも、関さんがおっしゃられるように、うちは博物館ではないので収蔵庫などはありませんから、ずっと倉庫に眠ったような状態になっていました。それを、先ほども言いましたが、3 年かけてデジタル化をして、簡単な整理をしてハードディスクに入れています。当然、デジタル時代のものは全部素材ももらってハードディスクに入れている。ただ、ハードディスクは、一応複数台作っていますけれども、基本的には本庁にあります。それは、たぶん音源を入れると 6,000 点以上になるんですけれども、それを今年度アーカイブ化をしています。

また、権利の問題は、京都市が今そういうことをやってらっしゃるので、そちらにお聞きすると良いかと思います。やはり最終的には公開すべきだと思いますので、奈良県も権利関係の法律的なことを整理し始めているところです。

先ほどちょっと話題に出しましたが、奈良県の場合、記録編の作り方、考え方が少し独自かもしれないです。奈良県の記録編は、素材なども含めたものになります。それらの素材を簡単に整理して、データベースまでお金があればしますけれども、まずは整理をしていただいているというのが現状です。少し前に 5,000 ～ 6,000 点と言いましたが、実はその中には奈良県と県立民俗博物館、奈良女子大、それから、県内の市町村、そういうところの映像や音源も入っています。それらをデジタル化して、整理をしているところです。

今はデータベースを作っているんですけれども、今後の公開とかに関しては、これからの課題になっています。京都市も今、そういうことをやってますよね。

久保田：じゃあ、京都市の福持さんよろしいですか。

福持昌之：京都市文化財保護課の福持です。令和 3（2021）年度は、文化庁の令和 2 年度第 3 次補正「地域無形文化遺産継承のための新しい生活様式支援事業」の採択を受け、既存映像を閲覧できるウェブサイトの準備をしています。昭和 40 年代以降京都市が製作してきた映像や、製作に関わった映像、寄贈を受けた映像について、当課では当初は 16 ミリフィルム、後に VHS ビデオ、現在は DVD で一般貸出をしています。それらを対象に権利処理とデータ整理の費用を全額補助していただいています。

使用する映像は、16 ミリから改めてテレシネすることは費用的に諦めましたが、VHS や DVD にする前のテレシネ原版、森本さんもおっしゃっていた業務用テープ、例えば 1 インチオープンリール、U マチック、デジタル D2、DVCAM などから MP4 に変換する作業をしています。これにより、解像度はあまり変わりませんが、色が格段に良くなりました。また、本編の前後には、タイトル、製作者、製作年代、分数などを表示するなどし、YouTube を介してウェブ上へアップするまでの作業を業者に委託しています。

権利処理については、京都市製作の映像は映像制作会社、寄贈作品等は製作者と映像制作会社に対

して、ウェブ公開について確認書を取り交わしています。著作財産権の移動はしていません。また、著作者人格権は移動できない権利ですし、それを尊重する方針で対応しています。したがって、それら権利者にお金を払うことは想定しておらず、ウェブ公開事業の公益性を理解いただいた上で承諾を得る手続きを進めており、これらの実務作業は映像とは別の業者に委託しています。

この権利処理の方法は手探りでした。着手時には弁護士のレクチャーも受けましたし、先行事例の調査もしました。特に「にいがた地域映像アーカイブ」や「川崎市民ミュージアム」は大変参考になりましたが、私たちは少し違ったスタンスで進めることになりました。たとえば、にいがた地域映像アーカイブの場合、学術利用を想定した研究素材の収蔵・研究施設の性格が強いのですが、私たちは映像を作品として尊重して、専ら閲覧の便をはかる公共図書館のような役割を想定しています。したがって、権利処理も複製や改編などの権利を要求することなく、ウェブ公開に絞った非常にシンプルな文章で、書類作成には映像制作業者の意見も取り入れました。

当課で貸出している約 80 作品と、京都市歴史資料館の館内上映の作品、公益財団法人京都市文化観光資源保護財団が主催の民俗芸能公演の記録映像など、あわせて約 200 作品を年度末にはウェブ公開できるよう頑張っています。また、今回の取り組みの経過やノウハウについても冊子にまとめて公表するつもりですので、お楽しみにしていただけたらと思います。

久保田：ありがとうございます。権利関係は非常に難しい問題だと思いますけども、今のお話、非常に参考になる、ためになるお話でした。ありがとうございました。

私も東京文化財研究所でも、デジタルデータをどういように残していくかという問題は、日々の課題として考えております。たとえば今、ODA（オプティカルディスク・アーカイブ）という 100 年持つといわれているハードディスクの親玉みたいな機械がありますけど、そういったものに最終的には入れていくのが良いのではないかな。ただ、書き換えとかは難しいので、あらかじめよほど整理した形にしてからでないと入れられないんですね。また、さらにその先には、国内にあるデータセンターみたいな所に保管するという方法もこれから考えなくてはいけないのではないのかなとも思いますし、また公開に関しても YouTube が一般的になっておりますけれども、YouTube はサーバーが海外にありますし、現在は有料化が進んでいるので、また別の形で、ある意味クローズドな環境で公開できるようなものがないだろうかとか、いろんなことを考えて模索をしているところです。またそのあたりも、おいおいお伝えできればと思っております。

5. 映像発信のあり方

久保田：それでは、残り時間がだんだんと少なくなってまいりました。もう一つ大きな質問は、「発信」についてです。それが伝承者にとって、何がプラスになるのかというような問題だと思うのですが、ちょっと読みます。「本年は、コロナの関係でウェブ配信、つまり画面で見ることを前提に撮影をしていると、出演者（伝承者）から音楽ライブやテレビの舞台中継のような映像を求められたことがありました。その場合、記録としての映像と、いわゆるカッコいい映像というものが併存可能なかどうか、ご意見をいただきたい」とのご質問です。

それから、大島さんに対してなんですけれども、「富山県では非常に獅子舞愛が広がっているという現状をご紹介いただきました。そういったものが、他の地域でも広がるために何かヒントになるようなことがあれば、ご意見をください」ということなんですけども、このあたりはいかがでしょうか。

やっぱり大島さんに、まずうかがいましょうかね。カッコいい映像と記録の話。すでに大島さんの

話もそういう面で、カッコいいというか、そちらのほうにフィーチャーしたような映像だったと思うんですけども、そのあたりのお考えをもう一度お聞かせいただければと思います。また、富山県の異常な獅子舞愛が他でも可能なのかといったお話もどうでしょうか。

大島：クールな映像というのは、撮り方でできると思います。実際の話、今回ご紹介はできなかったんですけども、2019年から2020年までは、フジテレビ系列の地上波の富山テレビというところと組んで、獅子魂TVというのを放送しました。これはちょっと権利上の関係でアーカイブはできない状況で、今お見せすることはできないんですが、15分の短い番組で、カッコいい系の形でやっていました。どちらかという、クールな粋でいなせな団員とか、それと、踊りのかっこよさみたいのを伝えられるようにという形にしていたので、そういったことは記録であろうが何であろうができるはずです。

あと、獅子舞愛の話ですけど、これはやっぱり富山県独特の部分で、それに皆さんなかなか気付いていませんでした。それを、私が獅子舞団員のOBでもあり、それからこういう広告代理店という仕事をしているものですから、そういったことから考えた時に、これは面白く何かできるのではないかなというので、私が中心となって会社の地域貢献事業という形で獅子魂の活動をしています。実際の話、そういう大好きな何かに、祭りにでもいいんですけど、何かが大好きな人を見つけて、そこから膨れ上がらせる。映像っていうのは伝播していくというか、感情が感染していきますので。感染っていうのは今の言葉づかいで良いのか分かんないですけど、そういう何か楽しいこととか、気持ちいいってことは感染していきます。悪いことばかりじゃなくて。ですから、そういったものの作り方とか、発信の仕方さえプロデュースできる人がいれば。必ずいると思いますから、そういうように広げていくと、各地域のいろんなものがより良くなるのかなと思います。

ただ、私が思うに、カッコよくクールというよりは、やっぱり、楽しく敷居を低くして入ることが大事だと思います。どうしても文化とかという形になると、何か上段に構えてカッコよくとか、何か伝統的なものっていう話もあるんですけど、いかにそれを楽しく伝えていくかを重視しなければならない。今文化庁さんが、いろんな古い建物を保存、見るというところから、活用するというところにいっているような気がするのですが、それも映像的には同じなんです。要は、ただ単なる記録ということではなく、さっきも言ったように、記録にプラス刺激を与えて、その刺激によっていろいろなものが生まれるように仕掛ける。私は、その仕掛け方を一生懸命考えてやっているという感じかなと思います。

久保田：ありがとうございます。今のお話を伺うと、ぜひ島根県でもお聞きしてみたいのですが。特に石見神楽とか、ああいう異常な神楽熱のあるものと、それほどでもないと言ったら変ですが他の民俗芸能との間に、何か差があると思うんですけども。そのあたりの熱量の違いとかも含めていかがでしょうか。

石山：そうですね。石見神楽は、先ほど鈴木昂太さんのほうからも事例がありましたように、このコロナ禍の中でそれぞれの神楽団体で撮影し、YouTube 配信など積極的に行っているところが多くあります。また、無料配信だけではなくて、有料で配信をするところもコロナ禍になってから出てきています。

石見神楽の団体の中には、年間40回以上の公演をこなすところも珍しくなく、面や衣装などの道具の確保やメンテナンス、団員や道具を運ぶ車両代、稽古場所の賃料など、経費が多くかかるとうかがっています。コロナ禍で公演がなくなっても、そうした維持費を工面しなければいけないという事

情も、有料配信のような活動の背景にあるのかなと思います。

そういう中で、少し違うお話もうかがいました。石見地方山間部には「大元神楽」という式年の神楽が伝承されていますが、今年がちょうど神楽年にあたる地区がありました。例年通りの規模ではできないんですが、小規模でもやろうという話になったそうです。実はその地区から大正時代に北海道に入植した人たちが、北海道で今も神楽をやっていて、前回の大元神楽（2019年）のときは、北海道の人たちがその地区に来て、一緒に神楽を見るというような交流を続けています。しかし、今回は北海道から現地に来るのは難しいため、地元の大元神楽の様子を YouTube で北海道の人たちに向けて配信したことが、地元紙で報道されました。

恐らく、このような出来事はコロナが流行しなければ起こらなかったのかなと思います。これはこれで一つ、石見の人々の神楽に対する熱量の現れ方かなと思っています。

久保田：ありがとうございます。確かに、今のコロナ禍で映像を活用した事業をやると、普通では集まらなかった遠隔地の方と交流を持てる。これはコロナ禍でも良かった点なのかなとも思えてきます。

6. 映像作成のリテラシー

久保田：残り時間が少なくなってきました。もう一つ、川村さんに対するご質問がございます。映像を作成するリテラシーの問題ですね。「川村さんがおっしゃったリテラシー向上の必要性は大変共感しました」と。「たとえば、小学校で朗読があるように、そういった表現を育むような授業、動画編集の授業というのも必要なんじゃないか」というようなご意見なんですけど、そのあたりはいかがでしょうか。

川村：そうですね。可能ならば大学の授業で行うべきだと思うし、実際に映像に関する講座も開講されていると思います。また中々難しいけれど、博物館でも公開講座などを開いてみたいものです。

私が映像を学んだのは、昔、大阪の民博におられた大森康宏さんっていう、映像人類学者の草分けというか、日本で推進されてきた先生からです。彼は映像人類学をフランスで学んでこられました。たとえば、ジャン・ルーシュとか、向こうの映像人類学者、エスノフィルムなどを積極的に勉強されている時に、初期の民俗映像作品なんかを日本のテレビ会社に供給することもされていました。日本だったら「すばらしい世界旅行」とか、ああいった作品をチョイスされているわけで、実は、すごくテレビ番組なんかとの親和性は高いんです。さっきの大島さんの話とちょっとかぶってきますが、エンターテインメントとしての、今だったら批判的な文脈もあるけれども、異文化のエキゾチシズム性みたいなものを紹介するような番組にも携わっておられたわけなんですよ。

だから、今日のお話をいろいろとうかがってきて、関さんからも結構突っ込んだ話もうかがって、実はテレビとかのマスメディアと、研究者や行政が作る映像は、対立部分というか違う部分もあるんだけど、いろいろと可能性を探っていくと、地続きの部分もあるだろうと思います。

リテラシーというのは、そう難しく考えずに、要はわれわれが日常享受しているテレビや映画、近年は YouTube といった映像・動画を、どうわれわれが見てるのかということ、もう少し顧みるっていうか、反省的に見る必要があるなと思います。なぜこの動画がかっこいいと思うのか。あるいは、これがクールだと思えるのか。あるいは逆に、「この映像、何でこんな退屈なん」とか、「もうあかん、眠たい」とか。そのように思う画とはいったい何なのか。そもそも動画とはどういうものなのかを顧みるような機会があれば良いなと。それは、大学の授業でおこなうだけではなく、博物館でもそういう機会を設けていきたいと、個人的には思っています。自分で音を付けてみる、付けてみな

いとか、動きの中でスローモーション入れるだけでもこんなに違うとか、そういったところを自覚的に見れるかどうかということが大事です。

私は、自分で学びながらプレミアとか、ファイナルカットとかの編集ソフトの中で、こんな使えるやんとかいう形で試してみるわけですね。ただし自分が記録映像として撮った時は、スローモーションみたいな効果ってやっぱり使えなかったんです。だけど、地元に戻してやる時には、そういう編集効果を結構、使うようになりました。

地元の意味というか、意図っていうか、やっぱり自分の顔がゆっくり動いて長く写っているのが楽しいわけですね。そういうものを作ると喜んでもらえるし、そのような技能をフィードバックして記録映像なんかの細かな描写にも使えると思うんです。

そんなことも含めてのリテラシーっていうのかな。映像そのものを自分たちが見て楽しんでいる、その時の感覚みたいなものを反映させるようなやり方について、もっと共有度を上げていきたいなと思いますね。

7. これからの映像記録の可能性と課題

久保田：ありがとうございます。何かまとまってしまったような感じですけども。それでは最後、皆さま方から、本日のご感想・ご意見も含めて、一言ずつ頂いて終了したいと思っています。じゃあ、またこっちからずっと行って、コメンテーターのお2人まで行きましょう。よろしくお願いします。

関：今のお話に関することですが、実は映像記録を撮る時に、昔は音楽を入れなかったんですね。音楽を入れないっていうのが一つのリテラシーでした。それはなぜかというと、悲しい時に悲しい音楽をかければ、悲しいって言っちゃうわけですね。文化財の映像記録としては過剰な演出になってしまう。でも最近思うのは、いろいろやり方だとか、映像の大きさなんかいろいろ変わってきて、目的性の問題があって、軽い音楽だったら付けても良いなって最近思うようになりました。リテラシー、記録映像を作るときのいろんな作法は、もうだんだん変わってくのかなというのは、正直申し上げて思っています。

あと、行政はカッコいいとか、そういう映像を認めていないんじゃないかみたいなことをおっしゃっていますけれど、でもあれですよ、祭り囃子なんかはやっぱりカッコよくやっていますよね。うちの映像でも見ていただくと、どうしてやっているのかという質問に対して、若い女性が「カッコいいから」って言うんですよ。それを私はいい感じだなんていうふうに感じて、まさに効果のためにそれを語っている映像を挿入する。そこはなにか少し主観的になってますけれども、でもそういうものだと思うし。民俗芸能は、貴重だから伝承されていくのではなくて、やっぱりカッコいいとか、面白とかってというのが当然あるわけです。

本日は大変いろいろ示唆的なご発言もあって、私はほんとに勉強になりました。どうもありがとうございます。

久保田：ありがとうございました。では、石山さん、お願いいたします。

石山：今日私は、2つの神楽の話をさせていただいたんですけれども、どちらも先ほど言った石見神楽のように、自分たちで積極的に発信をするというような段階にあるところではありませんでした。そういうところもあるということは、今後も変わらないと思います。

もちろん、保存会の中で撮りたい人、自分たちの芸能を紹介したい、発信したい人が現れたら、どんどんしていただきたいと思っています。しかし、各団体にそういう人が1人いるかないかで状況

は大きく異なると思います。そうした中で、行政として記録映像を撮ることで、保存会の活動や後継者の育成に寄与できる側面はあり続けると思うので、今後も頑張っていきたいと思っています。

今日、私からはほとんどお話ができなかった活用の部分が、島根県は遅れていまして、今日もいろいろと、他県とか、自治体さんのお話をお聞きしていますと、いろいろと皆さんが知恵を絞って取り組んでおられるようなので、また今後も勉強して、島根県でも進めていきたいと思っています。本日はありがとうございました。

久保田：ありがとうございました。では、谷部さん、お願いいたします。

谷部：先ほど、テレビの舞台中継のような映像を当事者から求められるけれども、これと記録映像との併存は可能なのかという質問があったかと思います。質問者の方の意図とは、ややずれるかもしれませんが、私自身は、この質問、すごく重要なのではないかと感じました。これにつきまして、併存が可能かどうかということではなく、恐らく撮影の目的が違いますので、両方あっていいのだろうと考えます。誰が、何のために、誰に対して、何を発信するのか。これらのことを考えながら、いろいろな映像を作成していく。先ほど川村さんが「リテラシー」とおっしゃっていましたが、私の理解からすると、こういった撮影の目的とか対象とかを考えながら映像を作成することも、またリテラシーに関わることなのだろうと思います。これまで映像は、当事者からすると撮られるものだったと思うのですが、それが今度は自分たちで考えて撮影し、発信するものになってきた。ここが大きいかなと考えています。今回の私の発表ではいい面ばかりが目立ちましたが、もちろん危うい面もあるかと思っています。それらも含めて、やはりリテラシーと関わる部分が大いにあるのではないのでしょうか。

ただ、現在はまだ始まったばかりなので、どうなるか分かりません。しかし、他人に迷惑をかけない範囲でとりあえずちょっとやってみて、何が起ころのかを検証しながら進めていく。その中で、記録映像にフィードバックできることがあれば、それを活用し、反対に当事者たちによる撮影では、記録映像から映像の撮り方とか、効果音の付け方とかを取り入れる。たぶん YouTube で発信している人たちは、その道のプロばかりではないでしょうから、そういう技術を真似しながら、レベルアップしていくこともあるかと思います。そういった意味で、いろいろとまずは併存しながらやっていくことが、さしあたり重要なのではないかと感じました。以上です。

久保田：ありがとうございました。では、大島さん、お願いいたします。

大島：今日出席させていただいて感じたのは、やっぱりコロナ禍の映像っていうのは、どうしても何か実感がないといえますか、縮こまっているような気がします。早くこのコロナがなくなってくれて、どんちゃんやりながら、やっぱり祭りの楽しさや興奮を体感させるような映像、そういった視聴者に憧れとか、モチベーションを引き出すための楽しい映像を作っていきたいと思います。

そんな中で、皆さんが自由に映像を撮って、どんどん発信されていく。そっちのほうは、やっぱり伝播力が強いといえますか、仕掛けることなく勝手にもう広がっていくのかなと。また、そういったなにか熱量のある映像のほうが、もう誰が撮るか分からないんですけれど、そういう映像のほうに力を持つ社会にもうなってしまうということに、まず私自身も気付いていかなくはいけませんし、それをまた皆さんにも呼び掛けていくことをしていけないといけないんだろうと、私自身は思っています。

なにせ、変わってしまっています。もう本当に、子どもから大人、おじいちゃんおばあちゃんまで映像を発信できる。それも、皆さんが今持っているスマートフォンからできるということが、一番大きく変わったところです。それを映像を作る側、それを管理する側も肝に銘じて、変化していくこと

に柔軟に対応していくことが必要なのかなというように思いました。

久保田：ありがとうございます。川村さん、お願いいたします。

川村：結構、先ほど言いたいことも言っちゃったんですけども、最後にちょっと学者に戻らせてもらおうと。鈴木くんが午前中にいっぱい紹介してくれたように、あるいは今、大島さんがおっしゃったようないろんな形で映像が発信されている。だけど、しょせんバーチャルじゃんみたいなところはあって。逆に、ああいう映像で「うちで踊ろう」みたいなものが今後どうなるんだろうかと。これはコロナが去った後に完全になくなるのかどうか。いつか民俗学で、民俗か風俗かみたいな言い方があって、持続性みたいなものが問われたけれども、そういうことをわれわれはちょっと考えてトレースしていけないといけないと思います。

それと同時に中期的に考えていくと、テレビ配信して、あるジェネレーションがすごく盛り上がってくれる。そして芸能が復活したりするようなことはあるけれども、これが果たして世代から世代につながっていくんだろうか。実は、私はすごく疑問を持っていたりするので、そういった部分も粘り強く見ていく必要があるだろうし、それは文化財としての保存活用という問題にもつながってくるだろうと思います。そのあたりを研究者のサイドっていうのは、ちょっと気を付けて見ていけないといけないなと思いました。

久保田：ありがとうございます。では、森本さん、お願いいたします。

森本：今日はいろいろ刺激的なお話を聞かせていただきまして、ありがとうございます。奈良県は、映像に関してはなかなか進んでいないんですけれども、先ほど川村さんがおっしゃったように、やはりバーチャルだと制限がありますので、できるだけ早く状況が良くなって対面でいろいろできるようになれば良いなとは思ってます。ただ、その時を迎えるためには、映像を使って今しのげるところ、あるいは記録できるところを淡々とやっていくことが必要かなと思っています。

伝承に関して言えば、コロナに限らずですけども、ちょっと昔みたいな一緒に集まってという機会がすごく少なくなってきましたので、映像を使ってできるだけ簡易にというか、その助けになるようなものが作っていけたらなと思っています。

それから、もうひとつは外部との連携です。この21日にも天理大学の松岡薫先生の授業で、五條市の篠原おどりの体験型ワークショップをやることになっています。先ほども言いましたけれど、奈良県立大学、京都市立芸術大学とか、あるいは大阪市立大学の先生たちとも一緒に伝承活動をやったりしています。今後はやはり、地域だけではなくて、外の伝承者を集めるためにも映像の力を活用していけないといけない。そのためには、先ほど「かっこいい」というお話がありましたけれども、かっこよく情報発信する必要があるのだと思います。たとえば、盆踊りだと、俚謡山脈という民謡の魅力を発信しているDJユニットがいて、一番最近だと泉州音頭でDJミックスをやっていました。そういう形で、やっぱりかっこいいという形にまずなっていけないと、なかなか若い人もやっていけない。そうした都市との交流と言いますか、外部との連携も考えていけないといけないんだろうなと思っています。

文化財保護行政の範疇を出るようなところがあるかもしれないんですけれども、やはり今後はそういうことも考えて、やっていけないといけないんだろうなと思っています。また感想みたいになりましたが、以上です。

久保田：ありがとうございます。では、最後に村上さん、お願いいたします。

村上：どうもありがとうございます。先ほども少し申し上げたことになりましたけれども、これまで

文化財サイドでやってきたような、保存会というか伝承者と、文化財サイドとの間での1対1のやりとりだけで続けていくことは、もうたぶん難しい。

先ほどの大島さんがおっしゃったような、不特定多数の獅子舞を好きな人たちに発信することによって伝承力がアップするという面は、たぶん伝承を壊す面も実はあるのかもしれませんが、しかしながら全体としてはアップする面があるということは重要だと思います。要は、研究者と文化財サイドだけで設計・実行するのではなくて、いろんな立場の人を包み込んだ、何かしらの動きというのが必要になってくるであろうし、当然そこに、川村さんがおっしゃったようなリテラシーが大きく関わってくるんだろうと思います。

映像の力というのはやっぱり非常に大きいと思いますので、映像の制作・発信・活用のあり方を動態的に把握していく、常に検証していくっていうことを、それはやっぱり東文研さんが中心にやってくださると思います。それにわれわれはいつもご協力させていただくような形になるかと思いますが、やっていかなければならないですね。

ほんと今日は勉強になりました。どうもありがとうございました。

久保田：どうもありがとうございました。長丁場になってしまいましたけれども、さまざまな問題点が出てきました。また質問の中でちょっとご披露できなかった問題もありました。たとえば多言語化といった問題です。それから、今回はどうしてもコミュニティーとの関わりで、祭りや民俗芸能の話が中心になっておりましたけれども、無形民俗文化財ということで申し上げますと、「民俗技術」、ものづくりのほうですね。そちらの分野でも、やっぱり職人が最後の1人といった状況が、あちこちで起きております。そういったものをどのように映像で記録していくのかということも、非常に重要な問題だと思います。ですから、対象やジャンルの問題も考えなければなりません。

さらに、新しい技術が次々と出てきておりまして、今日はメーカーの方や、そうした技術関係の方もいらっしゃるのですが、そういう新しい技術をどう使っていくのかということも課題になるかと思っています。

まだまだ課題が多い世界ですので、私ども研究所でも、そして共同研究でもそういった問題を扱っていければと思います。また引き続き皆さま方にもご協力いただきながら、こういった情報を収集して発信していけたらと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

本日はどうもありがとうございました。ご登壇の皆さま、ありがとうございました。

アンケート集計結果

1. 参加者・視聴者

当日参加者 一般 22 名、スタッフ 13 名 ※感染対策のため最小限の関係者のみ招待

映像配信視聴者 118 名 ※登録者のみの専用サイトにて公開

2. アンケート回収率 当日参加者 11 名／回収率 50%
映像配信視聴者 29 名／回収率 24.5%

3. アンケート集計結果

(1) 回答者内訳

所 属	伝承者	行政機関	教育機関	博物館	企 業	研究者	学 生	その他
(名)	1	25	1	3	2	5	2	1

(2) 満足度

①満足度

	非常に有意義	有意義	有意義ではない
(名)	26	14	0

②満足度の理由（自由回答・主な意見）

- ・コロナにおいて映像はタイムリーなテーマだと思います。私個人にとってもそうです。
- ・映像記録の作成の現状と課題、先進的な取り組みが理解でき、参考になりました。
- ・市町村、都道府県、国、専門家や民間の方まで、様々な立場の方々の取り組みを知ることができ、参考になった。
- ・令和 4 年度に映像記録の作成を予定しており、実施例が数多く紹介されて非常に参考になった。予定事業についても盲点や課題が見つかり、今後に活かしていける内容だった。
- ・保存と活用の両方の観点から事例が発表され大変参考になった。特に情報発信についての事例は、保存に偏りがちな行政の取り組みを転換させる契機になると感じた。また、本市の過去の映像撮影時にも話題にあがった「名人芸」「ベテラン」といったワードにも触れられており、撮影の視点を考える参考になった。
- ・新型コロナウイルス感染症の影響により、無形民俗文化財の公開中止、継承の停滞、保存会内でのコミュニケーションの希薄化が多く、保存会で共通の課題となっており、「行事の無い生活」への慣れ（場合によっては負荷の少ない楽な現状への慣れ）による継承へのモチベーション低下、一時的休止から恒久的な休止への懸念が増してきている。この中で、映像技術及びネットワーク技術を活用した公開、練習、意思疎通への関心が高まっているため。
- ・ややテーマが拡散しすぎていた印象を持ちました。もう少し絞って 2 回に分けたらもっとよかったのではないかと思います。

4. アンケート抜粋

(1) 今回のテーマに関して、ご意見や感想などありましたら、ご自由にお書きください。

【映像記録の作成・公開に関する意見】

- ・文化財の記録作成に関して、紙媒体の場合には、編集者や出版社、印刷業者の姿勢が問われることはあまりないのに、映像メディアでの制作者については問題提議がなされ、毎回、決して解決されません。それだけむずかしいということなのではないでしょうか。
- ・都市近郊に残る無形民俗文化についても、コロナ禍だからというわけではなく、存亡の時期を迎えていると感じています。コロナにより、それが加速し、さらに地域博物館としても、積極的に調査すらできない状況です。事例のような積極的な映像化がされない無形民俗文化についても、記録をできる限り残していくことはできないかと思いました。
- ・あまりテクニカルなお話はなかったのですが、スマホで手軽に撮影し、発信できることと、民俗芸能を目的を持って記録することの間には大きな溝がある気がしました。関さんが発言したように、女性が加わったらそれ用に映像を撮る等、いかに「今」を後世に残すか、SNS等で広めることも大切ですが、博物館としては、「記録としての映像」を重視していかざるを得ないのではないのでしょうか。最後に川村さんが発言したように、別撮りではなく、その記録映像を編集することで、紹介用の映像も作成できるのではないかと思いました。
- ・継承が難しくなっている保護団体に直接話を聞く機会があるが、今は伝承できなくなっているものも、伝承版の映像があるからいざとなればそれを使って何とか継承はできるかもしれないと言われている。ただし、よくよく伺うと今は演じられていないものも見たことがあるとか、子供の頃にやったことがあるなどの、なんらかの経験がある人には思い出すきっかけづくりになるようであるが、経験がない人が伝承版を見てもできるようになるのかは考える必要がある。

上尾市の方がおっしゃっていたが、同じ芸態でもさまざまな人、あるいは様々な方向から撮影して記録に残しておく必要もあると思うし、また言葉（文章）としても、残しておく必要がある。

- ・文化財の映像記録や発信の点では、誰もが簡易に撮影やインターネット等の発信ができる時代ですが、伝承者として、記録保存の立場から後世に継承する最も大切な部分（正確な内容）を記録し発信したいと考えています。
- ・民俗芸能の存続が、少子高齢化だけでなく、コロナによって更に困難になってきている中、映像として残す意義が益々高まっていると感じました。各県市町村の取り組みで、随分差が出てしまっているんだと愕然としました。
- ・鹿嶋市には鹿島神宮の大祭の一つである祭頭祭という神事があり、この中で祭頭囃という当番地区が奉納する民俗行事があります。しかしながら当番地区は早くて20年ぐらいに一度担当になるだけで、20年後に祭頭祭に関わることにに関して地区が覚えているかという点で難しく、辞退する地区も多くなっています。保存継承を目的とした祭頭囃保存会（昭和55年設立）はあるものの、道具や衣装の貸し出しなどしか行っておらず、映像記録等（設立当初にビデオ記録あり）の活動をしてこなかったため、近年当番地区からマニュアル的なものがないのかという意見が寄せられ、映像記録を検討していたところ「令和2年度文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業（地域無形文化遺産継承のための新しい生活様式支援））」の採択を受

けられたため、現在記録映像を撮影中であります。3月9日、3月12日が本番となるため（1年を通して祭頭祭にかかわる行事がある）、当日の記録を行い、どのようにYouTubeで公開していくか検討中でした。今回のテーマについて各事例を聞いたことにより、どのように効果的に活用できるのか検討していきたいと思います。

- ・コロナウイルス感染対策の為に祭が出来ない間、記録してきた祭映像をどう公開・活用するかを考え精査する時間とすることが出来ればと思います。今回お話があったように、行政内だけでなく、伝承者の方や、映像作品を見る一般の方々の意見もという双方向での事も意識していきたい。
- ・映像を活かし配信することで、伝承者が伝承部分にとらわれず創造するという行為についてごく自然なことでありながら、民俗としての視点ではかなり厳しいことであるというのはとても感じていましたので、今回の協議会を通じて再度考えることとなりました。

【今回の内容についての評価】

- ・今の映像についての現状が示されていたと思います。したがって、今考えるべき課題も見えてきた気がします。
- ・発表者それぞれの方々のご報告、それぞれが示唆に富むもので、それは「テーマ」がタイムリーで、かつブレイクスルーとなるものであったと改めて感じました。なお、強いて申し上げると、この続きとしての「各論」（より分化させた）研究報告も期待。記録、保存、活用、普及、人材育成、メディアへのアプローチ、エンタテインメント…etc。
- ・担い手不足やコロナ禍による祭事の中止など民俗芸能が存続の危機にさらされている中で、各自治体、民間、学術機関での映像・メディアを媒体とした保存・活用の取り組みや考えを知ることができ勉強になりました。上尾市の文化遺産ガイドのHP素晴らしいです。
- ・作り手の考え方として、地域づくり系と伝承用系の混在があったように感じられました。コロナは無形民俗文化財継承の問題を顕在化させただけで根本の問題は変わっていないという点についてはそのとおりだと思います。「村終い」、切実です。
- ・当事者（伝承者）が自ら映像を製作、公開できる時代となり、今後は保存会公認レベルの動画から、非公認の私的視点からの動画など、様々なものが見られる状況になることと思います。その中で、行政が作る映像記録がどうあるべきか、今一度考えてみる必要があると思いました。
- ・川村先生のおっしゃるように、映像のリテラシーを身に付ける必要性は強く感じました。そのような研修があれば、ありがたいです。
- ・自身が持っている映像記録の概念が大きく変わりました。記録される側も発信できる側へなることができるという内容は大変面白く拝聴しました。
- ・コロナ禍における無形文化財の情報発信の仕方は関心があったので大変有意義でした。
- ・今回の協議会映像では、地元が積極的なことを前提として、また事例もそのようなものが多かったように感じますが、地元が乗り気でない場合についても考える必要があるのではないかと感じました。
- ・昨年といい今年といい、獅子舞関連の方の講義はどういう訳か自慢大会になるようなので、今後は御一考願いたい。研究者や行政関係者といった一步退いた立場、見地からの事例報告のほうが大いに参考になります。

- ・著作権に関する話題に触れられたことは、同様の事例に直面している行政職員として参考になった。
- ・先進事例を知ることはできましたが、保存団体当事者の生の声ももう少し聴きたかったです。
- ・大変興味深い話題であり、議論でしたが、最後に少し出ておりました過去の記録映像の扱いについても、もう少し触れていただければと思った次第です。
- ・①民俗伝承の持続方策の模索についての議論をもっと展開してほしかった。②著作権や肖像権などの権利処理の煩雑さ、解消方法への言及をもっと突っこんでほしかった。③村じまい衰退化の山村奥地などの稀少貴重な伝承にもっと焦点をあててほしかった。

【その他】

- ・直接関係ありませんが、調査に行く前に YouTube 動画を必ず拝聴してからいきます。もちろん、変わっていることも多いですが、参考になることも多いです。研究者を含む素人が撮った映像でも、とても意義のあることと思っております。こういったものを集め、より精緻な検索機能を持たせたアーカイブがあるとうれしいです（もちろん撮影者の権利関係の処理は必要ですが）。
- ・東文研で作られた『無形民俗文化財映像記録作成の手引き』を改めて読んでみなくてはと思いました。東文研さんはみなネットにアップロードして下さっているので、嬉しいです。読み直します。
- ・コロナ禍における失敗例の分析も大事になるかと思われます（やりづらいでしょうが…）。例えば、政治案件、観光案件による、ステークホルダー（アクター）同士の衝突、利益配分などの蓄積も大事になると思いました。

（2）無形民俗文化財の映像記録・映像発信等について、よい事例をご存知でしたら教えてください。

- ・飯田市美術博物館のプラネタリウムでの民俗芸能プログラムの上映（浜松市も実現可能性を模索している）。
- ・臨場感のある疑似見学体験（VR 等）のための映像技術、音響処理、映写方法などについて、浜松市文化財課では楽器博物館、静岡大学情報学部との共同研究を計画している。現状では研究対象とする「西浦の田楽」の行事再開を待っている状態であるが、今回の協議会は再開後の速やかな研究活動開始への参考とさせていただきます。
- ・浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会では、大学の研究室や学生団体と協力したネット配信を行っているほか、加盟団体（保存会）単位でも、狭いお堂内で行われ多くの方が鑑賞できないような芸能について、モニターを設置して外や離れた場所からでも見られるように工夫し、そのノウハウを連絡会内で共有している。
- ・携わったインタビュー映像記録では、地元の人と事前の聞き取り調査を何度も行いました。その中で、今までの過去の祭に関する調査では知る事が出来なかった事実を今回の記録映像準備の聞き取り調査により知るといふ、副産物も得ることが出来た経験があります。
- ・福岡県京都郡苅田町の「等覚寺の松会」調査では、10 年ほど前から記録映像作品以外にも、毎年ハンディーカメラで主要行事の記録撮影が行われています。近年、年度ごとに階層化したデータベースを作成したことから、年度ごとの祭の変化や、この年は所作を一部間違えている

が、この年はこうしているなど、映像による細かな所作や習慣の調査も可能となってきました。

- ・nippon.com では現在、全国の CATV 局と連携して地域の情報（主に広義の文化財）を多言語で発信しています。その選択、動画編集などを受託していますので、ご協力できることがあるかも知れません。
- ・京都市文化財保護課では、京都市で製作したり他者が製作した映像作品を貸出ししてきましたが、このたび文化庁の新しい生活様式支援事業の採択をうけて、権利処理を進めて WEB 公開にとりくんでいます。にいがた映像アーカイブなど先進事例を参考にしつつ、今あるべき（今できる）権利処理を模索しながら、新しいスタイルを考えています。
- ・やはり上尾市のものが最良と思います。私自身は蓮田の関戸の式三番でモーションキャプチャや天井にカメラを設置、3 世代の舞手の舞を記録、わざ言語の記録を試みましたが、予算不足で中途半端に終わりました。
- ・京都市内で市登録無形民俗文化財「千本えんま堂狂言」が早くから映像のアーカイブと YouTube での発信をしており、コロナ禍にも迅速に対応されていました。
- ・本町（※編者注 福岡県糟屋郡須恵町）でも平成 24 年度から 30 年にかけて民俗芸能の動画を 17 本撮影して参りました。須恵町の民俗文化シリーズ
(https://www.town.sue.fukuoka.jp/kanko_bunka_sports/rekishi_bunkazai/1/2571.html)

町においても宅地開発に伴う旧住民と新住民との混住、組合加入率の低下、子ども会の脱退等さまざまな地域課題を抱えています。そのような状況の中、民俗芸能が地域や人のつながりづくりの一つのツールになりうるのではないかと思います、映像記録を活用することができないかと思い、本研究協議会を視聴しました。

(3) 無形文化遺産の伝承の保存・活用全般に関して問題や具体的なお困りごとなどありましたらご自由にお書きください。

【記録作成における問題点】

- ・伝承の保存・活用に研究者の存在は欠かせないと思います。当市にも重要無形民俗文化財や記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財があり、その研究者はそれなりにおられますが、現在市指定や未指定の民俗芸能全般の調査研究をされている方がほとんどいないことに危惧しておりますが、成す術が思い当たりません。
- ・現時点で休会している団体が少し出てきて、記録作成の必要性に迫られている。一度にすべての団体を記録するのも困難なので、どのように優先順位を設けるべきか思案している。
- ・同系統の民俗芸能を伝承する隣接地域の仲が悪い。調査時にやや混乱しがちです。
- ・映像の話ですが、文化庁の補助事業でくだらない映像作品がたくさんできてしまう状況で、私のところでは、もはや修正も、ストップもできない事態になりつつあります。少しでもましなものに、とがんばっていますが、「もう直りません」といわれると、どうしようもなくて。バブルみたいな補助金で動画産業に資金投入するのはやめてほしいです。実力ある業者に頼めればいいのですが、それこそ発注者もリテラシーが足らないので、不良業者にだまされたような形です。業者のためにもなりません（成長しないので）。文化庁のマークつきのくだらない映像は日本の恥です。

- ・住民意識の高まりに対し、人なし、金なし、時間なし。多くの小規模自治体が抱えている問題だと思います。国庫補助金メニューがあっても、ストーリーの組立てや保存団体との調整など、担当職員の業務負担が大きく、どこから着手すべきか途方に暮れています。

【映像記録の公開に関する課題】

- ・当方では20年以上にわたり記録映像を作成してまいりましたが、現在、その活用について苦慮しているところです（例えば作成したDVDの在庫など）。そのあたりについて、ご教示いただけますと幸甚に存じます。
- ・兵庫県教育委員会、県立歴史博物館等にこれまでの文化財調査で作成された映像資料が未整理のまま収蔵されています。現在、その整理を行っていますが、予算の関係や調査時のメディア（VHS、DVD、音源のみなど）のままであるため、計画を立てることが難しい状況です。活用も含めて、今後、中長期的に検討しなければならないと考えております。
- ・記録映像は完成しているが、まだ公開についてが進んでいない。上尾市さんのような広く一般公開されたハードディスク型の公開方法を学んでいきたい。YouTubeという不特定多数の方が見ることが出来る公開についてのリスク管理についても学びたい。
- ・過去の映像資料の効果的な活用、再編集への予算措置（行政側）。ここ数年の保存会内での意思疎通不足（保存会側）。

【コロナ禍における無形民俗文化財の状況】

- ・コロナ禍によってより顕在化してきた保存会の高齢化、後継者不足はかなり深刻な問題だと思っています。
- ・コロナがやばいです。祭りはおろか、会合も練習もできていない状態です。三年目に突入しました。次世代を担う子どもたちにとって、三年のブランクは大人が思う以上に恐ろしく長いです。まだ表面化していませんが、無形民俗のそれぞれの会員の減少に拍車がかかるのではないかと非常に心配しています。
- ・2年の中止が、今後の再開に大きな負の影響を与えるのではないかという不安があります。担い手の高齢化と少子化は、私たちの自治体でも大きな問題です。
- ・①特に過疎地域での伝承者の不足。②祭り参加者と、祭りに参加していないものの温度差。③コロナ禍で簡略化して実施したものが、簡略化したものではなく、祭り・行事になってしまう危機。現状で裏方とか準備する方の負担が多く、苦勞が多いという話が多く、簡略化して少しでも負担が減り、神様が許してくれるならとか、そちらの方がつづけられるのであればなど、楽な方になびいていってしまわないか不安。
- ・①民衆が集まっただけの神楽発表が出来なかったのが、祭典を奉仕する側（保存会等・実際の舞人）のモチベーションの低下につながってしまった。②コロナ禍において公民館等感染防止の観点から使用できない状況になった。③後世に伝承資料とするため映像記録を実施したが、撮影技術が素人のため、満足できる記録にならない（今後研究が必要）。
- ・市の指定無形民俗文化財となっている獅子舞に関して、保存会の中で「周知しないで保存会だけで実施しよう」という声も上がったようなのだが、一方で、黙っていてもそういうことはいつの間にか知られてしまうから、結果的に人が集まって「密」が生じてしまうであろうという

意見が出て中止した、らしいことを保存会の役員から最近聞くことができた。地域コミュニティに密接した文化財であることのデメリットというべきか？コロナ禍の中での「知られては困る」という、逆の意味での難しさを改めて感じた。

- ・コロナの影響で、活動を休止している団体がほとんどであり、披露する機会である祭りやイベントも開催中止となっているため、文化継承が危機的状況にあると感じる。

【無形民俗文化財の保存・継承について】

- ・県民や企業などをどうやって巻き込んで運動体としていくか、どう仕掛けていくかが課題と思っています。敷居を低く、楽しくは大切ですが、行政・博物館の苦手とするところですね。
- ・川村氏の「餅は餅屋ではない」は至言。他フィールドからの一般からのメディアなどからの「面白がり」「好奇心のみからの参画」…にも広く、オープンにもできる仕掛け、場や機会の提供、提案なども急務かと。
- ・本題とは関係ないかと思いますが、担い手のモチベーションを高める様な映像が作れないものかと、ずっと思っています。
- ・10年ほど前に活動休止してしまった囃子方を復活させたいが、同じような事例があればお示しいただきたい。
- ・他の事項でも記載した祭頭祭において、囃の継承（祭り行事のため正式な囃譜面や作法などが口伝だった何が正式なものかわからなくなっている）や、衣装の課題（昔は参加者が自分で用意したが、一人20万円近くなることから近年【20年近く】は鹿島神宮から貸出を行っている）などがあります。今回の補助金事業で制作する映像においては、一つの参考例となるものを目指しているが、どこまでの基準となるものが満たせるか検討課題です。また途絶えてしまった神殿神楽も復活をさせたいが、なかなか地区の方たちで意識があがらないのが課題です。
- ・後継者不足の解消のために、本来伝承され続けてきたことを「変えて」行うような場合は、どこまで許容できるのか、ということを感じています。

(4) 今後、この研究協議会で取り上げて欲しいテーマやその他のご要望などがありましたら、ご自由にお書きください。

【映像記録をめぐる諸問題】

- ・行政主導の映像記録(とくに全体の長尺も)について、演出面に踏み込んだスタンダードづくり。
- ・映像制作をブラックボックスにしない為に何度でもトライしてほしいと思います。
- ・映像記録の公開＋アーカイブに絞った議論をお願いしたいです。
- ・今回の映像記録についても当事者による記録が紹介されていましたが、無形文化遺産の記録化において、文化財関係職員、研究者以外の市民(当事者だけではなく、サポーターを含む)の手で水準の高い記録が作成できる仕組みについての議論できればと思います。
- ・過去の記録映像に記録される「民俗誌」をどう読み解くのか、といった内容に興味があります。
- ・今回初めて視聴させていただき、多ジャンルの方がたのお話を拝聴することが出来、共通する部分や異なるご意見など、さまざまな視点からのお話を聞いた事が大変有意義に感じました。その為、次回も多くのジャンルの方々のお話を期待しております。映像享受側の方々や伝承者の方々など実際に映像の力によってメリットを感じていらっしゃる方や、活用していらっしゃる

る方々の生の声を映像でお聞きしてみたい。

【無形民俗文化財の保存・継承に関わる施策】

- ・無形民俗文化財の開催を支援する民間人の募集、育成について。
- ・保存団体に対する支援は、おもにハード面（用具の整備等）が中心となっていて行われています。ハード面はもちろん大事ですが、今後はソフト面がますます重要となってくると考えられますので、そうした方面もテーマとしていただければ、と思います。
- ・消えかかる無形文化財をどのように後世に残すか（市町村の指定にもならない文化財が危機にあります、又、立派に指定を受けている文化財についても後継者育成に苦慮している中、伝承者の側に立ったテーマを取り上げて欲しい）。
- ・①「無形文化遺産」の担い手の育成及びそのシステムづくり。②「プラットフォーム」の仕掛け（仕組みづくりと活用）とそのための予算、資金、寄付、ファンド…などのサクセス事例の検証。③広く関係人口（関係地域と併せて）との関係などの事例報告や、運動、活動、地域と市民参画、メディア参画の好例なども。
- ・川村先生もおっしゃっていた、コロナだけでない今の問題。つまり、ゆるやかな「終わり」に向っていくことを正面からとりくんで、どうしていくのか。日本の無形民俗文化財の保存（廃止？）にむけたグランドデザインを考える時期に来ているのでは？無形民俗文化財の全てが残るわけではないということを示して、どのようにしていけば残るのか、残すべきか、ということも、重要な提起です。
- ・鹿嶋の祭頭祭などのようなあまり他に事例がないような祭り行事の取組み（保存など）や保存会の役割などをテーマにしてほしいです。

【新型コロナウイルス感染症と無形民俗文化財】

- ・引き続き「コロナ禍における伝承活動への影響」について取り上げてほしい。
- ・来年度はコロナ禍での3年目の年です。今までの蓄積を踏まえた上で、多少大掛かりなコロナ禍での無形民俗文化財を捉えるための研究会などが実施されるとすれば、とても楽しみです。

【その他】

- ・予算も限られた地方自治体では、会場に出向くことが難しいのでオンライン配信していただくと非常にありがたい。今後もオンライン配信を続けていただければ大変うれしいです。
- ・以前にもありましたが、再び、学校教育と無形民俗文化財について、扱っていただけたらと思います。あとは、これも以前にあったと思いますが、アーカイブス化の取り組みについても、テクニカルな側面から扱っていただくとありがたいです。
- ・報告書など文字記録を作成する際に盛り込むべき情報や、書き方について。

第 16 回 無形民俗文化財研究協議会報告書

Report of the 16th Conference on the Study of Intangible Folk Cultural Properties

映像記録の力—危機を乗り越えるために—

The Power of Video Documentation : to Overcome the Crisis

令和 4 年 (2022) 3 月

Issued in March, 2022

編集・発行

独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 無形文化遺産部

〒110-8713 東京都台東区上野公園 13-43 TEL 03-3823-4925

Edited by the Department of Intangible Cultural Heritage,
Tokyo National Research Institute for Cultural Properties
Independent Administrative Institution National Institutes for Cultural Heritage
13-43 Ueno Park, Taito-ku, Tokyo 110-8713 JAPAN